

を去るに、多く書卷を讀めば書卷の氣上升し、市俗の氣下降するが如きものであると。またいふ、俳諧は門戸なし、俳諧の門を以て門とする。畫論にいふ所の諸名家、門戸を分つことなくして門戸自ら其の中に存するものであると。またいふ、友とするは、其角を尋ね、嵐雪を訪ひ、素堂を倡ひ、鬼貫に伴ふ、日々この四老に會し、はつかに市城名利の域を離れ、林園に遊び酒を酌みて談笑すべく、而して句を得るは不用意の中にあるべきである。

この俳諧の意見を以て見れば、蕪村がいかにも俗俳諧者流と異なるかを知ることが出来る。蕪村はつねに俳諧禪を唱へたのである。それは俳諧の自在にある、師の句法に泥まず、時に變じ時に化するにある。されど、まづ蕉翁の寂榮を慕ひ、古に歸らん事を思ふ。これ虚に似て内に應ずるものである、稱して俳諧禪といひ、傳法の法といふがこれである。蕪村はかくも蕉翁の古にかへらん事をいふも、時代の趨勢は殆ど異なる方面に向はしめた。かくてこそ蕪村の眞意は達し得らるゝのであつた。蕪村の俳風を以て芭蕉の俳風と比較して見れば、その態度に於いて、蕉の主觀的なるに對して、村は客觀的であつた。その題材に於いて、蕉の自然に取れるもの多きに反して、村は人事に取れるものが多きを占めて居る。その趣味に於いて、蕉は閑寂を事とするに立つ事を得た俳諧の未だ足らぬ積極的方面を補つて、こゝに眞の俳諧を渾成したたのである。これがまた天明調の特色であつた。

蕪村は複雑なる人事の活動を見て、客觀的にその委曲を盡さうとした。されば、時間的關係をも詠じて、

御手討の夫婦なりしを更衣

の如き、一小説を讀むの感あるものさへあつた。かくの如き時間的經過を描き出すに際し、その十七字の小詩形は遂に多くの歴史的事實を捉へ、また多くの典故の據るべきものを取つた。詩の「王在靈沼於切魚躍」を引いては、

名月や神泉苑の魚躍る

といひ、陶淵明の「春水滿四澤夏雲多奇峯」によつては、

雲の峯四澤の水の涸れてより

といひ、『伊勢物語』によつては、

虫啼くや河内通ひの小提燈

といひ、『枕草紙』によつては、

短夜を眠らで守るや翁丸

といふなど、一々擧ぐるに違なき程である。限りある十七詩形の中に豊富なる思想を盛らうとする、勢ひ簡潔なる漢語を使用しなければならぬ。また句法をば漢詩に取らなければならぬ。そこで蕪村は、

祇や鑑や髭に落花をひねりけり、

月に對す君に投網の水煙り

これまた以て當時詩文の流行の自ら然らしめたことを知らねばならぬ。その編著に『新花摘』『玉藻集』『昔を今』『一夜四唸』等があり、後人の編に『蕪翁句集』『蕪村句文集』がある。また『蕪村七部集』とて、『其雪影』『明鴉』『一夜四唸』『花鳥篇』『桃李』『續明鳥』『五車反古』を輯集したものもある。

蕪村はもと巴人の後をついで二世夜半亭と稱したが、高井几董は更にその後を承けて三世夜半亭と稱した。几董に『井華集』がある、苦心の吟誦すべきものが少くなかつた。

かく蕪村を叙し去るに臨み、しばらく筆を六仙客以外に轉じて、蕪村の先蹤をなし、天明調の趨勢を導いた、炭太紙に就いていふ所がなければならぬ。

その句作にあたりては、苦心の極、俳諧三昧に入つて家を出でざること七日十日の久しきに及んだといふ。嘗てその俳諧三昧に入つた折の事、時雨の中のかゝり湯に侘び居た時、人より沸した風呂を荷ひよこして贈り物とせられたに飛び入り、心ゆくまで浴して、さて吟するやう、頭巾脱いで戴くやこのぬくい物と。脱俗の態度や自ら發して清新の調を成したのである。主とする所は人事の方面であつた。

盜人に鐘つく寺や冬木立

剃て住む法師が母の砧哉

の如きは、其の一例である。太祇は一の新技巧を工夫した。人の會話をそのまゝに句中に詠み入るゝ事がそれである。

な折りそと折りてくれけり園の梅

怖すなり年暮るゝよと後から

かくの如きは當時また川柳に於いても著しき現象である。これ複雑なる人事を叙するに最も便よきものであつたからである。太祇はまた『鬼貫句選』の撰者である、而して蕪村亦鬼貫を推して四老の一となした。二者おのづから契合する所のある、實

に時代の風潮の然らしめた所といはねばならぬ。

曉臺(二三九二—二四五三)は名古屋の人、暮雨庵、龍門等の別號がある。壯年の頃は江戸にも住みまた京都にも住んだが、遂に京都に居を卜し、蕪村と共に俳諧中興に力を盡した。その詠には洗煉蕪村に亞ぐべきものがある。

闌更(二三八七—二四五九)また京にあつて京都東山双林寺中に芭蕉堂を結んで閑棲した。その風體は平淡の趣に掬すべきものがある。

蓼太(二三七八—二四四七)に至つては、更に濶雅の極、平俗にすぐるものも少くなかつた。江戸の人、御用縫物師である、雪中庵二世吏登の門に入つて俳諧を學び、後に雪中庵三世と稱した。その門葉頗る廣く門人三千餘人に過ぎ、文臺を許せる高足四十人以上であつた。著書も亦甚だ多く、二百餘編を以て數へられた中にも『附合小鑑』『發句小鑑』『天狗問答』など夙に世に普及せるものであつた。蓼太はまた蕪村の風調を模倣したのであつたが、恃む所は才である、故にそのいふ所は、やゝもすると理窟に陥り、説明に流れ、或は俗氣に堪へざるものがある。これその句の人口に膾炙せらるる所以である。

世の中は三日見ぬ間の櫻かな

五月雨やある夜ひそかに窓の月

むつとして歸れば門の柳かな

の如き、人のよく暗する所である。

白雄(二三九九—二四五二)は信濃上田の藩士、春秋庵と號した。江戸に出で、白井烏醉の門に遊んだ。その詠する所時に纖巧に陥るものがあるとはいへ、流石に清新の趣を認められる。しかし白雄の俳諧史上に於ける功績は、その創作の方面ではなくて、後進を誘掖する所であつたことである。その著に『俳諧寂菜』といふものがある、平易なる俳論として世に知られ、一時その道の指南車となつたものである。

ひとり『俳諧寂菜』ばかりではなく、當時俳諧をば漸く批評の立場から見、學術の立場から見て研究しようとする風を生じた。即ち『俳諧古選』を著はした三宅嘯山、また『蕉門俳語録』を著はした五升庵蝶夢の如きは、その一例である。俳諧の道は、かの歌學が累をなした如く、また種々の法式方則をも生み出すに至つたのである。中興の業はさしも一時榮えたものゝ、樗良歿し、蕪村去り、蓼太、白雄、曉臺、闌更等また相踵いで逝いて以來、俳壇の趨勢は日に非にして、卑近平易なる俳論の流行と相俟つて、すべてを俗化しようとするに至つた。

以上俳句の方面は略之を盡したと信ずる。されどつひに叙せざるべからざるものがある。横井也有によつて代表せらるゝ俳文即ちこれである。これこそ當代俳諧文學中に於いて、蕪村の俳句と共に最も誇るに足る作物の一である。

也有三三六二——二四四三はもと野有、また蘿隱半掃庵、紫江知雨亭の號がある。名古屋藩譜代の重臣、御番頭御用人の要職に就いたが、やがて隱居して、悠悠自適、日々吟詠にいそしむに至つた。はじめ漢學を小出侗齋から學んで造詣するところがあつたが、俳諧をば同藩の先輩で且つ芭蕉の門人であつた山本荷兮にまなび、後には支考の門人を師とした。也有また和歌狂歌に達し、和歌には暮水、狂歌には螻丸を以て世に聞えて居た。著書に『蘿葉集』『蘿の落葉』『峨洋篇』『俳諧夢之蹤』等がある。

也有は温厚圓滿の人であつた。遜窩隱君子と稱せられ、或は恭儉和慎適の五徳を具せる賢者と稱せられた。されど、徒に嚴正事に當るのではなく、滑稽の奇才の躍然たるものがあつた。或時美人と鬼との畫に題して、美人の傍に「もあり」と書し、鬼の上にもまた傍に「もあり」と書し、更に「百合の花」とつけ加へ、姫もありまた鬼もあり「百合の花」として藩老を瞠若せしめた有名の話もある。也有は俳諧を以て一の遊戯と視た。いはく「風雅を以て家業を妨ぐべからず、家業を以て風雅を妨ぐべし、せぬも其の日の

俳諧にして、障るも其夜の俳諧なり」と。またいはく「仁義道德は別に師あり、狐狸の輩に欺かれて俳諧と混すべからず」と。これ實に俳諧を以て生命とした芭蕉の態度とは全く異なるものである。またいふ「いか程雅語艶語を御つかひ候、根が俗談の俳諧に馬子の摺小木のと申してはやさしからず候、それをかき交てわがせこが虱つぶすの、いもの禪洗ふのと申候ては何とやら不都合に聞え申候」と。この俳諧を俗談といふ主義は、之を蕪村に比較すると亦全く異るところである。

也有の遊戯主義とその天職の滑稽の才とを最もよく發揮したのは、俳句の方面ではなくて『鶉衣』によつて知られた俳文である。俳文ははじめ芭蕉によつて基礎をなし、許六支考があつて之を鞏固にし、こゝに也有が出で、大成するに至つたのである。芭蕉は自らもいふ、われは俳諧文として書いた事はない、今多く狂文を見て俳諧文と思ふのは謬見である、われは『源氏物語』『狹衣物語』『土佐日記』等皆俳諧文であると思ふと。されば、氣品の高いことからいふと優秀なるものがあれど、寧ろ雅文に近い一種の混淆文にすぎぬものが多くあつた。たゞその中に施された滑稽は、許六支考に至つて大に其の趣を加へ、また俗語・漢語・雅語のすべてに亘つて語彙を豊富にして、所謂俳文の一體を成した。それが也有に至つては更に縦横の才を揮ひ、恰も囊中のものを搜

ぐるが如き状がある。一體俳文とは俳人の感興を隨筆的にあらはしたもので、いはば俳句をば散文體にいひあらためたものである。俳人が古今の一大事變をも日常卑近の一瑣事をも同一様に見なし、遊治郎の愚言をも聖賢の箴言をもひとし並にひなす脱俗超世の態度は、自ら俗中の雅を最もよく現はすに適する文體を生じたのである。也有いはく、

只和漢の故事古語を知り俗の諺にも入りわたり、その影を用ゐてあらはならず、長きを縮め堅きをこなしして俗にならず、雅に過ぎず、主意よく本末を貫きたるをこそ、調へたる文章とはいはぬ

と。也有の『鶉衣』前後續遺の四卷は、この意見を殆ど的確に具體的に現はしたものと、いうてよい。その取る所の題目は大方卑近のものであつて、而も必ず中に一種の見解を藏して居る。されど、その見解の多くは世故人情に通達せる餘に出でたものであつて、人生の缺陷を認むるとはいへど、敢て之を抉出しようとするでもなく、たゞ平然としてこゝに矛盾に對する笑を洩し、また滑稽の境に遊ぼうとするのである。その淺くとも和漢に亘れる學識は、これを現はすに無上の便宜をなし、その君子と稱せられた人となりは、よく滑稽をして賤俗に陥らしめなかつたのである。

『鶉衣』は蜀山人の手によつて刊行せられたものである。その序する所によると、安永の初年、也有の七十歳の頃、隅田川の邊、長樂寺に於いてその『借物辯』を見て大に感じ、その『鶉衣』を見るに及んで、とみに上梓の企をなしたのであると。而して拾遺篇に序したものは六樹園である。蜀山人も、六樹園も、生前也有と相知らず、俳文に於いて私淑したのである。されば、後の狂文の流行も、實に也有が後塵に立つものであつた。

第五章 川柳の消長

滑稽と洒落と諷刺とが滔々風をなせる當代の思想を、最も明にいひあらはしたものは川柳である。この新文學の起つたは江戸の地である。輕快洒脱なる江戸人士の氣象は、遂に之を生ずる事なくてはやまなかつたのである。今こゝにその發達の跡を辿らうとするには、まづしばし、山崎宗鑑の古からせねばならぬ。

宗鑑の頃、二句のみの附合をなすものがあり、また附句のみで意味の明瞭なるものをも出した。『犬筑波』にいふ、

きりたくもありきりたくもなし

盗人を捕へて見ればわが子なり

と。『油糟』の如きも、『犬筑波』の前句に附句を試みたものであつた。その風が延いて前

句附となつて京坂に榮え、やがて貞享元祿に至つて江戸に盛になつた。前句附とは、宗匠が下の句即ち前句を出して上の句をつけさせるのである。之に應ずる者は十六銅を出して入花料とする。それがやがて宗匠の口餌と化するものであつた。當時前句附の宗匠は未だ專業の者なく、俳諧師が之を兼ねてゐた。元祿六年の「咲くやこの花」の點者には、池西言水・小西來山等があり、別本には青木鷺水・瓜生晚山・椎本才麿があつた。春臺の『獨語』には前句附が流弊を生じたる狀を詳かに叙して居る。

前句附の法は、宗匠より下の句を出し、多くの人に上の句を附させて、點に第一第二の品を命じ、甲乙の次第に隨つて賞を行ふのである。その賞或は布帛或は器物など若干の直ある物を出し、その品物に望みなき者には其の價の金錢を出すのである。これを得ようとして、貴賤となく句を附けて點錢を費す、則ち博奕の類であつた。世俗これを好むほどに、下の句に上の句を附けるも猶むづかしくて、宗匠より上の句の初五文字を出して、次の七文字五文字を諸人に附けさせる事になつた。冠附とも笠附ともいふがこれである。

いつの間に 片しは失せて雛の後家
さまざまに うその品きく大晦日

の如きは、其の一例である。『獨語』には記されてはないが、また「春附」といふがある。宗匠末の五を出して、上の五七を附けさせるのである。

道樂な息子に嫁を 取つて見る。

の如きがそれである。一向に褒美を取らうとする程に、いよく賤くなり、寛永の頃から冠の五文字を三ツ出して、三ツ冠に各七文字五文字を附けさせて勝負を分ける事があつた。是が三笠附である。これすでに博奕に近きものであるが、その後五文字の冠をも出さず、下の七文字五文字の詞をもやめて、唯數の文字を封じて外より其の數をはかり、札を入れて其の數の當れるを勝として、金錢を與へるのであつた。これこそ全然博奕であるけれど、猶本の名を存して三笠附というた。この三笠附が盛になつて、賤しき者は勿論士君子も之に力を盡し、多くの財を費し、身を失ひ、家を亡すものさへ數知らぬ程であつた。されば、享保のはじめ町奉行から嚴禁の命が下つた。爾來布達頻に出で、その多い時には、一歳の中に三四回にも及んだ。かくて三笠附は漸くその影を收めたが、寶曆の頃また前句附の流行を來した。江戸座の俳諧が流行して、かの洒落風・化鳥風・五色墨の徒が謎めいた句を吟じ、また滑稽洒落を盡してよみ放つたのが、なほ易きに移つて前句附の再興となつたのであつた。柄井川柳はこ

れ等の點者中の錚々たる者であつた。

川柳(二三七八—二四五〇)名は正道、通稱は八右衛門、綠亭とも號した。淺草阿部川町の名主であつた。寶曆七年萬句合の興行をなして以來、年々の例となり、また月次の千句合などをも興行した。寶曆の末、集るところの句一萬六千句中、秀逸四百四十を選んで細字に認め、大半紙五六枚に印行して摺り出した。その細字の曆に似てゐるとして、世に曆摺または曆板ともいふ。曆摺中更にまた前句なくとも一句のみにて句意の解し易きを集めて一帖となし、『いもせ川柳樽』第一篇となした。時は明和二年(二四二二)である。おもふに、古昔の樽は柳で作つたから、その名から思ひついて、この中にうまいものありとの意を含めたのであらう。これよりさき、四時庵紀逸といふがあつて、萬句を興行した折、高點を附けた句を集めて『俳諧武玉川』といひ、相續いて十篇を出版した。『柳樽』の體裁は蓋し之を模倣したのである。

こゝに於いて、前句附の點者であつた川柳は、前句を離れて附句を獨立せしめたのである。前句附が獨立すべき趨勢は古くからあつた。元祿の頃から前句に七七の短句または五七五の長句をおくことは漸く少なくなり行きて、
きびしかりけりきびしかりけり

日本の本は空までとゞく假名遣

の如く、たゞ七音を繰返すが如き類が却て多くなり行くのであつた。即ちこの繰返しの如きは、附句にあつては寧ろ取り去るも妨なく、殆どすでに獨立の狀であつた。川柳はこの趨勢によつて、俳句の形式を假つて、俳句以外の世態人情を詠じようとするのである。一世やがてこれが風靡する所となつた。その句を川柳點の句といひ、通常略して川柳といふのである。川柳が寛政二年歿するまでに、『柳樽』は版を重ねて二十三篇に至つた。その子二世川柳をつぎ、二世の弟三世を嗣ぎ、二世の門人風統庵賤丸四世をついだ。我が川柳は轉じて次期の化政時代に入て、斯界いよ／＼隆盛を極め、『柳樽』の刊行ます／＼加はつた。さはれ四世に至つて、風體の革新を謀つて、『柳樽』をば俳風狂句と改め稱した。その意は、未だ全く前句附の域から離れはてなかつた川柳をして、獨立の地位を占めさせようとしたのである。されど如何せん、その末いよ／＼廣まり行きて、その風體日に非なるものとなつた。

今や事の便を以て川柳のその後の變遷を略叙するに、四世の後をついで五世となつた者は水谷綠亭である。綠亭は井上文雄、加藤千浪と交り深く、歌學にも通じて居た。その時内には天保の飢饉あり、外には黒船の騒亂あり、勤儉の令は頻りに出でた。

五世はその間にあつて柳風式法を定めた。その主なるものを抜けば、

政事に係りたる事は何事によらず句作選みなど致すまじき事

近世の貴顯官員の實名など、句中に取結びたる風調堅く引墨致すまじき事。

句選の規則は天朝を尊敬し、敬神愛國を旨とし、昔の貴人忠孝道德五常の教導、技

藝の名譽、奇特の句體を尊み高番に据うべき事、右は自然善行の道句案に浮み、勸

懲の一端にもなるべきが故也。

かくて川柳はすでに其の精神に於いて亡び盡した。阿世の極、ついに川柳の川柳たる所以を失はうとするに至つた。されど表裏明暗の差いよく、甚しく卑猥口にすべからざるもの、却つて其の數を加へたのである。その子六世をついだ、かくて七世となり八世となつて、已に明治の人となつた。これ等すべて形骸の相承を事とするに過ぎなかつた。故に川柳を知らうとする者は、しばらく四世以下を顧みずともよい。

要するに、川柳は初代に於いて最もよく其の特色を發揮したのである。川柳はその不羈なる點に於いて遙に俳諧にまさつて居る。言辭の選擇は勿論、切字また季の法則もなく、語數も時には過不及を許し、形式すべて自由である。剩へ人生の事苟くも題材中のものならぬはなく、和歌の優美以外、俳諧の洒脫以外、所謂人生の隱微か、れた人生裏面の美は、その闡明する所となつた。戲場といひ、遊廊といひ、蔭間、後家下女居候など、和歌にも俳諧にも洩れてゐるが、川柳に於いては此の上もない材料となるのである。初代川柳は、其の『柳樽』第十六篇に於いていふ、前句にかゝはらず、古代時代事趣向よろしければ、高番の手柄あり、すべて戀句、世話事、賣色、下女様の句に新しき趣向むすべば、手柄多し、味ひて考ふべしと。四世川柳また『柳樽』九十二篇に於いていふ、高き殿上人の上品より、武士の四角なる、町人の丸き、丁稚の買ひ喰ひ、居候の氣がねを始め、傾城、藝者、後家娘、おかこに、下女に、夜鷹まで、何んでもかんでも選り取りや柳の縁が十九文、横町の其の裏店のうがちまで、餘さず、漏らさず、途方のなき穴までと。そのうがちや、その穴や、また滑稽や、やがて江戸氣質の表彰である。警拔にして寸鐵よく人生の缺陷、世態の真相を活寫せる、諷刺の極めて鋭なる、その特質である。徒らに卑俗を以てこれを棄つべきでない。

賣据と唐様で書く三代目

吉原があかるくなれば家が闇

仲人は雨までほめて歸るなり。

人魂のいちけて飛ぶはかゝり人
 など滑稽の中に眞理あり眞情あり笑ひの中また涙の籠れるのが、即ち川柳の川柳
 として大に稱すべき點である。

かの五世川柳が口には卑俗を避くといひながら、

徳に入る門戸を叩く手習ひ子

未廣の皇國仁智を磨き骨

の如く、却て卑俗に陥つて自ら知らざるこそ大に笑ふべきものである。

この川柳を發生せしめた滑稽洒落の情調は、地口・口合・語呂合の流行と共に、やがて洒落本・黄表紙となり、狂歌・狂文となつた。されば川柳は即ちこれら洒落本・狂歌の素を成せるものといふべきである。

第六章 狂歌狂文の隆盛

さきに生白堂行風や油煙齋貞柳を出した上方の狂歌も、文運の東漸と共に今は江戸に移つた。しかも狂歌が文藝上價值あるものと認められたのは、江戸の地を得てからである。輕快と機智と滑稽とは、實に江戸の人の特性である。詞句の止にのみ滑稽を求めて居た貞柳等の狂歌ならば、兎も角今は漸く進んで人生の矛盾、人生の裏面にも眼を注ぐに至つては、その奇想を天外より拉し來る江戸子の氣風を俵たねばならなかつた。まして鼓腹擊壤たゞ泰平の甘きに酔ふ江戸の春には、不平もなく、煩悶もなく、耳目に觸るゝ所、片つ端より混ぜ返し、洒落のめし、嚴肅なるべき人生を茶にして、人をして頤を解かせないではやまなかつた。この地この時を得て、ともすれば和歌の餘興俳諧の餘技と見られ勝ちであつたものをば、全然獨立の文學とはなしたつたのである。これが魁をなしたものは、唐衣橘洲にして、朱樂菅江これを承け、太田蜀山に至つて所謂天明調の風體を完成し得たのである。橘洲がいへるやう、かく世にひろされるは實に赤良・菅江が勳にして、予は只陳涉が旗上げのみなり」と。赤良とは蜀山の初號である。また評する者はいふ、菅江は樊噲である、赤良は張良であると。この三傑あつて、狂歌の天下は定つたのである。

橘洲(二四〇三—二四六三)本名小島源之助、醉竹庵と號した。田安家の士で、若い頃から内山椿軒に就いて學んだ。椿軒は通稱を傳藏號を賀邸といひ、和漢の學に通じ、また和歌を好み、かねてまた狂歌の嗜もあつた。橘洲その和歌の會に於いて「臨期變約戀を、今更に雲の下帯ひきしめて、月のさはりの空ごとぞうき」と詠みたる時、椿軒深く狂歌の趣を得たというて賞した事や、橘洲に唐衣といふ號を附けた事、また菅江も

蜀山も共に其の門から出でた事を思ふと、或は天明調の祖は椿軒を以て推すべきではなからうか。橋洲に『若葉集』の撰及び『狂歌初心抄』の著がある、家集をば『狂歌醉竹集』といふ。

菅江は本名山崎景基、御先手與力、また椿軒に和歌を學んだ。菅江一に漢江とも書く。その狂名を朱樂といふは、衆と酒宴の折、我のみひとりあけら菅江としるしたのに基く。その撰集に『故混馬鹿集』『狂歌千代のためし』等がある。

二人の出でたはじめは、好事の徒が時折の即興を詠するに過ぎなかつた。それが一の狂歌の會合をなすに至つたのは、橋洲にはじまる。事は明和の頃であるが、幸に其の時の有様を橋洲親しく『弄花集』の序にしるして居る。

その頃は友とする人、わづかに二人三人にて、月に花に予のもとにつどひて、莫逆の媒とし侍りしに、四方赤良は予の詩友にてありしが來りて、大凡狂詠の時の興によりてよむなるを、ことがましく集ひをなして詠む痴漢こそ嗚呼なれ。我もいざ痴漢の仲間入せんとて、大根太木てふ者を伴ひ來り、太木また木網、知惠の内子、をいざなひ來れば、平秩東作、濱邊黒人など類を以て集るに、二歳ばかりを経て、朱樂漢江また入來る。是亦賀郎先生の門にして、和歌は予が兄なり、和歌の力も

て狂詠おのづから秀でたり。かの人々より予がもと或は木網が庵につどひて、狂詠漸く起らんとす。赤良もとより高名の俊傑にして、その徒を東にひらき、菅江は北におこり、木網南にそばだち、予も亦ゆくりなく西によりて、共に狂詠の旗上げせしより云云

更にまた蜀山はその隨筆『奴風』に於いてしるしていふ、

大根太木、きり金を請取に市令の腰掛にありて、かたへに湖月抄を讀むえせものありしを尋ねれば、大野喜三郎といへる者にて、京橋北紺屋町の湯屋なり、是もとの木あみの事なり。この妻もまた狂歌をたしみて、智惠の内子といへり。それより四方の赤良を尋ね來り、太木もくあみ伴ひて橋洲を訪ひしなり。彼此相照らしてこれを見れば、殆ど目睹するが如きものがある。

この頃は、必ずしも次期に於けるが如く、市井下流の徒のみではなかつた。町與力であつた橋千蔭も、橋八衢とて、和歌の外に時々狂歌を詠み、蜀山の撰に係る『萬載集』には自筆の跋を添へた者であつたが、その集のあまりに行はるゝに及び、その跋を除いて出ずに至つたとの事である。また秋田藩士で御留守役なる平澤平格も、手柄岡持の戯名を以て、狂歌壇に起つたが、千蔭と交り深く、狂體の長歌の贈答をなした事は、そ

の狂歌詩文の集、われ面白』に載つて居る。かくも身分ある士が一の娛樂として嗜んだものが、いつか專業の狂歌師を生ずるに至つた。そのはじめは、天明の末、三河屋半兵衛といへる本屋の剃髮して齒を黒く染め色黒きが、狂名を濱邊黒人といひ、狂歌の點を取つて、半紙に摺つて世に出した。その板料を入花と稱した。これより狂歌の點料を取らうとする者、また其の歌の上梓せらるゝ事を欲する者頻りに出で、宗匠いよゝゝ多きを加へ、その趣味も年を追うて下行するに至つた。

しかしながら、それは勿論蜀山等の與り知る所ではない、蜀山はその詠吟に於いて天明調を代表するのみならず、その生活に於ても天明の狂歌師を代表して居るといふても然るべきものである。

蜀山(二四〇九—二四八三)はもと四方赤良と號した。本名は太田覃、字は子耕、南畝、杏花園、巴人亭、滄州樓、寢惚先生等の數號がある。蜀山といふのは、四方山人を草體で連書した爲に讀み誤られたのを、その儘に用ひたとも、或は銅座の事にて仕官し、銅の異名を蜀山居士といふ事から號したともいはれて居る。幕士御徒組の家に生れ、はやくから椿軒、松崎、觀海、まや、澤田、東江に就いて和漢の書を學んだ。天明二年十七歳

平鬢の學問吟味に於いて、學問出精一段の事に候、此の度吟味候處、學術も相應仕候とて、銀子十枚を賞せられて、一代の榮譽を得たこともある。その後或は『孝義録』の編輯に與り、或は大坂の銅座、長崎の貿易を監督するなど、よし大に榮達の途を得たといふのではないが、決して失意の境遇として自暴自棄などすべきものではなかつた。

蜀山が文壇に立ちはじめたのは、明和四年の『寢惚先生文集』初稿の著述であつた。時に十九歳。平賀源内之に序していふ、詩或文若干首、徑治秦漢之派、直至開天之域、辭藻妙絶、外則無之哉、先生雖則寢惚、探臍能知世上之穴、與彼學者之學者、臭者相去也遠矣。と。まづ狂詩を以て最初の作となしたが、その狂歌をはじめたのは安永の頃からである。直に世に認められて、

詩は詩佛書は米庵に狂歌おれ藝者小萬に料理八百善

ともいふに至つた。されば、その歌や書を得ようとして請ふ者多く、あまりの煩はしさに、扇子、扁額、屏風、服紗、唐紙、和唐紙、いやな羽織の胴裏まで、はてなければ、上中下の品を定めて、上は詩歌の心を辨へたる人、名人の畫の讀、美人の直き頼みを上として、速にし、詩歌の好みなく何にてもよいと云ふ人を中として、預り置き、惡畫、惡紙、和唐紙を辨へざる者を下として、書かぬ事と、その書齋に壁書せざるを得ざるほどであつた。

蜀山はその趣味極めてひろく、ひとり狂歌ばかりでなく、和漢の學、また俗曲歌舞、その他風俗の變遷にも心を凝めて研究し、幾多の好著述を成した。故に博學多識の士を以て稱せられ、或は儒者にして、蜀山は輕俊の才子にして學問も純正ならねど、その人となり如何なる大人君子に對するも諂諛の氣なき一節のみは、捨て難しと評する者さへあつた。その交友極めて多く、種々の階級に充ち満ちて居た。賀茂季鷹、小山田與清、上田秋成とも知己の間であつた。戯作者界にあつては殆ど絶對の權威を有し、その批評は大にそれ等の膽を寒からしむるものがあつた。京傳が著作に専らになつたのも、蜀山に賞讃せられたためである。その外、文人の著作の世に行はれずして空しく埋没しようとするものが、蜀山の一言を得て、はじめて普及するに至つたものも少くない。たとへば、横井也右の『鶉衣』、建部綾足の『折々草』の如きはそれである。かくも文壇に於いて仰ぎ見られた蜀山の狂歌は、果して如何なるものであつたらうか。著作に『吾家狂歌髓腦也』、其他一時漫興、宜屬皮毛」と自らも稱した『蜀山百首』、『めでた百首夷歌』、『狂歌百人一首』、『千紅萬紫』、『萬紫千紅』、『千とせの門』。撰集には『萬載狂歌集』、『狂歌才藏集』等がある。蜀山は橋洲或は菅江よりも、更に遠く言語の遊戯を脱して滑稽の美を詠まうとした。詞の狂歌を離れて、心の狂歌を主としようとした。

いざさらば丸めし雪と身をなして浮世の中を轉げまはらん
この心を以て洒々落々天地の間に嬉遊し、よく飄逸に、よく豪放に、たゞ吟詠ばかりでなく、更に奇抜の行動を以て人を驚かし、多くの逸話の今に世にもてはやさるゝのである。

天明三年の或日、僕を具して外出したるに、折からの大雨に、僕の著たる青漆塗の紙合羽、浸み透るばかりに濡れたれば、

青漆といへどももめる紙合羽油斷のならぬ雨の下かな

その青漆は靜謐をかねたもので、當時幕府の外政内治共に騒がしくあつたのを、有司が世に知らすまいとする状を見て、思はず發した聲である。これ決して他意あるものではなかつたが、幕吏の忌諱に觸れて、一時その職を解かるゝに至つた。

或はいふ、蜀山は青雲の志の達せざるを憤るの餘りに、その鬱情を狂歌に發したのであると。今前に述べた一事も、或はさうした意味にも解せられぬではないが、幕府が急に文武を奨勵してより、上下文武々と唱道してやまなかつた時、蜀山また詠めるやう。

世の中にか程うるさき物はなしふんぶふんと夜も寝られず

と。その意はたゞ狼狽の状を笑ふに過ぎなかつた。その詠の世に普く行はるゝや、「二話一言」に於いて、これ太田が戯歌ではない、太田の歌に時を請つた歌はない、落書體を詠じた歌はないと辯疏する程のもの、決して諷諫し誹謗するのではなかつた。要するに、その主とする所は、

てる月の鏡をぬいて樽枕雪もこんく／＼花もさけ／＼

の外にはなかつたのである。よしや人生の矛盾を見、人生の裏面を洞觀するあるも、敢て之が救済を任とするでもなく、之を嘲罵するでもなく、たゞ樂天洒脫の立脚地より之を指しながら微笑するのに止るのであつた。狂歌の精神は實にこれに存するのである。それは俳人の飄逸はあるも、その脱俗超世を念とするが如きものでない。酸いも甘いも噛みわけた通人の態度で、實社會と即かず離れずの間にある、これが狂歌の狂歌たる所以であるのである。それを充分に現はし得たのは蜀山の技倆であつた。

しかしながら、當時にあつては、蜀山自らは未だその眞精神を認めず、世上またそれを知らず、徒にその頓智の即吟を稱するに過ぎなかつた。さてはまた語句の上の滑稽に終るものも少くない。その多くは古歌を採つて、これを滑稽化するものであつた。

その一二を擧げると、

春日野の飛火のどもり出で、見よイ、いく日ありてワ、若葉つまむ

駒とめて袖うちらはらふ世話もなし坊主合羽の雪の夕ぐれ

の如きもある。同じく古歌を綴りながらも、語を變へた以外に、

女郎花口もさが野にたつた今僧正さんが落ちなさんした

の如き奇抜なものもあつた。

今蜀山の狂歌を終るに當り、一言の加ふべきものは狂詩の事である。さきに説ける如く、蜀山がはじめて文壇に産聲をあげたのは狂詩であつた。一體狂詩とは狂體なる漢詩の謂である、詩の俳諧の謂である。その平仄押韻等は正體の詩形をそのままに取りながら、句は大方和訓により、また俗語をも鄙語をも交へるのである。體としては律も絶も長篇もあつた。蜀山の縦横の詞才はまた之に巧みであつて、『檀那山人藝舍集』、『二大家風雅』の作があり、或は『千紅萬紫』、『萬紫千紅』等にも散見して居る。自ら註を加へ洒落本めかして出せるものに、『通詩選笑知』があり、『狂詩諺解』がある。前者は『唐詩選』に擬したものであるが、之について『李不盡通詩選』を出した。たゞそれには註を加へなかつた。

千柄岡持もまた狂詩に長じ、『我面白』の中には誦すべきものが少くない。その他にもこれに力を注ぐものも多くあつたが、遂に蜀山の右に出づる者はなかつた。

狂歌に狂詩に絶世の才を揮つた蜀山は、また狂文にもその手腕を示した。狂文とはなほ狂歌狂詩と同じやうに、狂體の文章の謂である。これは、必ずしも俳文の如く俗中の雅を欲するのでもなく、卑俗を忌まず、野鄙を避けず、ひたすら滑稽諧謔を主とするのであつた。形式に於いても、必ずしも俳文の簡潔奇警なる句法を以てするのでもなく、なほ狂歌の如く、その言を古ぶりに取つて、その意を古體の言辭で現し難き所に現はさうとするのである。故に、これを以て、徒に尙古の末に流れた雅文に對する反動として見る事も出来るのである。蜀山の狂文を集めたものに『四方のあか』『四方の留粕』がある。題目を狸の圖讀、背面達摩讀、鬼念佛畫贊などに取り、圓轉活脫なる文辭を連ねて、滑稽の妙卑俗の中に溢るゝものがある。されど、その多くは、狂歌よりも言語上の遊戯に走れるものである。これが、後の六樹園石川雅望に比する時は、蜀山はつひ狂歌程の名聲をこの方面に於いて占むる事を得ない所以である。

もしそれ當期に於ける狂文の人を求むれば、風來山人である。その趣や全然蜀山の磊落洒脫と相反して居る。それには一の諧謔なく、一の放笑なく、そのいふ所は言

言火を發せんばかりの毒舌、實に稀に見る嘲世の文である。

風來山人(二三八八—二四三九)本名は平賀源内、鳩溪と號し、戯作には天竺浪人森羅萬象と稱し、淨瑠璃には福内鬼外というた。讚岐侯の足輕の家に生まれ、幼い時から聰明、天狗小僧の異名を得た。後、志を抱いて家を弟に讓つて長崎に行き、蘭人によつて本草の學をまなび、寶曆の末江戸に來つて和漢の學を修め、儒を以て一家をなさうとしたが、その所を得ず、同好の士と物産の會をなして、『物類品隲』を著はし、僅にその鬱を散じた。更に長崎に行きて蘭學を修め、歸來火浣布を考案し、公に獻つてその使用を請ひ、或はエレキテル、セルランとて電氣の機械を發明し、人身から火を取つて病を癒す器械と稱して世に公にし、或は伽羅櫛、金唐革などを作つたが、その多藝多才も一として用ひられる所なく、不遇逆境の中に悲憤の聲をなすに過ぎなかつた。世人の目して山師呼ばりをなすや、之に對していふやう、

智惠ある者智惠なき者を譏るには、馬鹿といひ、たはけと呼び、阿呆といひ、べら坊といへども、智惠なき者智惠ある者を譏るには、其の詞を用ゆる事能はず、只山師山師と譏るより外なし。造化の理を知らんが爲めに産物に心を盡せば、人我を本草者と號け、草澤醫者の下細工人の様に心得、已むに賣るのむだ書に淨瑠璃や

小説が當れば近松門左衛門、自笑其碩が類と心得、火浣布、エレキテルの奇物を工めば、竹田近江屋藤助と十把一からげの思ひをなして、變化龍の如きことを知らず。我は只及ばずながら日本の益をなさん事を思ふのみ。

と。この轆轤の歎を抱いたる風來山人は、その抑鬱の情をば淨瑠璃に發し、更に之を狂文に於いて發した。「この時代に流行るものは坊主金持女の子三絃淨瑠璃、幫間の類なれば、和氏の壁の夜光なるは知らずと、我も天より世を逃れて山林に逃れ、木の實を食して餓を凌ぎけるが、いつとなく仙術を得て飛行自在の身となり、風に任する身體なれば、自ら風來仙人と號すと。かく號して『根なし草』及び『風流志道軒』を著はした。志道軒とは當時江戸名物の一に數へられた軍談師で、淺草寺の境内に松茸の形したる可笑しきものにて節を撃て諸人の臍を宿がへさせ、その猥雜滑稽の中に富貴を嘲り、世相を罵り、痛快の言辭極めて多かつた。源内これを見て會心の笑を洩らしたが、その名を假り、その態度を取つて、おのが懐ふ所を叙したのである。『根なし草』は俳優荻野八重桐が中洲河岸に漁獵の折、あやまつて溺死した評判の高きを利用して、地獄に落ちた事に作爲したるもので、その中に幕政をも赤裸々に誹謗する所があつた。この書は大に時好に投じ、三千部賣れたと自負してゐる。『作者部類』に之を評してい

ふ二千部は貳價なりとも、かく讀本のさかりに行はれたるものは有り難し。當時は國字稗説の未だ流行せざりしかば、この作者また淨瑠璃の新作をもて、一時に都下を噪がしたり。尙ほ文化まで死なすもあらば、必ずよみ本にも新奇を出して、楮の價を貴くすべし。誠に戯作の巨擘なれども、勸懲を旨として、竊に蒙昧を醒すに足る親切の作編あるを見ず、只その奇才を稱すべし、その徳は聞くことなし」と。評するものは全然勸懲主義の上に立つ曲亭馬琴である。そのいふ所時に當を得ざるものあるも、已に『根なし草』の小説的脚色の至れるものあるを認めたのであつた。

しかし、風來山人の特色はそれにあらずして、却て諷刺の短文にあつた。その中でも世に行はれるもの六篇を選び、合刻して『六部集』といひ、歿後門人等の更に六部を附加して、『風來六々部集』と稱したものである。「放屁論」「痲陰隱逸傳」「方婦傳」「蛇蛻青大通」「お千代傳」「飛んだ噂の評」「天狗鬮體鑑定緣起」等すべて憤懣の情の横溢せるを見るべきである。

而して其の文の範とする所、また畫の體裁の據る所は、すべて増穂殘口の『殘口七部書』及び『艶道通鑑』であつた。殘口は國學者で神佛の兩部をかね、その教義を弘めようがために、戯文の體を以てその二書を著はした。風來山人つねに其の文脈を取つた

のであるが、中にも、蛇蛻青大通の如きは、明かに『艶道通鑑』の傳聞昔の段より出でたのである。

『六々部集』は全篇皆罵詈訶笑諷刺の迭出したものであるが、その中でも鋭鋒人をして面を向けしめぬ程、音曲家に、歌人に、俳諧師に、茶人に、學者に、醫者に、あらゆる階級に於いて、一の獨創の見なく、たゞ傳承これ力むるの弊を痛罵したのは、放屁論である。更にその後篇に至つては、その心血を注いで創造せるエレキテルのことに、について述べたもの。西洋の人の電の理を以て一旦工夫は付けども、その身の生涯には事成らず、三代を経て成就し、朝鮮、唐、天竺の人は夢にも知らぬその器も、飯糰、幻術の様に心得られ、關振手づま人形と一ツ事に覺えらるゝ口惜しさ、さりとしてエレキテルより火の出る道理は、一天四海引きくるめての大論、一朝一夕には論じ難しとて、之をばわざと卑下して屁論の中に寓せざるを得なかつたことを思へば、時に涙なき能はざるものがあつた。

實に風來山人の題材とする所は卑俗の域を超へて、すでに猥褻に陥つたものも少なくなかつた。殊に『痿陰隱逸傳』の如きは、その題目の示す如く猥褻口にすべからざるものがあつた。これとても批發的の筆を弄ばうとしてさうなつたのではない。たゞ嘲罵の極筆の觸るゝに任せて、敢てそれを避けやうともしなかつたに過ぎないのである。しかし縦横自在なる滑稽の才は、その誹謗を柔げ、卑猥の感を緩うする事が出来た。これが狂文として大に價值ある所である。

風來山人の不遇なる生涯の幕は、一段の悲惨事を以て閉ぢられた。その理由の詳かな事は知るよしなきも、一時の狂熱から人を殺して牢獄に撃がれ、つひに獄中に憤死した。

おもふに徳川幕府の治政三百年の間に於いて、その權威のもとに壓せらるゝを喜ばなかつた者は甚だ多くあつたが、大方白眼冷笑の態度に出づるのであつた。その中に、風來山人のみひとり満腔の氣を吐く、實に一異彩を放てるもので、わが狂文はこの人を得て始めて生意があつたのである。

第七章 草雙紙の發達

草雙紙とは所謂赤本、黒本、青本、黄表紙の總稱である。この期に於ける草雙紙の發達を叙するには、溯つて前期より始めねばならぬ。

草雙紙とはもと臭雙紙の義である。淺草紙の還魂紙の白く薄きものを二ツ切にし、印刷とても灰墨を以てせる、極めて兪惡なる小冊子であるが、何ともいへぬ臭氣の

ある故にその名を附けたのであつた。貞享元祿の頃のものは、外形は紗綾形または毘沙門龜甲形なる行成表紙で、中は繪卷物を小く印刷したものであつたが、それが後に至り漸く丹色の表紙をかけ、一面に外題を表した。されば、世に赤本といはれたのである。首題とする所は、御伽草紙中の『文正』鉢かつぎの類、童話中の「桃太郎」かちかち山「猿蟹合戦」または辨慶朝比奈の武勇談、さなくば金平淨瑠璃から取材せる金平が武功物語の如き荒唐無稽の小話を繪にてあらはし、これに簡単な説明を附するに過ぎずして、文學としては殆ど價值なきものであつた。毎冊の紙數は僅に五葉だけで、作者は未だ署名せずして、畫工のみが公然署名したものである。それ故、世人も文を讀むよりは、寧ろ繪を賞したのである。然るに、寶曆の頃觀水堂丈阿といふ者あつてその著作の赤本に署名して、戯作の二字を下に加へた。しかし内容に於いては何等加ふる所もなかつた。後の作者皆之に倣ひ、その風は文化の頃戯の一字を削つてただ某作と書するに至るまで續いた。但し、その後でも戯作または戯作者の名目は存在して居た。

當時また黒本といふのが出た。これも内容の相違に基くのではなくて、たゞ黒表紙を用ひる故の名であつた。安永の頃また青本といふのが出ではじめた。こゝは江

戸大傳馬町鱗形屋より出版せるもので、萌黄色の表紙に鳥居風の外題紙を張つた。後、その表紙を黄色に改めてから、一に黄表紙と稱する。しかしまた通じては青本ともいふ。今や黄表紙の流行するにつれて、黒本漸く衰微に歸して古版としてのみ行はれ、赤本は早くも跡を斷つに至つた。黄表紙の體裁たる、小形の小冊子で、大半紙を兩斷し、貼外題にも趣向を凝らし、印刷を鮮明にし、中には毎丁繪畫を挿み、假名書の文と相俟つて興味を起させるやうにしたものである。安永四年(二四三二)に戀川春町が『金々先生榮華夢』を出したのは、實に黄表紙上に一時期を劃した。從來の幼稚なる妖怪談、武勇談はこゝに聲を潜めて、人情世態を寫し、滑稽洒落を極め、更に進んでは時世をも諷刺するに至つた。

『金々先生榮華夢』とは『枕中記』に於いて世にかくれのない盧生が邯鄲の夢を翻案したものである。片田舎に住める金村屋金兵衛富める身とならうとして江戸に出づる途中、目黒の栗餅屋で栗餅の出来る間の一睡の夢に、富豪の婿となつて當代の青年が憧憬せるあらゆる驕奢を盡し、そのはてはもとの木阿彌となると見て、人間一生の樂もわづか栗餅一臼の内と悟るといふのである。これ僅に數葉の一戯作に過ぎねど、よく當時の奢侈なる風俗をうつし、遊子通人の心裏を描き出した事が大に喝采を

博し、三馬の『臆説年代記』にはこの作をば名作二十三部の第一に推し、且評して當世風體この時より始るといひ、また野暮と化物箱根のさきに送るとまでいうた。爾來黃表紙の刊行年々に相踵いで、この趣向を模し、或は流行通言をしるし、或は名優の失策、藝人、遊女の身の上、或は當時頓りに行はれた開帳等、苟も人の噂に上る程のものはいちはやく之を題材とし、而も諷刺と穿ちとを主題とする事をはづさなかつた。實に太平の逸民、才あれども、すべて封建制度の下に屈して伸ぶるに由なきもの、わづかに懷抱する所を洒落滑稽に洩さうとするのである。また上下共に富み足りて、遊客の放蕩は徒に通を誇りて、あらぬ事にうき身をやつした。されば、その哄笑と苦笑と相混じて、こゝに黃表紙の全盛を致したのである。その賣出しは例年正月、價は一冊八文。唐來三和が『天下一面鏡梅鉢』を出せる時には、書肆の門前市をなして製本の暇なく、摺本に表紙綴糸を添へて賣り出したといふ程であつた。

黃表紙の作者極めて多きが中で、世に知られたのは明誠堂喜三二、戀川春町芝全交、森羅萬象、唐來三和、市場通笑である。戯作六家選と稱せられた。とりわけて喜三二、春町の二人を推すべきである。

喜三二(一三三九五—二四七三)は秋田藩士、狂歌に手柄岡持、狂詩に韓張齡、俳諧には月

成の號にて知られて居る。『文武二道萬石通』、鼻峰高慢男、鐘入七人化粧、案内手本通人藏等がある。『文武二道萬石通』は、時の閣老松平定信が時弊を救濟せんために、文武二道を奨励したことを諷刺したものである。畠山重忠が頼朝の命をうけて、鎌倉の大小名の文武のもの、ぬらくら武士とを分てる事にとりなし、そが中に大小名が箱根の遊蕩の狀を叙して、大に諷刺して居る。『高慢男』は親の育ての悪るさに、五歳での角力自慢、八九歳での書畫自慢、十四五歳での儒者自慢、十七歳では心の欲する所則をこえずと氣どり、二十歳で色事を稼ぎ、吉原一番の大盡ともてはやされた青年が、天狗に逢うてその鼻を折られたといふことを記して、當時の親の育ての悪しきことを諷したものである。

春町(二四〇四—二四四九)は本名倉橋壽平、小島侯の臣、江戸小石川春日町に住して居たので、かく號したのである。さきにいうた『榮花夢』を著したのは、その三十二歳の時であつた。翌春『高慢齋行脚日記』を著はして大に名聲を高くした。著作三十種中に『鸚鵡文武二道』、『花鳥かくれん坊』、『三幅對紫曾我』、『楠無益委記』など、その傑出せる者である。『文武二道』は喜三二の『萬石通』の趣向を模し、幕府の文武奨励を指笑したもので、痛快を極めて居る。而も春町は之が爲に幕吏の糺明をうけ、鬱憂の餘りに病

死するに至つた。『行脚日記』には俳諧師、茶の湯の宗匠が弟子共に僞手跡僞茶碗を賣りつけ、俳諧は流行が大事として服装も當世風にさせ、また席料を食するための生花會を開くに、弟子共は遊藝の面白さ、茶花を習へど、まづ最初からの道具好み、はては蹴鞠の稽古、義太夫節、豊後節の稽古、その後には大磯の遊廓にての遊蕩三昧に身を持ちくづすことを記して居る。

これらは勿論一二の例に過ぎない、しかも其の大體の趣をば知ることが出来る。翻つて想へば喜三二と春町との著作は、多くは滑稽のみに終らず、巧みに諷刺と穿ちとを以てしたものである。これ實に黄表紙を通じての特色であるとはいへ、この二人の筆に於いて特に著しいところのあることが認められる。二人を推して黄表紙作者の巨擘とするのも此の故である。

全交は大藏流の狂言師山本藤十郎の戲號である。『通一聲女暫』『烟競蕎麥屋薪』『當世大通佛買帳』『大悲千録本』等が佳作である。中にも『千録本』は名作二十三部中の最傑作と呼ばれ、出版當時飛ぶが如くに賣れ、忽ち板木を磨滅したといはれてゐる。

萬象は桂川中良の戲號、醫業の餘戯作に筆を染め、狂歌には竹杖爲輕、淨瑠璃には源平藤橘と稱した。風來山人の弟子で、才筆頗る師に似てゐる所がある。『夫從以來記』

最も聞えて居る。三和はもと武士であつたが、後に妓樓の主となつて通稱を和泉屋源藏といつた。その著『天下一面鏡梅鉢』が非常なる喝采を得た事は、すでに述べた所である。通笑は骨董商市場小平次の戲號、専ら教訓の趣向をなして、世に教訓の通笑と稱せられた。『大道人穴探』『御物好茶白藝』等の名著がある。

この教訓物は實に黄表紙の黄表紙たる所以を失つたものであつたが、漸くその數を加へ行くやうになつた。その趨勢は更に次期化政時代の劈頭に起つた寛政の風紀振肅によつてなほ一層の度を加へ、遂に一轉して讎討物となつた。その魁をなしたものは、南仙笑楚滿人が寛政七年に出した『敵討義女英』であつた。楚滿人とは書肆彦太郎の戲號である。また筆を讀本に取つて、『復讎岐板川』『報仇高尾外傳』等を著し、敵討本の中興と稱せられた。かくも黄表紙は其の内容を變ずるに至つたが、體裁も亦隨つて變じて、合巻物となつた。こは次期に於いて叙する事とする。

黄表紙の姉妹篇ともいふべきものに、洒落本がある。半紙半截の摺本に厚表紙をかけ、僅に二三葉の挿繪をおいたのみで、本文は三四十葉。その形が當時の蒔蕪に似て居るので、蒔蕪本とも小本ともいはれた。例年新春に刊行し、價は一冊一匁五分乃至二匁であつた。その材とする所は、主として狹斜の風俗である。されば、黄表紙の

滑稽諧謔を従とし、その穿ちを遊廓の世界に限つたものといふべきである。なほまた江戸の好色本八文字屋本とも稱すべきものである。今これを取つて上方のそれと比較する時は、一面時代の推移を知ると共に、東西人情の差をも明に認むる事が出来る。

寶曆七年(二四一七)無々道人の『北洲異素六帖』が、その早く現はれたものと稱せられる。無々道人とは書家として聞えた澤田源鱗の事である。拙きながらも會話體を以てしるしてゐる。なほ此の種の作は少くはなかつたが、その眞に洒落本の體をなせるは、明和年間に多田爺が作れる『遊子方言』である。多田爺とは江戸の書肆多田屋主人利兵衛の事であらう。その後、夢中散人に『南閩雜話』辰巳の園の作があり、蓬萊山人に『婦美車紫廚』の作があつたが、安永七年(二四三八)田螺金魚の『傾城虎の巻』を出すに及んで、大に流行するに至つた。これは當時世の話柄に上つた金貸鳥山檢校が遊女瀬川を金にあかせて身請した事を綴りなしたものである。

一體洒落本は、さきにもいうた如く、苟くも遊廓や遊女に關した事はすべて洩すまいとして居る。されば、その野卑であり猥雑である事は免れ難いところで、到底大文學を以て目すべきでないが、その取るべき點は巧妙なる寫實の筆致である。遊女標客の衣裳はいふまでもなく、その態度その行動に機警輕妙なる觀察を下し、またその會話をもさながらに寫し出して、目前にその人の風貌を浮び出さす。或はこの精細なる描寫と機警なる觀察とを外にしては、文學上何等の價値がないともいひ得られるかも知れぬ。

さきに黄表紙をいふ折に、わざと避けて、その傑出せる作者山東京傳をいはなかつたのは、これを以て洒落本の作者を代表せしめようがためであつた。京傳の妙筆があつて、洒落本は始めて躍如たるものがある。

京傳(二四二一—二四九一)本名は岩瀬醒、俗稱傳兵衛、その屋號の京屋といふによつて、京傳と號したのである。山東とは、その住居が京橋であつて、愛宕山の東に當る故に、いうたのである。はじめ畫を北尾重政に學び、北尾政演とて黄表紙の挿繪を描いた。狂歌は嗜んだが、讀書は好まなかつた。早くから遊蕩に耽り、十八大通の一人なる大口屋治兵衛に従つて、殆ど幫間然たる行爲をなし、そが資によつて流連した。その前妻と後妻と共に吉原の遊女であつた事によつても、その遊蕩を知るべきである。繪筆の餘暇を以て戯作をなしたものの、最初の著といはるゝのは、安永九年の『娘仇討故郷錦』である。文壇に名をなし得たのは、後二年即ち天明二年京傳二十二歳の時の

作『御存知商買物』といふ黄表紙であつた。これは地本屋の赤本金平本等が、不平の餘りに喧擾を極むる事を記したものであつたが、たま／＼蜀山の『繪雙紙評判記岡目八目』に於いて「總卷軸上々吉に推され、急に頭角をあらはすに至つた。その他、黄表紙の佳作には、『心學早染草』、『江戸生艶氣樺燒』、『京傳憂世醉醒』、『地獄一面照子淨願梨』等があつた。就中、『早染草』はその序にも「畫双紙の理屈、臭きを嫌ふといへども、今その理屈臭きを以て一ト趣向となし、三冊に述べて幼童に授く」といへる如く、教訓的のものである。天帝が竹の管もて魂をふき出し給ふに圓きよき魂あり、また妄念妄想の風に吹かれて形のつぶれた悪き魂もある、そのよき魂は人を善に導かうとし、悪魂は惡に誘はうとして、互に相争ふといふ趣向である。この趣向が面白いて大に行はれ、京傳自身もその自畫讚の扇面などには、多くこの善玉惡玉を描いた。また『艶氣樺燒』は、艶次郎といふ若者が幫間醫者より色事の傳授をうけ、すべて色男と思はれようとして、踊子を雇ひて駈けこませ、或は遊里に地廻の男を頼みて打擲させ、はては遊女と情死の狂言をまで企てた事を脚色したもので、よく遊治郎の胸裏を穿つて居る。その好評を得たのは、世にやくざな男をば艶次郎といひ、また艶次郎に描いてある獅子鼻に似たものをば京傳鼻といふに至つたのでも首肯される。

京傳はかくも黄表紙に於いて其の手腕を揮うたとはいへ、未だ必ずしも喜三二春町の上にあつたと云ふ事は出来ない。しかしながら、その遊廓に出入して、心深く觀察した知識のすべてを筆に載するに至つては、眞に無人の境を行くの概があつた。天明五年作とおもはるゝ『客衆氷面鏡』、『息子部屋』をはじめとして、『客衆肝膽鏡』、『通言總籙』、『古契三娼』、『吉原楊枝』、『白川夜船』、『廓の大帳』、『通義粹語傳』、『繁々千話』、『傾城買四十八手』、『京傳予誌』等を出した。描寫眞に迫つて、足未だ大門に入らざる者も、髣髴として身親しく其の巷にあるの思あらしめる。曲亭馬琴が來つて門下生とならうと懇望したのも、この時であつた。

然るに、寛政二年(二四五〇)、幕府は洒落本の流行を以て風俗を壞亂するものとなし、つひに其の出板を禁じた。併しながら、半紙半截の小さなものが僅に二三十枚か多くも四十枚を出でざるに、なほ一冊一匁五分以上の價を有し、貸本屋の見料も一冊二十四文に及んだといへば、版元の利潤も貸本屋の利益も、決して少なくなかつたことが想はれる。されば書肆蔦重の如きは、禁制の掟をも顧みず、翌三年強ひて京傳に囑して『娼妓絹篩』、『青樓畫の世界錦の裏』、『仕懸文庫』を著作せしめ、教訓讀本と稱して公にした。されど、事は直に露顯して、作者は手錠五十日、版元は身上半減の闕所に處せ

られた。

實に京傳程當時の戯作者肌をあらはした者はなかつた。それは著しき賣名の徒であつたことである。おのが名を弘めるためには、如何なる手段をも辭さなかつた。近郷近在の神社佛閣に、山東京傳と染め抜きした手洗手拭を奉納し、或は努めて知名の人の門に出入した。それが『娼妓絹篩』等の著作を試みたのは、藝術上見る所ありての業でなく、眼底たゞ私慾あるのみであつた。京傳の作從來潤筆料を取る事なく、たゞ一夕の酒宴に招かるゝに過ぎなかつたが、この著から始めて、肴代一兩を得、その後一部一分又は二分を取り、『仕懸文庫』に至つては三分を取つたといふ事である。

京傳は處刑後全く洒落本の筆を捨て、教訓物にうつゝた。『心學早染草』の作は、その時であつた。更にまた一轉して、讀本の著作に力めた。これ京傳に於ける経過のみでなく、實に小説壇の變遷を語るものである。京傳の爾後の活動は、次期の讀本の節に譲らう。

第八章 讀本の發生

江戸には草雙紙が時めける時に當り、京阪の小説壇上の有様は如何であつたらうか。今は八文字屋本も顧るべきものなく、眞に寂寥を極めて居た。而も此の時は支

那小説の漸くもてはやされてゐる時で、前にもいふ如く、岡島冠山は支那小説に通曉し、岡白駒は頻りに稗史の趣味を鼓吹して居た。殊に冠山には『通俗忠義水滸傳』、通俗元明軍談』、『通俗明清軍談』等演義類の翻譯をなして、當時行はれた『太閤記』類の實録物と呼應する所があつた。また一面に於いては荷田在滿、賀茂真淵等の唱道せる古文學の研究も盛になつて、すでに古語を以て縦横に筆を揮ふ事が出来るやうになつた。これ等相よりて一新氣運を生じ、つひに讀本を發生するに至つたのである。

讀本とは草雙紙に對する名目である。草雙紙が挿畫を主として文章を従とするに反し、挿畫はわづかに興を助くるにとゞめて、文を主としたもの、所謂讀むべき本の義である。そは一は實録の趣を取り、一は淨瑠璃の脚色を利用したのであるが、それは後の事で、そのはじめはすべて範を支那小説に取つたのであつた。その魁をなしたものは、寛延二年(二四〇九)に世に出でた近路行者の『古今奇談英草紙』である。『英草紙』は實に八文字屋の陳套を外にして、沈滞せる小説壇に一波動を起さしめたものであつた。その世に歓迎を受けた事は、一とほりでなく、やがてその續篇として『英草紙後篇繁々野話』を出し、『英草紙續篇秀句冊』を出した。

著者近路行者は本名を都賀庭鐘といひ、大阪の人である。通稱六藏、字は公聲、莘莢

館大江漁夫とも號した。その友に木村兼葭堂がある。この人は博物骨董に精しく、また好古の癖があつた。その富めるがまゝに書畫金石等を蒐集した。されば時の文人墨客は何れも争うて之を訪問した。或はこれ兼葭堂その人に交はるのでなく、その藏書古器を訪問するのであるとまで極言する者さへあつた。庭鐘は彼と交り深き事として、その文筆に於いて得る所少くなかつたと思はれる。讀本の發生する、實にかくの如き後援があつた事を知らねばならぬ。

庭鐘に就いては、その生死の年月をも閱歷をも詳にする事が出来ぬ。たゞ明和安永の頃が盛りであつた事を知り得るに過ぎぬ。『英草紙』は前後九篇の小説を集めたもので、豊原兼秋音を聽て國の盛衰を知る話、黒川源太主山に入て通を得たる話、紀任重陰司に到て滯獄を斷する話などを載せ、『繁々野話』また雲魂雲情を告げて太平を誓ふ話、守屋臣殘生を草莽に引く話、白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話などを載せ、『秀句冊』『垣根草』また同じ體裁にて、とりどりに幻怪なる談話に富んで居る。されど趣向脚色未だしく、時に著者の議論がましき點の赤裸々にあらはれ過ぎたるが多く、またその筆致に幽玄の趣なきを惜しまざるを得ぬ。要するに、庭鐘も亦現世的なる徳川時代文學の域を脱する事が出来なかつたのである。而して、こはまた、その原作たる

支那小説による事を知らねばならぬ。或は庭鐘の作すべて漢臭を帯ぶるを難するものもあるが、それは翻案の未だ至らざるを咎むるに於いて理あると共に、また全然創作にあらぬ事を忘れた者である。

『繁々野話』の序に、庭鐘みづからもいへるやうに、白菊の卷は白猿梅嶺の舊趣を假り占卜の前數に因る事を説けるもの、江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈むる話の始終は杜十娘を翻して俠妓の偏性を加へたものである。その他多くは『古今小説』『今古奇觀』『警世通言』『拍案驚奇』の中より出でたものである。『英草紙』に於いて、其の一二の例をあげると、豊原兼秋の話は『今古奇觀』の兪伯牙碎琴謝知音を、黒川源太主は女秀才移花接木を翻案したもの、否翻譯ともいふべきものである。

庭鐘のその他の著作には、『大江漁唱』『辛夷館隨筆』『狂詩選』『物産緒言』『明詩批評』等の數著がある。

その後、『虛實雜談集』『萬世百物語』『西播怪談實記』『古實今物語』等の怪談物が頻りに出でた。しかししたゞ事實を事實として傳へるのみで、文に何等の色彩もなかつた。その間に神秘幽怪の趣を寄せたものは、上田秋成の著『雨月物語』である。

秋成(二三九二—二四六九)は通稱東作、餘齋、休西、無腸、鶉居、剪枝、崎人等の數號があり、

戯作には和譯太郎と稱した。大阪の人である。その父母については種々の説もあるが、つひに詳にする事が出来ぬ。自らもいふ、父なし其の故を知らず、四歳母亦捨つ、倅に上田氏ありて、養はる」と。性狷介、峭直の一畸人、つねに白眼を以て世にも人にも接した。三十八歳の時、火災にあつてから醫を學び、やがて開業し、醫は意じやとてただ親切を以て病人を見た。しかもみづからいふ、醫になるはじめに心願を立て、金の口入、太鼓持、仲人、道具の取次はせまいというて、一生せなんだ事じや」と。秋成つねに居を移した、これ鶉居と號する所以である。外剛にして内柔、これこそ我が性である、これ無腸と號する所以である。若い時分から俳諧を嗜み、また和歌にも志あつたもの、未だ良師を得ず、ひとり契沖の書を讀んで考究した。四十四歳の時はじめて眞淵門下の加藤宇萬伎に就いて學んだ。その從學の間は長からずして宇萬伎は病歿した。その後は獨學によつて孜々として力めた。「獨學孤陋といへど、そのはじめは師の教につきて、後には獨學でなければと思ふより、私ともいへ何ともいへ、獨窓のもとに眼を痛めて考へて見れば、どうやら知れぬ事も六七分は知れたぞ」とは、その述懐であつた。晩年京に居り、八疊程の家を建て、住家とした。常に粗をすつて土鍋で炊いて食し、副食物は胡麻鹽とひしこ味噌との二味に過ぎなかつたといふ。

秋成が筆硯をとつて起つたはじめは、明和三年三十四歳の時に著はした『諸藝世間聞耳猿』と『世間妾形氣』との二書である。共に八文字屋本の舊套をそのまゝに襲へるもので、趣向の嶄新は求め難きも、中に才筆の縦横は認める事が出来る。されど未だ秋成の名を後世に高からしむるものでない。これあるは安永五年(二四三六)四十四歳の時に公にせる『雨月物語』である。『雨月物語』は體裁前の『英草紙』『繁々野話』と同じく、短篇の小説を収めて居る。「白峯」「菊花の約」「淺茅が宿」「夢應の鯉魚」「佛法僧」「吉備津の釜」「蛇性の淫」「青頭巾」及び「貧福論」の九篇がある。秋成或はわが國文學に於いて隠れなき傳説を取り、或は支那小説の題材を翻案し、また配するにその世を憤り人に嫌らざるの見を以てした。されば、すべて文に色彩あり、氣骨あり、眞に稀に見る所の名文である。おもふに、秋成はみづから支那小説を耽讀したか否かを知らぬけれど、また少なからずそれに興味を有する一人であつたことは疑がない。かれが當時に浸潤せる支那情調を味うたことは、深く煎茶の技を嗜んで、これに關する『清風瑣言』を著はした事でも知り得られる。かれの書を讀む、必ずその興味を自家のものとなし、然る後に之を筆に上せた。加之、國文の素養は庭鐘等を遠く抜いて居る。されば、『英草紙』に於けるが如き譯筆の生硬は、『雨月物語』に於いては決して見出されない。かの豊原兼

秋の話と菊花の約とを比較して見る時に、誰か今更めきて譯文の巧拙を説くものがある。殊に『夢應の鯉魚』の如き、誰か翻譯の跡を認める事が出来やう。一たび『古今説海』に收められてある魚服の文を見て、之と比較するときは、いよ／＼秋成が譯筆の自在なることが合點されるであらう。その他、『白峯』の如きは、『撰集抄』と『太平記』の六本杉の妖怪談とから出で、『淺茅が宿』は、『萬葉集』中から出てゐる。皆愴涼凄咽、遠く原文以上に存して居る。

この書大にもてはやされ、後の作者にも影響する所が甚だ多くあつた。曲亭馬琴は殊にこれを愛讀したものであつたが、その『弓張月』中の爲朝白峯陵に謁するの一筋はまこと幽渺の極とはいへ、秋成の白峯より脱化したものである事は已に世に知られて居る。『近世美少年録』の蛇の怪はまた、蛇性の姪を襲用したものであつた。京傳もまた秋成に負ふ所が少くなかつた。『吉備津の釜』は直にうつされて、『復讐奇談安積沼』の中の一脚、色となり、『佛法僧』は、『優曇華物語』の中に用ひられてゐる。その外、遁勁にして而も華麗なる文體を模するものに至つては、今一々枚擧する事が出来ない。

秋成晩年の作に『春雨物語』と『痲癩談』とがある。老熟の筆致は時に『雨月』の華やかさを缺くとはいへ、直截蒼古まことに及び難きものがある。『痲癩談』は、かんべき談ともくせ物語とも何ともかともあらうつゝ、なな世語やと自らもいうたやうに、筆にまかせてその所見その感慨を叙べたもの、諷刺あり、嘲罵あり、烏丸光廣の『にせ物語』などの遠く及ぶ所でない。

『春雨物語』は筆寫をもて世に傳はり、しかも傳本少く、秋成に私淑する事深き馬琴すら未だ見る事の出来なかつたもの、幸に近時世に公にせられた。もと十卷のもので、今は五卷を存するのみである。その海賊は、『土佐日記』に見えてゐる海賊をもととし、その言を假りて貫之及び『古今集』を論じ、延喜の政治を評し、菅原道眞を讃したるもの。『目一つの神』は、佛法僧のやうの怪異談、『樊噲』は一兕漢の事を叙して中に權現の山の怪を交へ、而して秋成が狷介人に容れざるの鬱情を洩らし、血かたびら、『天津處女』は歴史に對して自家の見解を載せてゐる。『雨月物語』ももとより寓する所はあつた。しかし失意不遇の年と共に加はるに隨つて、『痲癩談』や『春雨物語』は筆端の辛辣更に憚る所がなくなつたのである。

秋成また和歌に長じ、雅文に巧みであつた。その歌文集を『籐篋冊子』といふ。歌には、『萬葉』の格調がある。文には西行法師を叙した『月の前』、靜御前を叙した『劍の舞』、最も名高いものである。

秋成と時を同じうして、讀本の發達に與つて力あるものは、江戸の建部綾足であつた。綾足(二三七九—二四三四)字は孟喬、涼袋と號し、後に凌岱と號した。津輕の士喜多村某の子、少き頃郷を奔り、京都東福寺に入つて僧となり、唱首座となつた。好んで俳諧を作り、晝にも巧みであつた。後蓄髮して江戸に出で、俳諧及び晝を以て業とした。當時は眞淵の名聲の高い時である故に、綾足その妻をして學ばしめ、よつて其の説を聞くことを得た。その名漸く弘まるに及び、俳諧を廢して片歌を唱道した。日本武尊を以てその第一の祖とし、自ら第二の祖を以て任じ、『片歌道のはじめ』、『二夜問答』、『東風流』、『百夜問答』等を著はした。一公卿に片歌道守の揮毫を得、これを楯間に掲げおき、心煩はしき折節に仰ぎ見て、鬱を散じたといはれる。されど、その道は遂に成らなかつた。

綾足も不羈、一世を弄ばうとするの風があつた。某侯の資を賜うて晝を長崎に學ばしめられた時、六年の後歸り來つて一團塊を描けるものを上つた。芋魁であると。つひに不敬を以て黜けられたといふ。その他にも奇行が甚だ多かつた。その猖狂の氣が文に露はれて、おのづから唱すべきものがある。隨筆『折々草』の如きは、その一例である。『櫻遊記』といふのは同一の書で、少しく順序を變更したものである。

明和五年(二四二八)、綾足京滯在中に、『西山物語』を著はした。京の西山に住める大森七郎が、その一族八郎と中絶えたるより、つひに義のために妹を殺すに至る顛末にて、中に大森彦七が分捕れる正成最期の折りに佩いてゐた太刀の怪を記して居る。これは當時京に於いて相似たる事實のあつたの取つて脚色したものである。その文辭は一に古文の體を模し、後の石川雅望、村田春海らの雅文體小説の端を開いた。その中の古語には割註をし、且つ出典をも舉げてゐる。

安永二年(二四三三)、『本朝水滸傳』を著はした。これが江戸に於ける讀本の嚆矢であつて、また後に大に流行せる水滸傳物に先鞭を附けたものである。されど、その上梓は安永二年正月であつて、著者は翌年三月に歿したのである。故に上梓せられたのは初篇十卷にとゞまり、後篇十五卷は稿本のまゝで存し、第三篇はたゞ目錄を殘せるのみ、すべて百ヶ條にて局を結ぶべきであつたのに、眞に遺憾の極である。この書『水滸傳』に據れるものゝ、更にまた一新趣向を凝し、『萬葉集』の柘の枝の歌を取り來りて發端となした。即ち吉野里味稻翁吉野川に築をたて、柘の枝の仙女を得、柘の枝を百段に折つて川に流す、五十年の後には百人の子となつて生れるであらう、太きは貴人、細きは官人、末枝は民草と。かくて惠美押勝を宋江に、道鏡を高俣に擬し、琵琶湖の

畔なる伊吹山を梁山泊の水寨に比し、幾多の騷亂の後、さきの百人の子が吉野に集るに終はる。その文體はさきの『西山物語』の如き古文體を取らずして、やゝ雅文に近き和漢混和の體である。しかしながら、その詞葉は平凡ともいふべくして、遂に秋成と日を同じうして語る事が出来ない。たゞ其の作の讀本の發達を助くる事と、また支那小説の影響する所の少なくなかつた事とは忘るべきでない。

また此の點に於いては攝洲伊丹の人浦邊椿園があることを明にせねばならぬ。椿園はその傳を詳かにせねど、安永七年の『兩劍奇遇』、『今古奇談翁草』をはじめとして、『今古小説唐錦』、『怪異談叢』、『今古怪談深山草』、『女水滸傳』等の數著がある。皆多くは支那小説の翻譯に係る怪異談であるが、また文壇に於ける一勢力であつた。その『唐錦』の序の一節は、その著作の全般を見るに足るが故に、こゝに轉載する事とする。

近頃岡島陶山、岡の諸名士小説を深く好み、俚言俗語に博く通じ、譯解のあきらかにして残りなきは、往昔より未だなき所なり。是によつて、海内靡然として中華の小説をもてあそび、且まれに本邦の小説を著はせども、事新奇なれば、文辭至つて拙く、文辭稍見るに堪へたるは、中華の小説を其のまゝに譯せしなれば、識者の觀に備ふるもの更になし。僕この道を探る嗜むといへども、漢文こゝとく和文は更に通せざれども、雨の朝月の夕同好の友うち寄て樂に語りぬる奇事異聞の多くあるがうちに、尤も佳なるもの九條を選みしるして四卷となし、かのたゞまくをしきと詠みし古歌に基き、唐錦と題し、几邊にあつまる婦人童子の玩弄物となさんため拙き繪を加ふ云云。

その他幾多の讀本作者はあつたが、その價值の認むべき者少く、京傳馬琴の起つのを待つばかりであつた。

第九章 淨瑠璃の起伏

さしも時めいた上方の淨瑠璃も、この期に入つては遂に衰微の域に陥つた。これ元祿に於ける近松門左衛門程の天才なく、また竹本義太夫程の名手がないのによるとはいへ、要するに世は單純なる操劇に飽き、人氣はとみに落ち盡したのである。もとより操劇の特殊なる發達は、まづはじめに口を開き、眼を閉ぢ、手にて物を攫む動作を現はし、やがて眉毛を動し、屏風手をもなし出し、人形ながらに殆ど人間の一舉一動を模するに近く、隨つてその風いつか歌舞伎劇にも入つて、人間にして人形の舉動を眞似する人形振をも生ずるに至つた。しかしそれも一部分に於けるもので、全體として見る時は、歌舞伎劇は急激なる發達を成して、その舞臺上にも、その脚本の上にも、

すべて優秀の状を來し、操劇の顧客を拉し去らうとする。さばれ淨瑠璃界にも流石に其の人のないでもなかつた。竹田小出雲吉田冠子近松半二等は、たまく、殘星を以て擬すべきものであつた。

小出雲は出雲の子。その作多くは合作である。『新薄雪物語』は文耕堂との合作、『夏祭難波鑑』『軍法富士見西行』は並木千柳等との合作である。そが中にも、『夏祭難波鑑』は九段物のはじめ、また人形を遣ふ上には帷子を着せ水を遣ふ事をはじめたので名高い作で、之が爲に久しい間の大入を占め得たといふ。

吉田冠子は出雲の門人で、人形遣として有名な竹本三郎兵衛の子である。自らもその技に達して居たために、その呼吸を直に作の上につし來つて、舞臺上の効果を來すことが多くあつた。近松の『丹波與作』を改作した『戀女房染分手綱』に於いて、その技倆を見る事が出来る。

半二(二三八四—二四四二)は穂積以貫の子である。以貫は大坂の儒醫であつて、近松門左衛門と親交のあつたもの、かつて『淨瑠璃評註難波土産』を著はして近松が文才を推稱して措かなかつた。半二は父にならうて若い時分から淨瑠璃を好み、遂に竹田出雲の門に入つた。その近松と名乗つたのは、一は父が門左衛門と親交のあつた

ため、一は門左衛門の遺碇を傳へるためであつた。寶曆元年、竹田外記と共に『役行者大峯櫻』を作つた。これを處女作として、三好松洛・小出雲冠子らと共に合作の筆を取り、名聲漸く揚つた。明和三年、『本朝二十四孝』を出し、『太平記忠臣講釋』を出し、また『關取千兩幟』を出し、大に竹本座の爲に力めた。されど、操の頽廢の形勢はすでに決して、一木のよく支ふべきものではなかつた。貞享二年以來九十年の久しい間、よく繁榮を致して居た竹本座も、遂々退轉のやむなきに及んだのである。座は一度歌舞伎芝居に改つたもの、それも暫時の間であつて、再び操座となつた。その興行に際しては苦心の程も甚しく、座元としては、世になき人なる近松門左衛門の名をさへ借り來るに至つた。されどその甲斐もなく、空しく幽靈座の名のみ高くあつた。豊竹座との同盟も詮なき事であつた。竹本座がいよく、孤城落日の状態に陥つた時、これを維持すべき重任を負うて起つたものは實に半二であつた。その苦心の作たる『妹春山婦女庭訓』はこの時に成つたものである。明和八年(二四三二)正月の興行であつたが、好評湧くが如く、四五年間の不入を一時に挽回したばかりでなく、よく竹本座の再興を致し、更にまた三四十年の命脈を繋ぎとめることが出来た。半二の作は濃厚なる色彩、劇甚なる對照等、あらゆる技巧を用ひて人目を眩惑しよ

うとする趣が見える。その舞臺上の効果の如きは、出雲より優り、更に遠く門左衛門をも凌いで居る。されど、一貫せる生命は衰落した、場面場面に意を専らにし、脚色のための脚色を設けたる跡一見して明瞭なるものがある。随つて荒唐と無稽とが相踵いで出づるも止むなき事である。かの『婦女庭訓』の如きは最もよくそれを語るべき好事例である。

蘇我蝦夷・入鹿の姦惡、藤原鎌足父子の誠忠、世にかくれなき史實を取つて題材とし、之に配するに十三鐘・絹懸柳など奈良に因みある口碑傳説を以てし、或は謠曲・三輪の故事を加へ、或は吉野川・妹山・香山など、近畿に著しき名所舊跡を舞臺とし、或は五節句を取り入れて見る目を美しうするなどは、道具細工の末に至るまで細心の注意を拂つてゐる。而して、舞臺上の技巧を用ひて、最も自然に最も巧緻に至れるものは、『妹山背山』の段である。歌にも詩にも詠まるゝ吉野の花盛り、川を隔てゝ相對する山莊には、雛鳥と久我之助とがかなはぬ戀のあはれ、大判事と太宰の後室とが武士の意氣地の底には子故の涙を湛ふる切なさ、とりあつめてすべて絶妙と稱すべきである。併しながら、全體としては未だ渾然たる一藝術を完成せるものではなく、遂に支離の狀に陥つて居るとの譏を免れない。これ半二の作のすべてに亘つていふ事が出来る所である。

なほ半二には『新板歌祭文』『伊賀越道中双六』『近江源氏先陣館』等の傑作がある。實に半二は上方淨瑠璃作者の殿將であつた。半二以後、竹本座・豊竹座及びその後身たる北堀江座に幾多の作者があつて、十數名の多きに至つたが、皆碌々たる群少輩に過ぎなかつた。今はこゝに其の名を記すのも煩はしさに堪へぬ程であつた。これを要するに、半二の作を外にしては、たゞ段物に二三の見るべきものゝあるに過ぎずして、すべて衰頽の中に葬られはてたのである。かくて之に代るものは江戸の淨瑠璃界であつた。

さきには京坂の淨瑠璃をそのまゝに語り、さながら演じた江戸の淨瑠璃界も、今や文運東漸の趨勢と共に、とみに色めき渡るに至つた。顧みれば、金平節また土佐淨瑠璃の盛に流行したのも今は昔となつて、外記節や江戸半太夫節または河東節が世にもてはやされた。半太夫節の語る所は、多くは道行景事であつた。その半太夫節及び外記節の淨瑠璃は、塚原市左衛門の作であつた。河東節も亦多く景事を語つた。その作者は竹婦人として俳諧師岩本乾什であつた。『禿萬歳』の字扇、『有馬筆』水調子』等の作を以て知られて居る。

この半大夫節河東節は大に時流に投じ、二代目團十郎が助六の狂言に於いて半大夫の淨瑠璃を用ひてからは、江戸子になくはならぬものゝ、一に數へられ、また團十郎が『扇惠方曾我』の矢の根五郎に、外記節の祖薩摩外記の門人大薩摩主膳太夫が出て大薩摩を語つて、大薩摩は歌舞伎のつきものとなつた。これより江戸の淨瑠璃は歌舞伎との關係上、端物となつて専ら優美の方に流るゝ事が多くなつた。

かゝる折に義太夫の勢力は東下し、その操座も辰松座と改稱するに至つた。義太夫節の人形遣辰松のために買収せられたのであつた。やがて豊竹肥前下りて、大に好評を占めてから、大阪の名手頻りに來り、明和の頃には最も多く群り集つた。

その語る所はすべて大阪のもので、江戸の創作は殆どなかつたが、今や淨瑠璃界に活氣の溢るゝに及び、幾多の創作を出しはじめた。もとより豊竹二座の優勢には及ぶべきものではないが、なほ遙かに當時の京阪の上にあつた。即ちひたすら太夫を大阪から聘した肥前座は、明和三年に作者不詳なる『和泉式部軒端梅』を出し、六年玉泉堂・吉田二一・吉田冠子の『蝦夷錦振袖雛形』を出し、また同じ作者等の『時代世話女節用』を出すに及んで、新意大に動きはじめた。

當時肥前座と相對抗して起てるものに外記座があつた。薩摩外記が創設したも

のである故に、薩摩座とも稱した。明和七年(二四三〇)『神靈矢口渡』を興行して非常の大入を取つた。作者は福内鬼外である。鬼外とは即ち平賀源内が淨瑠璃著作に於ける戲號である。源内がその鬱抑悲憤他に發するの道なく、徒にその一端を戲曲に洩らしたに過ぎない。『矢口渡』はその淨瑠璃に於ける處女作である。みづから序していふやう、一日吉田冠子來つて淨瑠璃の作を請ふこと頻りである。されば盲は蛇に畏ぢず、下戸はばた餅に逃ざるたとへ、不稽無上の筆任せに、只初段の切、三段目の口ばかり予が筆でない。一體鬼外が淨瑠璃を出すに至つたのは、富豪三井元之助の慫慂によるのであつた。而して、序中にいへる「予が筆でない」とは、吉田冠子・玉泉堂・吉田二一の執筆にかゝる事である。鬼外素人の身を以てはじめて筆をとつたにも拘らず、趣向の奇抜なる、行文の縦横なる、よくそを業とする輩を凌いだ。これその奇才あるにあらずば能はざる所である。蜀山人のしるした所によると、四段目の口渡守頓兵衛が所の文をある人讀みて、この義岑臺とも、今の六郷通を來れば矢口の渡にかゝらず、このいひなくては如何と難じた時に、言下に筆を採つて、六郷は近き世よりの渡しにて、その水上は弓と弦、矢口の渡しにさしかゝり」と書きしるしたのを見て、難したのも大に稱嘆したとの事である。實にその才藻は至る所に發するのであつ

た。蜀山人がまた例の物類品隲の餘習いまだぬけず、舊癖の起りたるも可笑しと評したる「琥珀のちりや磁石の針、粹も不粹も一樣に、迷ふが上のまよひなりの如き、或は源内が自讃したといふ、忠臣義士のため涙、天に通せば天の川、つゝみもきれて流るらん」の如きは、その一二の例に過ぎないのである。

矢口渡が好評を博し得たのは、從來淨瑠璃の臺詞といへば必ず上方言葉と定まつて居たのを、創めて江戸言葉を採用して一新機軸を出したからである。その題材も江戸に近き地、さればこそ世にもてはやされたのであつた。この淨瑠璃が一たび公にされてから、一時はさまで知られないで廢頽してゐた新田神社も、急に繁昌しはじめ、その社殿も修繕せられたといふ事である。

その他『前太平記古跡鑑』『弓勢智勇湊』『嫩窠葉相生源氏』『荒御靈新田神徳』『靈驗宮戸川』等の佳作を出した。大方江戸に因みある題材を選んで、『前太平記古跡鑑』には神田明神をいひ、『靈驗宮戸川』には淺草觀世音をいふなど、大に江戸の人氣に投じて喝采を得たのであつた。中にも『嫩窠葉相生源氏』の如きは、もと九段續であつたが、東都の習として末の三幕を殘し置き、評判次第にて猶追々に出さうと思ひ、六段目まで取り組んだのに、正月二日より二月下旬まで引續いての大入、棧敷切落はいふ迄もなく、この

手をのけて見物雲の如く集り、舞臺の後人の山を築く有様、末三段は趣向ばかりで未だ筆を採らぬに拘らず、人々正本を望む者が多いから、物足らぬ正本を刊行したと、其の跋にいふ所を見ても一般が推知される。

しかしながら、源内の作はその輕妙なる文才を以て稱すべきものはあれど、そはつひに一の文才たるに過ぎないで、近松が人情の機微を穿つが如き事は到底望むべき事ではなかつた。その叙する所の結局は、勸善懲惡に過ぎないのである。源内みづからもいへるやう、勸善懲惡世を教ゆるの一助たる事、是近松氏の本心なり、中頃千前軒(竹田出雲文耕堂)が類も亦近松氏の意をうけて、作れる所正しければ、この道甚だ盛なりしが、いつの頃よりか衰へて、今時の作者固よりそこ所ではなく、文法を知らず、手爾乎葉を辨へず、嘲を遠近に傳へ、恥を千歳に殘す云々と。これ實に源内が當時の淨瑠璃作者を罵つて大に氣を吐けると共に、その主旨とする所を知る事が出来る。

源内の門下に森羅萬象がある。黄表紙の作者として知られて居ることは既に述べた。またの戲號を源平藤橘といひ、やがて二代目鬼外と稱した。『石田詰將基軍配』の合作があり、また『驪山比翼塚』がある。詞藻の豊富時によく源内に比すべきものもある。

源内の保護者であつた三井元之助即ち紀上太郎には、『志賀敵討』及び『絲櫻本町育』の作があつた。その他の江戸浄瑠璃作者としては、主なるものに、松貫四・容揚・烏亭・馬馬等があつた。松貫四は近松貫四の略稱、吉田仲二との合作に『吉野静一目千本』があり、吉田角丸との合作に『戀娘昔八丈』があり、高橋茂兵衛・吉田角丸との合作に『伽羅先代萩』があつた。中にも『伽羅先代萩』は世にかくれなき伊達騒動に取材したる事として大に喝采を博し、また『戀娘昔八丈』はこれも江戸に於ける有名なる白子屋お熊の事件を採つたもので、江戸の世話浄瑠璃中の白眉を以て推稱すべきものである。

容揚は醫師松田某の戯名である。『加々見山舊錦繪』を作つてもてはやされ、又そのまゝ狂言にも仕組まれて大に好評を得た。烏亭・馬馬は桃栗山人・柿發齋の別號があつた。『伊達競阿國戯場』の作があり、紀上太郎との合作に『基太平記白石噺』がある。而して馬馬は通俗文學上没すべからざる功績があつた。落語の復興がそれである。足利時代の末期から行はれたものゝ、安樂齋策傳の『醒睡笑露の五郎兵衛』、『露の噺』、『露休置土産』や、後にしては鹿野武左衛門の『鹿の巻筆』刊行以後數十年の間寂寞の裡に陥つてゐた落語界に新運動を起したのである。天明四年(二四四四)寶合として役にも立たぬ物に勿體らしい名を附けて陳列する席上に於いて、落語を披露したのは

じめとして、また漸く一勢力をなすに至つたのである。更にまた、馬馬は『歌舞伎年代記』の著者としても、その名を知られてゐる。

想ふに、京坂の地は操の微々として振はず、その作者も多くは凡庸の徒に過ぎなかつた時に當り、江戸の諸作者は大方學識あるの士か、さなくば富豪の輩であつた。中にも、紀上太郎の三井元之助は、有名なる富豪三井の一家である。紀州家と論争した事で退隱し、風雅の道に日を送つたのである。さきにならうた如く、浄瑠璃の著作をもしたが、なほ平賀源内に吉田冠子を介して『神靈矢口渡』を作らしめ、また源内に福内鬼外と名乗らしめた。『基太平記白石噺』は烏亭・馬馬と共に合作したのであるが、その作にさきだち、馬馬をその舞臺の地なる奥州に派遣し、旅費を裕にして、かしこの方言を調査せしめた。太郎は實に江戸浄瑠璃作者の保護者として推讃すべき者である。京坂を通じて浄瑠璃界の活動は、この期を以て終を告げたのである。強ひて之を次期に求むる時は、寛政十一年に於いて近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作にかゝる『繪本記』が豊竹座にて興行せられたのみである。世に普及せる『繪本太閤記』に據れる事として、大に稱せられた作であつた。

第十章 東西の劇壇

四五〇

この期は演劇の形式の完備の域に至つた時であつた。劇場の構造にも、その裝飾にも一定の掟があり制限があつた。顔見世狂言より名残狂言に至るまで、期間も順序も定つた。はては、上方に於いては、狂言も時季によつて各特殊のものあるに至つた。たとへば、春二の替りには華やかなもの、世界も時代物にて、大名の若殿放埒から謀反人の幻術、謀反人の遠攻など。三月狂言は時代世話を交へ、御家復讐の仕組。五月狂言は、前には時代王代物、切狂言は眞世話にて、心中角力の世界と分つ事。盆替りは暑さの頃故、侠客の水試合など。九月月は、陰氣の時故、傳奇の脚色、御家の仇討を取り組む事。顔見せは、一年の終りなれば、道化交りに所作事のめざましいもの。まづざつとかういふ次第であつた。

また四番續の狂言に、喜怒哀樂の四情を表はす法則を定めたのも、この時であつた。口明の多くは若殿の遊興、花見茶屋場は是喜である。中入の謀反人が國家を傾け、忠義の家老が切腹するのは怒である。次の小幕の道化のちやり事、若殿傾城、姫君の道行、引返しての世話場に愛子の身替り、女房の身賣りは哀である。大切に悪人亡び、寶もとに返つて家國治まるは樂であるといはれた。

かくも形式に囚へられたるに、一方には二代目四代目の市川團十郎、澤村宗十郎、中村慶子の名優があり、また世の人は未だ狂言を見ないでその俳優を見るのみであつたから、脚本作者の拘束はいよく、度を加ふるに過ぎなかつた。されば、前期から此の期に跨れる江戸作者の覇たる津打治兵衛でさへなほ、もとより作者は役者の氣がねをするが家業にて、皆々氣に入るやうに作つてやるが即ち作者なり」というた。その他は推して知るべきである。故に、脚本作者といへば、浄瑠璃作者の而もその方面に頭角を現はし難いものが之を兼ねるか、或は俳優が自然と覺えた技巧をのみ弄する著作を出すに過ぎなかつた。その状はなほ前期と同様であつた。然るに、こゝに一偉才は出でた。並木正三が即ちそれである。

正三(二三七八—二四三三)は大坂の人、道頓堀の菓子屋の子、町年寄を勤めたが、浄瑠璃を好んで、並木宗輔の門に入つて、浄瑠璃を作り、後脚本に筆を專にし、當時作を以ては近松門左衛門と、才智を以て櫻田宗庵、竹田近江と並び稱せられた。その才智とは、道具のせり上げ、せり下げ、廻り道具三段かへし等の工夫あるをいふのである。その作の得意とする所は、所謂譯文(ハメモノ)である。それは古作の狂言を今様に改作す

る事である。たとへば、その傑作『三拾石燈始』は淨瑠璃の『双蝶々曲輪日記』の濡髪と放駒とに上下を着させたものと、自らもいうた事があつた。

正三がその名をなしたのは、寶曆四年大坂三條座で興行した『契情天羽衣』である。その頃疫病の流行した爲に、その呪とて、家毎にキノニノヤノハノモノ北川總左衛門宿と張札した事があつた。正三は直に之を取つて、北川總左衛門實は足利義村が赤松四郎と共に足利家を滅さうと謀り、四郎は疫病神に扮して微行し、互にキノニノヤノハノモノをば合詞となしたといふ趣向を立てたのであつた。これをはじめとして、『女文字平家物語』『大社結納』『太平いろは行列』『中睦龍宮島臺』等があり、更に『天羽衣』と共に傑作を以て推さるゝ『三十石燈始』『和布苅神事』の二作があつた。

『燈始』は大坂安治川淀川の治水に名を得たる河村瑞軒と、能樂拜觀の節雜色と争闘して宮中を騒がした吉岡又三郎との事蹟によつて脚色したもので、殊に大切に砂舞臺一面の廻り道具をはじめて工夫し、大に喝采を得たものである。『和布苅神事』は大内家を覆し主君義興を殺さうとする義興の叔父山口但馬及び大内家を仇敵視する大友家の臣木山太郎右衛門と妖術を學び得たる尾張力丸等の姦計、岩國錦帶橋修繕のため宮中より大内家に預けられた雌龍雄龍の太刀及び勘合印の紛失を骨子とした

もので、極めて變化に富んだ作であつたが、その興行中、正三は樂屋に於いてア、南無三モウ死ぬかと叫んだなり卒倒して、遂に起たなくなつた。故に、その墓は題して『南無三寶正三の墓』といふのである。

『宿無團七時雨傘』またの名を『岩井風呂』といふは、また正三の作として名高いものである。明和五年、髮床屋茂兵衛といふものが遊女を殺した事實を即座に作つて興行したもので、その狂言中正三自ら出で、茂兵衛に忠告する場もあり、また敵役中山卯八の容貌茂兵衛そのまゝなりとて大當りを得たといふが、或は正三の作でないといふ説もある。

正三の同門に並木丈助と同永助とがあり、門下には並木五瓶と奈河龜助とがあつた。五瓶は次期に於いて江戸脚本作者として其の名を知られ、龜助は大坂にあつて殆ど正三と其の名を齊しうした。

龜助は安永天明を最盛の時期とした者である。もと大和奈良の人、放蕩のために家を奔り、河内なる縁者のもとに寄食したが、後に大坂に出で、作者となつた。その奈河と名乗るのは、奈良と河内とに漂浪したといふ義である。さきに述べた喜怒哀樂の法則といふも、この人の定めた事である。その作すべて時好に投じて大當りを

取つた。それはよき金主の後援があつたので、他の作者と異つて劇界に一勢力を有して居た事が、また與つて力があつたのである。その中にて傑出せるものは、安永四年作の『競伊勢物語』、六年作の『伊賀越乗掛合羽』、天明元年作の『加賀見山廓寫本』、『殿下茶屋聚』である。

『伊賀越乗掛合羽』は殊に重きを置かれた作である。寛永十一年伊賀の上野に於いて、池田家の臣渡邊數馬が、荒木又右衛門の助太刀によつて、父の仇河合又五郎を討つた名高い事實に取材したもので、その時を去ること百四十二年にしてこの作が出たのであつた。この作は元來復讐物であるから、當時の習慣からいふと、三月か九月に出すべきを、二三替りに仕組み、而も大序の鞠負殺しから中入の圓覺寺までを足利時代に取りなして、狂言を手廣く書いたのでよく自在を得たと評せられた。たゞこれにも龜助の流弊が見えて、餘りに綿密に過ぎて、くどい所がある。傳法院の場の如きがそれである。正本にて百餘枚、たゞ讀む時は稗史以上に興があるものゝ、後に舞臺に上せる時は省略せざるを得ない事が多かつた。

龜助の門に七五三助がある。多くは古狂言の改作のみで、創作の筆を取る事少く、洗濯物の七五三助と異名を附けられた。されど、時に『礮礎花大樹木下藤吉』の如き當り作があつた。

この時、江戸の劇壇も、また殆ど同一の繁榮を來したのである。これ淨瑠璃の京坂に衰微を來すを待つて、はじめて江戸に盛なるとは趣を異にして居る所である。

さきになつた津打治兵衛は、この期に入つても猶ほ筆を取つたのであるが、その門に津打傳十郎があつて、後に二世治兵衛と稱した。淨瑠璃の作に妙を得て、矢の根帶引、石橋等を以て知られて居る。

治兵衛よりもやゝ後れて、享保寶曆の間に榮えたものに藤本斗文がある。『男文字會我物語』、『頼朝軍配鑑』、『男達初買會我』、『百千鳥曲輪會我』等の當り作があつた。

また少しく後れて、塚越榮陽(二三八一—二四三八)がある。初名は二三次、はじめは澤村の姓を名乗つたが、市村座へ出で、立作者となつてから塚越と改めたのである。その作は舞臺面の變化に心を注いだのであるが、なほ常盤津文字太夫のために淨瑠璃を作つて、一狂言の中には必ずその一幕を出す事をはじめた。これが後の作者のつねに範とする所となつた。『契情淺草鐘』、『戀染隅田川』、『間山女敵討』、『東山殿劇場朔日』、『初曙鷄會我』、『宮柱巖舞臺』、『瓢軍配紅葉』等の作があつた。

榮陽はまた外題の割書に最も意匠を凝らした。明和八年森田の顔見世狂言に於

いて『柏木衣紋部宿坂葺替月吉原』といへるは、柏木梅津の對聯の詩の名對といふべきであると稱せられた。これは、この年吉原に火災があつて普請も出来た頃であるから、葺き替へたと云うたのである。且つ葺き替へてといふは狂言の詞である。これよりさき、明和四年に中村座に於いて、『其名月色人』といふ狂言を作つたが、その名も盡きぬるといふ識語であつたらうか、いたく不入であつた。それで爾後四年間作を絶つたが、こゝに吉兆ある外題を選んだのであつた。菜陽と改めたのも、この時である。菜陽の門に櫻田治助がある、次期に於いて大に活躍した一人である。

菜陽から後るゝ事九年、寶曆四年(二四一四)に始めて作者として起つたものに、金井三笑がある。生死の年月は詳かでない。寛政の初年の頃まで筆を執つたが、その最も腕を揮つたのは安永の頃であつた。『菜花隅田川』、『梅紅葉伊達大門』、『江戸紫根元曾我』、『曾我最負二代櫻』、『百千鳥大磯通』、『色上戸三組曾我』、『江戸春名所曾我』、『花相撲源氏張膽』等の作があつた。中にも、『色上戸三組曾我』は中村仲藏の法界坊を以て大に喝采を博し、作者の名も高きを加へて、從來三平と號したのを改めて三笑と稱したのである。三笑はもと中村座の手代から帳元となり、かくて作者となつたものとして、大に俗才に長じて居た。されば狂言に於いても、まづ見物の耳目を驚かすを主として、道具幕、書割幕、遠見の景色の打返しなどを創めて、高評を得た。その作また時代世話物を混じ、數種の舊作を取つて趣向を得るのであつた。すべて世俗の歡を得るのを以てよいとしたのである。されど、その得意とする所は寧ろ世話物であつて、狂言を廣く仕組んで、而もよく巧みに局を結ぶを以て稱せられた。三笑の子に松井由輔があり、また作者として聞えて居た。

これを要するに、江戸の作者は數に於いてこそ上方に劣らざれ、作そのものに至つては正三の上に出づることが出来なかつた。その價值あるものを出したのは、寛政の初年並木五瓶の東下以後である。

第四期 化政時代

第一章 時代の概観

通と稱し、粹と呼び、酒に荒び、色に戯るゝ耽溺享樂の空氣は、載せて洒落本・黄表紙にみちわたり、洒落本・黄表紙、またいよくその空氣を濃厚ならしむる時、俄に禁止の令は下つた。時は寛政二年(二四五〇)である。これより前三年、天明七年六月、白河侯松平定信が英邁敏慧の才識を以て、十一代將軍家齊を輔佐する事となりたる日、直ちに

諸侯諸士に令を下していふ、分限に應じ可相成程は儉約を用ひよ、また文武忠孝は別に心懸可申候、若き面々は平日武藝等も随分出精可致候と。かくて定信は日毎晒の染帷子、津辰子の肩衣に、松枝平の袴をつけて登城し、自ら儉約質素を躬行して他を率ゐようとした。世の中俄に改つて、昨日までは武家町人の別もなく遊惰放逸にのみ流れた遊子、少年も、今日は據なく亀衣短袴に様をかへ、心にもあらぬ學問武藝の稽古をせねばならぬことゝなつた。遊廓も寂寥たる狀に歸したのは此の時である、男女の混浴の禁せられたのも此の時である。風俗を壞亂し社會を紊亂する洒落本の類を禁止せられたのは當然の事、禁を犯した京傳の手鎖の刑にあうたのは素よりさもあるべき事である。

されど、定信の在職は僅に六年の短日月にして終つた。その臺閣を去るか去らぬに、塞き止められてゐた濁流は滔々として渦まきかへり、世は再び奢侈遊惰の風をなすに至つた。加ふるに、將軍家齊が中年以後の政治は全く亂れ、大奥の腐敗などは名狀すべからざるものがあつた。四十人の美姬を擁して六十人の兒女を生まれ、珍奇の器物を弄し、つひには有平糖の橋をさへも作るといふ豪奢に、財政の窮乏甚しく府庫のひに空しきに至つた。されば、これに敵ふ大名も、旗本も、皆借金に陥り、庶民

はますます、收斂の苦しみにあひ、遂に大阪に於ける大鹽平八郎の暴舉をさへ惹き起すに及んだ。これを矯めようとして起てる者が即ち水野忠邦である。忠邦は天保十二年(二五〇)將軍吉宗の治、また定信が寛政の治を模し、所謂天保の改革を斷行した。留守居職を戒め、女髮結を禁じ、堺町、葺屋町の劇場を淺草の一隅聖天町に移して一廓を劃せしめ、吉原以外に勢猖獗であつた幾十ヶ所の岡場所を勦滅し、錦繪・團扇に役者の似顔、遊女藝者の繪を禁じ、草双紙も表紙袋の色摺、續物の冊數を制限した。ここに於いて、風俗また俄に質素となり、武術など大に行はるゝに至つた。馬琴の『著作堂日記』にいふ、江戸中町人は多く麻の小紋の羽織を着用す。女子の縮緬の前かけ、同じく絆天はやみたり。武士は麻のブツサキ羽織小倉の野袴にて往來する者多かり。大名の家臣、さるべき人、他行の折、主僕同服にて木綿衣ならぬは稀なりと。忠邦も自ら詠するやう、

いつしかと待ちし野澤の水すみて物のあやめも清き今日哉

と。しかしながら、天保の改革は全く苛細に失するものがあつた。市民の失業する者多く、臺閣の中また怨嗟の聲高く、事つひに半にして止めざるを得なかつた。加ふるに、遠く京阪の間に動きそめたる勤王攘夷の氣運は漸く其の勢を増し來り、外には

久しき以前に露船の北邊に來着し英船の長崎に寄港するものがあつて、天下の耳目を驚かしたが、こゝに嘉永六年(二五—三)米艦浦賀に來つて通商を迫るに及び、上下狼狽細身の作りを誇り顔に大小たばさんだ者も、鑑太の長刀門差にさし、朴下駄の音高らかに踏み鳴せば、文藝の地を拂ふに至つたことはまた言を俟たぬ。かくて、混沌の間に世はいつか明治維新となつた。

この定信の寛政の治と忠邦の天保改革との間に介在せる中間五十年こそ、内憂外患のひし／＼と迫り來るのを知らず顔に、たゞ泰平の逸樂に沈湎して、桃源の夢を貪らうとする時代であつた。大御所様時代といふが即ちこれである。幕府建設の當初より執り來つた消極的方針の最も甚しく實現せられた此の二時期を、前にし後にした大御所様時代こそ、また民衆が飽くこと知らぬ風流三昧遊興三昧にひたすら歡樂の幻を逐ふ時代であつた。されば、この二の矛盾せる世相は、相結びて他の三時期に於いて未だ見ることの出來なかつた別個の文明を成した。しかも、その文明の華は、上方の文化のすべてを吸収して自家藥籠中のものとなした江戸に於いて開かれた。かくて京大阪に於いて見るべからざる一の趣味を醞釀し得た。所謂江戸趣味がこれである。この時代の文學の半面は實にその反映であつた。

江戸趣味について説くことはしばしばさうか。彼はすべて生々活躍の面影を宿してゐた。あらゆる陳套を斥けて新しきものを築き出さうとする努力が籠つてゐた。うち見るところ皆突撃驀進の趣があつた。今はその築かれたものを保守し、その創造せられたものを失ふまいとしてゐる。すべて穩健の趣を成すともいふべく、翻して之をいへば因襲隨逐の弊に陥つてゐるともいふべきである。要するに、皆消極的態度に出でざるはなかつたのである。

しばらく今の漢學者を以て元祿のそれに比すれば、全然傾向を異にしてゐる。元祿時代の漢學者は修身齊家治國平天下の道を講じ、更に進んでは一系統を具する學説を以て思想界に雄飛しようとした。いまは敢て異を樹てず、新を論せず、また敢て世道人心を導かうとするのでもなく、たゞ意を文技に専らして、宴飲の間に太平を謳歌するに過ぎない。鵬齋詩佛五山の徒また畫才に富み、畫家と共に書畫會を開いて其の日を暮した、これ必ずしも書畫の技を重んずるが爲ではなくて、要は酒色に耽り名利に憧るゝのであつた。儒者のかくなつたのは、時の力とはいへ、また定信が敢てしたる寛政異學の禁の影響する所であつた。論難攻撃道おのづから其の間に進む。

然るにそれを断られた今は、文墨に向ふより外はなかつたからである。よし異學の禁に對して慊らざるものもあるも、その抑鬱不平の聲は文墨に於いて發するより外はなかつたからである。

また轉じて國學者の方面を見れば、こゝにも春海・千蔭等の詞藻の人を見出すのである。更に著しきは、眞淵の學風と清朝の考證の學風とが相合して出した考證學の隆盛なる事であつた。塙保已一は身盲目でありながら、定信の知遇を得て、『群書類從』正續篇の大冊を刊行し、その門下また皆考證に長ずる者であつた。輪池齋の稱ある屋代弘賢また『古今要覽稿』の大著を成した。小山田與清また博識を以て推され、その擁書樓には弘賢はじめ村田了阿・太田南畝・岸本由豆流・狂歌師北川眞顔・小説家山東京傳・京山も來り會した。京傳の如きは、その藏書目録の編纂に關係し、またその著『骨董集』の編著に際しては、與清の助言を得たことが少くなかつた。この人々の會合はひとり古書の會讀にとゞまらず、酒宴に鬱をやる事も少くなかつた。由豆流の家に京傳・京山等相會して茶番狂言に夜を更した事もあつた。清水濱臣は歌文にもすぐれ考證の道にも淺からぬ一人であつたが、當時市井の間に流行したかまわぬ模様の手紙をかぶつてどめき歩いては、濱臣が花見にかぶるたのぐひの假名ちがひには、もかはぬと椰搦せられた。實に當代の學者は、その國學たるを漢學たるを問はず、孜孜として學究の態度を執ると共に、また輕雋飄逸の一面を有してゐた。學に遊び、藝に遊び、また浮世のつねの遊にもあこがれた。これは決して他の時代に於いて見ることの出来ない所であつた、而してその多くは江戸に於いてのみ見らるべきものであつて、京阪の學者の與り知る所ではなかつた。この時に當り、京阪の學者は漸く悲歌慷慨の徒多きを加へ、その文學もまた尊王愛國の主義を鼓吹した。この學風の異同は、江戸の興隆に對する京都の衰頹、幕府の權勢に對する皇室の式微を慨く状態を、さながらに現はせるものであつた。

また消極的態度は、幕府執政者の意を迎合せる讀本草・双紙に於ける教訓主義勸善懲惡主義に於いて見ることが出来る。定信の洒落本禁止を令したことは既にしばしば説いたが、すべて風俗の紊亂秩序の破壊に關する事は、すべて斷乎たる處置にあつた。大阪玉造稻荷社地上げ砂持の賑に乗じ、奇怪なる雜説をいひ觸らし、且つ草双紙を綴つたとて、絶版及び大阪所拂の咎をうけたものもあつた。『海國兵談』、『三國通覽』等を著はして海防の急を叫んだ林子平も、つひに幽閉の身となつた。岡田玉山の『繪本太閤記』は絶版を命せられ、喜多川歌麿はその題材として描ける錦繪の爲に入牢

の身となつた。天保の改革の際、寺門靜軒は『江戸繁昌記』の著を以て罰せられ、柳亭種彦は『田舎源氏』に大奥の秘事を洩したとの疑を以て刑に觸れようとして辛うじて免れた。前に後にかゝる制裁があり壓迫があるが故に、輕佻浮薄なる文學を驅つて漸く着實穩健のものたらしめた。その穩健着實は當時の標準道德なる儒教により武士道によるの外はない。教訓主義また勸懲主義の生じたは之がためである。この氣運の上に立つて文壇を睥睨したのが馬琴であつた。天保の改革に、群小説家が刑にあうた者の多い時に、馬琴一人のみは何等の咎もなかつたもの此のためであつた。されど、勸善懲惡主義も馬琴の境遇を得、性格を得て、始めて標榜すべきものであつた。たとへば、爲永春水の如き輩に至つては、その人情本『梅曆』が誨淫の書といふ世評に對して、此絲長吉お由米八の四人は貞操節義の深情である、金のために情欲を起す横道の振舞なしといひ、近來の人情甚だ賤しく、眞の情愛なければ、娘一人に男八人逃げて隠れて、その先で又他の男と逃ぐる類、朝夕色のかげ流し、親も之を恥とせず、若い中は二度となし、一人や半分色男のなはいは今時ない事などとたわけを盡すより見れば、仇吉等は誠を守る女といふべきであるというに至つた。春水はかくても教訓主義を取らねばならぬ苦境に立つた。故に、文學としては或は地位を高むるよすがともな

つたが、また漸く自由奔放を失つて生氣なきものとなり、技巧に囚へらるゝに至つた。實に化政時代の文學は、すべて技巧によつて成るともいふことが出来る。元祿文學の強さなく鋭さなきものゝ歸着する所は、技巧より外にはなかつたのである。これまた世相をそのままに現出せるものといはねばならぬ。文明爛熟の極、精緻洗練の技巧を生ずるは理もとより然るべきものである。趣味といひ、風俗といひ、すべて纖巧なる技巧の粹を凝した。滋味や地味や皆それをいひ現はす言葉である。しかもまたその風趣は、幕府の苛細なる干涉の大に與つて増長せしめたものであつた。オツでげせうといひ、意氣でおつせうというて、誇りがほに鼻うごめかす江戸の人の趣味は、この内と外とからの勢力によつて生じたのであつた。野暮と怪物とは箱根より東にないとは、實に江戸の誇りとする所であつた。派手は野暮の頂上である、華麗は不粹の極である、清酒はその尙ぶ所、明快はその好む所であつた。されば同じ遊興でも、大門うたせて金錢銀錢の豆蒔きするは元祿の世の戯れであつて、四疊半の小座敷に爪弾のめりやす、酔はぬ程の盃事、さては料理の吟味に通を聞かすのが今の推稱する所である。心のまゝに食はず飲まず、程をまもるが粹客のつねであつた。一椀の茶漬を客にもてなすに、玉川の上流から早飛脚にて水を汲み取らせて、香物と煎

茶一椀の茶漬飯に一兩二分を擲つものさへもあつた。口中が曇らぬ鏡とはつねの言草であつた。酒井抱一が山谷の八百善で初鯉の刺身に箸をつけて、研ぎ立の庖丁で作つたから砥石の香が魚について食ふに堪へずと料理番を咎め立てしたのも、當時には珍らしからぬ話柄であつた。元祿の遊客の派手なる豪放なる態度は其の跡を絶つて、今は小心翼翼々ひたすら野暮ならぬを生命とする。衣服に、調度に、綺羅錦繡の贅をつくすはこれも元祿の昔いまは幾百の金は擲てど目立たぬやうにするのがその好みである。紙入・煙草入に趣向を凝らせば、江戸には淺草田原町の川越屋の名肆をも生ずるに至つた。當世貌は少し丸く、色は薄花櫻とは西鶴の讚美する所、姿細つそり柳腰とは歌麿等が美人の典型として描けるものである。しかも見えぬ程の薄化粧をよしとして、婀娜姿を稱するのであつたが、なほ化粧水は江戸の水髪付は常磐香紅は玉屋と、こゝにも贅をいふのであつた。

まこと化政時代に於ける文明の中心は江戸であつた。江戸の繁榮は眞にこの時に極りて、八百八町の稱は古くして、土藏造りの軒を並べた大通をば、ギヤマン引戸の乗物、長柄の竹先箱、朱紋乗物、黒棒など、おのが家々の格式家例によつて堂々と過ぎ行く大名行列は、決して京坂に於いて見るべからざるものであつた。參觀交替の士、遠

國世の商人の江戸土産とする東錦繪はまた他國の企て及ばざるもの、江戸前の大蒲焼と天麩羅とは火事や祭と共に江戸の自慢であつた。春は上野の花、夏は兩國の川開き、霜月の酉の市、師走の年の市、これをつねにしては兩國の見世物、淺草の觀世音、皆江戸の繁昌を明瞭に示すものであつた。伊東燕晋が軍談・立川馬が落語・市川團十郎の芝居、皆江戸を飾るの花であつた。人の噂の絶えぬ湯屋と床屋とはまた江戸の繁昌の活縮圖である、式亭三馬が精緻なる寫實の筆を揮つて『浮世風呂』と『浮世床』とを描いたのは、まづその着眼の宜しきを得たるに驚かざるを得ない。

すでに巨萬の富を擁してかゝる間に生を營むもの、おのづから樂天の態度をとり、潤達なる氣象を生すべきである。地は江戸の灣に臨み、隅田の流を挟み、また廣濶なる武藏野の一角にあり、明快なる氣風はおのづから湧かざるを得ない。ましてや將軍御膝下の地である、さなくとも勇敢豪宕を以て稱せらるゝ東國人士の常に武士に接すれば、不知不識の間に武士道の間を體するやうになつた。元祿の世には町奴があり、歌舞伎者があつたが、その特殊の階級はひろく布いて任侠剛毅潔白なる所謂江戸ッ子氣質を生じたのである。輕快利に淡ければ、江戸者の生れ損ひ金を溜め」と罵り、奢を口腹一時の慾に極めては、江戸に生れ男に生れ初鯉」と叫ぶのであつた。さ

れど、此の意氣は幾多の弱點を有して居る。『道中膝栗毛』の主人公彌次郎兵衛が有する見え坊、虚榮の性質がその一である。狂歌を賞せられては十返舎一九と名乗つて失敗し、大坂の茶店には借り着の符貼に馬脚を露はすのはそれであつた。同じ主人公喜太八が有する皮肉もその一である。小田原の宿には女に彌次郎を悪しざまに告げてその鼻をあかせ、袋井の邊には彌次郎が吉原豪遊の法螺話のさきを折つて恥をかゝせたのがそれであつた。一九はこの二者を假りて江戸ツ子氣質より生ずる二大破綻を描いた。而して後の皮肉の方面を主としたるものは三馬であつた。三馬の鋭利なる筆鋒はこの皮肉に最も適して居るものゝ、それとても惡意なき冷罵である、もとより嚴肅なる人生の意義を討ねて後に然るものではなかつた。これもまた泰平謳歌の一遊戯に過ぎぬ。

かくの如き状態にあるが故に、すべて虚榮を以てまたなき事業として、人生の悲痛哀愁をば一笑に附し去り、歡樂をばこよなき努力と見なして、却て現實生活をば擲ち去るのであつた。すべてこれ遊戯性の上に立つのであつた。故に、執着もなく、未練もなく、身命をも賭して顧みざる濃艶熱列の戀をば野暮の頂上となしたのである。『柳々で世を面白う、受けて暮すが命の薬、梅に従ひ櫻に靡く、その日その日の風次第、嘘』

もとより西鶴近松の描ける戀愛文學とは全然相背反するものである。ひとり人情本のみならず、當代の文學はすべて熱列を缺いてゐる。消極的文學といふものは、またしてもこゝに見出すことが出来る。

華やかな吉原は今も昔ながらに繁盛を極めるとはいふものゝ、大雑半羅大明・小見世・小格子・切見世などの階級厳しく分たれ、遊女の衣類の模様にもその差あるが如きに至つては、また當代の趣味と全く一致する事が出来ぬ。こゝに於いて、深川に辰巳の里七場所の繁榮を來したのである。清洒たる裾模様、髪も油氣のない水髪、根の低き大島田、子供の稱ある遊女は、襦褌の太夫よりもいかに持て囃されたであらう。無地小紋の紋付、島田鬚に無文字一文字の櫛、そのはじめ男羽織を着けたる故に羽織の稱ある藝者の意氣は、うち見るからに快いものであつたらう。通ふものは潮來節しめやかに洩るゝ屋根船の送り迎へ、その趣はすべて人情本の採つて以て題材とするに適するものであつた。これとてもまた幕府が奢侈を禁じた結果に出でたのであつた。

以上説く所、これが文學に現はれたならば果して如何、今更に縷々せずとも其の一

斑を察するに足るであらう。これを元祿文學と比べる時は、質に於いては一步を譲らざるを得ない、然しながら量に於いては遠く凌駕して居たのである。これ實に文教の普及の然らしめる所である。藩學私學すでに盛に、寺小屋またその數を加へた。前時代に於いて八代將軍吉宗が獎勵保護の厚かつたものが、この時代に於いてその果を現はしたのである。六七歳の頃寺入して、いろはより學びはじめ、男は『庭訓往來』『千字文』に至り、女は『女消息往來』『商賣往來』にも至り、更に進むものには『實語教』『童子教』『四書』『五經』また『文選』をも讀み、女は『百人一首』『女大學』までをも學べば、よしや素讀の時は蛙鳴蟬聲に過ぎざるも、なほ流石に町人職人の末までも文字を知らぬ者は少なかつた。隨うて俳諧を弄び、狂歌を弄び、小説に耽り、戯曲に耳を傾けた。故に貸本屋の業は益々盛になり行きて、一冊十文二十文の見料をとつて新作舊板をも貸し出した。もとより浮世草子が社會一部の歡迎にとゞまるが如きものではなかつた。こゝに於いて前時代までのやうに、或は武士或は醫師或は町人が業餘の戯れに過ぎなかつた著作も、今や戯作者として著述を本業とする者の手に編まるゝに至つた。『作者部類』には、昔は草双紙の作者に潤筆をおくる事はなかりき。喜三二・春町全交などは毎歳板元の書買から新版の繪草紙錦繪を多く贈て新年の佳儀を

表し、且其の前年の冬出版の草双紙にあたり作あれば、二三月の頃に至りて、その作者を遊里へ伴ひ、一夕饗應せしのみなりしに、寛政に至りて京傳馬琴のみ殊に年々に行はれて、部數一萬餘を賣るより、商賈蔭屋重三郎、鶴屋喜右衛門と相謀りて、初て草双紙の作に潤筆を定めたり。こは寛政七八年の事にて、當時は京傳馬琴の外に潤筆を得る作者はなかりしに、後に至りては、さしもあらぬ作者すらなべて潤筆を得る事は、件の兩作者を例にしたるなりと。されど、そのはじめは寛政三年の京傳作『娼妓絹ぶるひ』が肴代一兩、その後一部一分又二分と定めたのが事實である。馬琴の如きは『八犬傳』二輯五冊に二十五兩の潤筆料を得た。第二流の作者にあつては、人情本一篇に一兩一分、讀本一篇に五兩を得るのがつねであつた。然しながら、その地位低く、その收入も亦少ないところから、ともすれば幫間の亞流を學んだ。故に、如何にして藝術の價値を認むることが出來やう。もし一般文化の普及、智識の向上と共に、戯作者自身の價値をも高めようとするものがあれば、それはまづ文學の岐路に出で、徒らに學問の博洽を示さうとするに過ぎないものであつた。この博識とかの教訓とか、文學をして一種の品位と權威とを具備せしむるものであると思つてゐた。京傳が與清の助言をかりても、『骨董集』を出し、馬琴が有用の書を購はんために無用の書を作ると

稱したのも、これがためである。北川眞顔が狂歌の名目を改めて、俳諧歌と稱したのもこれがためである。川柳が空しく教訓をうたうて、遂に存在の意義を失ふに至つた事は、すでに記した所である。一九の如きも、なほ『膝栗毛』の序に『和字正濫抄』また『紫式部日記』を引用せざれば、慊らなかつた。

されど、智識の普及は他の一面に於いて漢詩文の隆盛を來し、和歌の流行を促した。山陽の文、星巖の詩、また從來の如く社會の一小部分の鑑賞にとゞまるものではなかつた。東に春海、千蔭、西に景樹があつて導けば、市井の徒も俳諧川柳より出で、三十一文字に風月を詠するもの、日に其の數を加へた。もしそれ景樹が性情の自然を詠するこそ和歌の本旨であると呼號し、宣長が『源氏物語』は儒のためにあらず佛のためにあらず、たゞ物のあはれを寫さんために作られたりと評するに至つては、當代稀に見る所の識見眞に藝術の何たるを示すものである。さはれ不幸にして其の反響や微々として、人は純美の文學に耳をかさなかつた。これ化政文學に於いて最も遺憾に堪へざる所である。然しながら、實感を刺戟せずは、やまざらんとする演劇の野卑と殘酷と猥褻と惡洒落とが現はす似て非なる純美文學に至つては、また何をかいふべからず。

第二章 寛政異學の禁

學派紛争の状態は之を前時代よりうけて、餘弊つひに柴野栗山がいへるやうに、日新月變苟も古説に異なるものは指して豪傑才辯となし、一度先輩の口舌を経たる者は腐陳となし糟粕となし、虚驕相尙び競うて奇を出して相壓せんと欲し、はては新進の黄口老成を奴視し聖經を輕蔑して、其の弊經語を以て戲慢の資となすに至つた。然るに、寛政二年(二四五〇)五月、老中松平定信から林大學頭に對して諭達は下された。いはく、

朱學の儀は、慶長以來御代々御信用の事にて、已に其方代々右學風維持の事被仰付置候得ば、無油斷正學相勵、門人共取立可申筈に候。然處近頃種々新規の説をなし、異學流行、風俗を破候類有之、全く正學衰微の故に候哉、甚不相濟事に候。其方門人共の内にて、右體學術純正ならざるもの、折節有之、様相聞如何に候。此度聖堂取締嚴重被仰付、柴野彦助、岡田清助、儀、右御用被仰付候事に候得ば、能々此旨可談、急度門

人共異學相禁、猶又不限自門他門申合、正學講究致、人材取立候様相心掛可申候。

その所謂正學とは何か。林羅山以來幕府が執つて以て官學に推した朱子學である。定信はまづ當時衰退せる朱子學を振興せんがために、林家に戒飾を加へたのであつた。しかも、其の眞意は旗本の墮落せる風儀を匡正し、かねて幕府が忌憚する浪人儒者を壓しようとするにあつた。畢竟定信は學說によつて朱子學を正學としたのではなく、政略上に於いて之を用ひたのであつた。こゝに於いて、栗山を登用し、又尾藤二州、岡田寒泉、拔擢し、後、古賀精里を擧用して、昌平黌の教官とした。世にこれを寛政、異學の禁と稱し、栗山、二洲、精里の三儒をば、また寛政の三博士といふ。而して、この事たる、山陽の一處士西山拙齋の發意により、栗山の建議に出でたのである。

拙齋名は正、字は士雅、備中の人、諸藩の厚聘を斥けて田園の中に自適し、ひそかに陶淵明を以て自ら擬した。その詩集を『西山詩鈔』といひ、よくその風趣を見ることが出來る。拙齋はじめ京にあつて佐長史長秀、路宰源輔及び僧六如等と詩窮社を結んで吟咏し、また和歌を澄月に學んで、共にその名を高うしたが、後郷に歸つて意を程朱の説に專にした。定信が幕府に入つて執政となり、學政を改革するを見、述感篇を作つて謳歌し、やがて其の友栗山の召されて儒員となるに及び、大に之を懲惡して異學の

禁の建議をなさしめた。學正しからざれば教純ならず、教純ならざれば民興行せずと。その學禁の行はるゝ喜悅禁せず、自今而後異學邪說者竦然屏息皆白日の魑魅に歸し、愉快少からず」というて、まづ書を栗山に寄せた。また所謂異學の徒の囂々として起り、赤松滄州は栗山に書を送り、冢田虎は定信に上書して其の撤回を求むるに及び、栗山等に代つて攻撃の衝に當り、滄州に答ふるに滔々の辯を以てした。

今や栗山、二洲及び精里について叙すべき時が來た、されどしばらく筆を轉じて、拙齋と呼應し、また京の西依成齋、那波魯堂、福井小車等と連絡した大坂に於ける一團の朱子學者について記述せねばならぬ。何となれば、朱子學の興起はこれが源を大坂に發して、然る後に江戸に大成せしめたに過ぎぬからである。二洲を出したのも精里を出したのも共に大坂で、學禁の令の布かるゝに當つて聲援に努力したのも大坂の地である。定信はその企圖をなすについては、まづ之に囑目した。蓋し、當時の大坂たる、關東關西交通の要津であつて、堂島の米市場もあれば、諸侯の藏屋敷もあつて、富力は既に江戸を凌ぎ、隨つて文學も大にその勢を得て、前後に殆ど比類のない盛運に在つた。この時中井竹山の懷徳書院あり、片山北海の混沌社あり、互に學術の研鑽、詞章の攻究に盡した。その他、この二大勢力以外に蟹養齋あり、奥田尙齋あり、篠田徳

安あり、十時梅厓などがあつて、各門戸を張り、頼春水また才名大に聞えてゐた。その人の多きは、一々之をあぐる違がない程であつた。

享保の頃であつた、播磨龍野の儒中井登庵が大坂に寓して程朱の學を説き、命によつて懷徳書院の經營に當り、その師三宅石庵を教授とし、その歿後自ら之に代り、やがて五井蘭洲、三宅春樓、その後を繼ぎ、登庵の子竹山また其後を承けて之を管した。竹山(二二九〇—二四六四)名は積善、字は子慶、博學洽聞の譽高く、家學を以て程朱を尙んだ、されど自らいふ、わが學は林にあらず、山崎にあらず、一家の宋學であると。これ當時朱子學を説くものは、林家の門でなければ、闇齋の流であつたからである。竹山は尋常の儒者を以て居らず、慷慨大志がある、かつて定信侯から時務の諮詢をうけて『草茅危言』を爲つて獻じ、頗る時弊に中るものが多くあつた。竹山はまた詩を以て自ら處るものではなかつたけれど、能く巧妙の域に達して、その『五閨怨』の作の如きは、大に世に喧傳せられたといふ。江戸に來た時、澁井太室、細井平洲、井上大濠、井上四明と締んで相歡び、飲酒談笑唱和して、世に五井の交と稱せられた。その弟の履軒もまた兄と並び稱せられたが、全く朱子學を奉ずるものではなかつた。『七經雕題略』、『七經逢原』を著し、經旨を推して精緻を極めた。竹山の歿後は兄について懷徳書院で學生

のため、に講説した。されどいふ、伯氏の經業、小子當きに學ぶべし、幽人の事の若きは必ずしも傲はざれしと。幽人とはその別號である。頼春水、中井兄弟を評していふ、中井竹山時に膽張氣傲の態あれど、好人たるを害せず、その弟履軒や、偏僻而して亦事、事凡を超えたりと。履軒かつて放言するやう、四書五經性理三大全、儒者の三大厄といふべしと。動もすると人の視聽を驚かすこと、この類であつた。

春水はまた竹山兄弟と深く好誼を結んで相切磋した人である。字は伯栗、一には千秋ともいひ、安藝の人ではやく大阪に出で、學び、まづ詩を以て著はれ、所謂混沌社七奇才の一人として稱せられ、また筆札の敏妙を以て聞えたが、やがて朱子學に入り、竹山兄弟、拙齋、菅茶山等と仁義道德の要を講究して、學業日に進んだ。二洲の混沌社にあつたのを誘ひ、また精里と相結んで朱子學に純ならしめたのは、實に春水であつた。その二人の登庸せられて學政の改革に當るや、春水また拙齋、竹山等と共に聲氣相應じて正を衞り、異を攘ひ、その功與つて多きものがあつた。後、安藝の儒員として江戸の藩邸にあつて世子に伴讀した時、屢、幕命を奉じて書を昌平齋を説いた事もあつた。常に躬行を以て學となし、之を事業に施し、著書に従ふことを屑しとしないかつた。されば、その著作としては『春水遺稿』等數篇と、藩命によつて編輯した『藝備孝義傳』が

あるに過ぎない。その詩の如きも、侯の筵に侍して作る所、往々規諷を寓し、平居の吟哦も一飯君を忘れざる風があつた。病甚しきに及び、臥床中に十數篇を作つたが、格律整齊、皆君を慕ひ主を念ふの意を詠じたものであつた。その詩案頗る早く、衆の呻吟稿を屬する間に、春水は意を経ざるものゝ如く、或は柱に倚つて居睡りしつゝ、腹稿忽ち成るのであつた。病危篤に際して困極するに至つても、なほ人をして杜詩を誦せしめて聽いたといふ。

春水の弟二人、一人は春風、一は杏坪、春水よく之を誘導して學をなさしめ、兄弟自ら師弟となつた。春風は醫となり、杏坪は兄について藩の儒員となつた。杏坪もまた文名がある、その「原古編」の如きは、大に程朱の學を鼓吹する所があつた。

春水兄弟と交り最も善く、また大阪朱子學團と最も深く相結んで、朱子學のために氣を吐いたものに菅茶山がある。これまた拙齋と門を同じうして京都の那波魯堂に學んだもの、往來密にして、拙齋の嚴と茶山の和と相對して、而も其の意一に歸すといはれた。拙齋の廬は、茶山の居と相距ること僅に二里。ある日春水が拙齋を訪ねた時、送つて戶外に出でた。春水之を辭するけれども、談緒未だ了らないといつて聽かない。やがて半里ばかりになつた。春水また辭したけれども、與未だ盡きないとい

いうて、つひに茶山の門に到つた。入つて、今日はわが惡識よくも春水を驅いた、實は茶山を訪はうと欲するのであつたといつて、三人相見て大に笑うた事もあつた。されど、茶山は寧ろ詩を以て卓出せるもの、しばらく之を後章に譲つて、今はかの三博士の上に及ぼう。

栗山(二三九四—二四六七)名は邦彦、字は彦助、讃岐高松の人、もと林家の門に遊び、阿波侯の儒となり、京都に住して朱子學を説き、儒雅風流を以て其の名聞え、西依成齋、赤松滄洲、皆川淇園等と交を結んで相歡んだ。定信に拔擢せらるゝに及び、昌平黌儒員として、林大學頭及び岡田寒泉と共に學政を修め、五科目を立て、其の規模を一新した。栗山は著書少く、たゞ『栗山文集』等があるのみである。いはく、僕の迂腐、不急の書を爲ればたゞ人の耳目を損するのみ、書を著さぬこそ却て人に益する所以、即ち著ありといふも可なり」と。實に栗山は學者たるよりも、寧ろ政治家たる態度を有してゐた。その幕を拜するや、賀甘露箋を上つて「伏願益廣言語更闢學問」と。その期する所は、かくの如きものであつた。

二洲(二三九六—二四七三)名は孝肇、字は志尹、通稱は良佐、伊豫の人、大阪に行き、混沌社にあつて復古學を片山北海に學んだが、春水の勸誘によつて朱子學を知り、竹山兄

弟等と共にこれに従事した。後、幕命によつて昌平黌の教官となつた。『素餐録』、『正學指掌』等を著はして、徂徠を難じ、仁齋を駁し、陽明學を論じ、その他あらゆる異學を駁して餘力を遺さなかつた。その朱子を尊信するの篤き、徳伯子に至りて其の盛を極む、而して學術識見自ら千古に超出す。學朱子に至りて其の大を極む、而して德行言辭百世に師表たり」といふに至つた。

精里(二四一〇—二四七七)名は樸、字は淳風、佐賀藩の人、はじめ陽明學を學び、後、京に出で、福井小車にまた西依西齋に従ひ、最後に大阪に寓し、二洲及び春水と共に攻習大に力め、つひに朱子學を専らにするに至つた。佐賀藩の儒として、藩學のために力を致し、教授を掌つた。精里藩侯に従つて江戸に來るや、幕命によつて昌平黌に講説した、藩臣で官學に入つた第一人として、當時以て榮譽とした。後、擢でられて教官となつた。深く朱子學を尙ぶけれども、また山崎派の固陋の弊を憎んだので、學問極めて博洽、一時これに比すべきものなく、また朱子學徒の文章を輕視して攻めざるを戒め、自らも鍛練大に努力した。

三博士と大阪の朱子學者等とのみでは、未だ異學の禁の成立を説いて盡せるものではない。林家の中興の祖に述齋あるを知らねばならぬ。この人親しくその局に

當つたので始めて事は成つたのである。述齋(二四二七—二五〇二)名は衡、字は叔純、岩村藩主松平乘瀝の男を以て林家を繼いだ。澁井太室に師事し、また泛く布衣の交をなし、詞藝を以て相往來する者十數人に及んだ。寛政八年(二四五六)鳳岡以來私宰し來つた昌平阪學問所と聖堂とをあげて幕府に獻じた。是に於いて、昌平阪學問所が官學となつた。述齋命を承けて區域を開き、聖廟を改營し、黌館寮を建て、官私の生徒を増し、規模弘大はじめて天下の學政の中樞たるべきものとなつた。その時にいふやう、天下の公學を掌る者、教もまた公にせねばならぬ、その道德を一にし、趨向を固くするには、概ね朱子學を以て唱とすべきもので、一家の私説の如きは必ずしも嘔々するものでないと。述齋官撰諸書に意を盡すこと多く、また自ら漢土の書の我に存するもの十七種を刊行して、『佚存叢書』と稱した。幼少から詩を好み、十八歳の時一夜に百律を作つた事もあつたが、その後ますます、圓熟し、晩年渾化して其の堂に入り、一家をなすに至つた。されど、此を以て擅長するを屑しとせず、應酬の文字も大方其の稿をといめず、その他詩歌皆子弟門人の録したのを遺すのみである。嘗ていふ、學問の道は誠意に本づき、之を事業に推して其の用を宏うすべきである、かの文藝詞翰の如きは殊に其の餘業であると。區々たる文儒は決してその期する所ではなかつた

のである。かくて職にあること前後四十九年、家祿を増されて三千五百石となり、家格を西丸留守居の次に陞せられた。林家中興の稱があるのも偶然ではない。

かくの如くにして異學の禁は成つた、これ青天の霹靂ともいふべく、異學の徒は憤然として奮ひ起つた。この事たる、實にやむを得ざるに出づとはいへ、とにかくに學閥の樹立となつて、經術の不振を招く事は少なくなかつた。その朱子學の出でなければ仕官するを許さず、山本北山・市川鶴鳴・豊島豊洲・冢田大峰・龜田鵬齋を目して五鬼と稱するに至つては、迫害も亦極れりといふべきである。されど、幕府は權威のあるところ、天下おのづから之に趨り、つひには寺小屋でも白鹿洞揭示を誦するに至つた。こゝに於いて、氣骨ある者は放蕩不羈酒に奔り、然らざるものは賣名射利、書畫會に入した。山本北山・太田錦城・龜井南溟父子は其の學を恃んで傲然屈せず、豪快磊落風をなせる者、大窪詩佛・菊地五山の如きは精里がいふ所の鬼怪の輩である。精里の子穀堂・鵬齋・五山詩佛と舟を隅田川に泛べた時、好事者があつて畫を作り、上に各人の詩を題したのを印刷して、扇となして傳賞した。精里之を見て穀堂を戒めていふ、舟中のもの皆鬼怪輩のみ何故に伍したる」と。これやがて江戸の儒者に山の手と下町との二派を出した所以である。下町儒者の第一は北山であつて、江戸の親玉と稱せられ、權勢殆ど栗を叩する程であつた。

しかもなほ異學の禁の結果は永續するを得なかつた。破綻はすでに蕭牆より發した。頼山陽は春水の子、されど家學に背き、深く朱子の學説を信じなかつた。いはく、甚だ信ず、故に甚だ信せざる所あり、以て甚だ信するの私でない事を知るに足ると。昌平黌の儒員佐藤一齋、また欸を異學に通ずるものであつた。一齋(二四三—二五九)名は坦、字は大通、もとは述齋と同學の友であつたが、述齋が林家を繼ぐに及び、改めて師弟の禮を取つた。されど、その後年に至つては、宋儒の説より出で、陽明學に歸した。壯年の頃に『言志錄』を著し、晩年に『後錄』及び『晚錄』を著し、八十歳に至つて『耄錄』を著はした。その説くところ、朱王の一致をいひ、暗に異學の禁の謂れなきことを論じた。殊に聖堂にあつては朱子の學説を講じたけれど、家塾にあつては陽明學を講じたといふ事である。これ實に思ひ半ばに過ぐるものである。一齋には門人が甚だ多い、安積良齋・佐久間象山・竹村悔齋・林鶴梁・吉村秋陽・山田方谷等は特に錚々たるものであつた。良齋は昌平黌の儒員であつたので、朱子學に専らにした。その著『良齋問話』には聽くべき議論が多い。一齋の陽明學の統をついだものは、悔齋及び方谷であつた。

官學派の狀態はつひにかくの如きに至つた時、なほ其の人を求むると、松崎慊堂の門に出でた鹽谷宕陰、安井息軒の二鴻儒あるにすぎなかつた。慊堂は師儒を以て任じたものであるが、時運會せずして考證の學風をとり、やゝ純粹の朱子學でない所があるものであつた。宕陰、息軒も亦隨つて參するに衆説を以てする者であつた。宕陰かつていふ、死不願入儒林傳、輕甲一聯藏在家」と、『阿芙蓉彙聞』、『籌海私議』を著はして海防を論じたが、また徳川諸將軍の傳を叙して果さなかつた。息軒は慊堂から安井生は古人であるといはれて、弟子の禮を以て遇されなかつた。その著はす所に『管子纂詁』、『左傳輯釋』、『論語集説』、『息軒文鈔』等がある。その學は漢唐の註疏をも取つて考證精核に、文は唐宋を則として、秦漢にも溯り、筆端の遒勁を以て稱せられた。

官學消長の一瞥はこゝに終つた。要するに、寛政異學の禁によつて得たる所は、經術の不振と詩文の隆昌とである。もしそれ、朱子學以外經義を以て知られたものを求めると、九州に龜井南溟父子があり、大阪に太鹽中齋があり、また朱子學から出で、史學の一派を開いた水戸學の存するに過ぎなかつた。

南溟は筑前の人、山縣周南について古文辭學を修め、藩命によつて福岡に蜚英館を建て、竹田氏が世々管する所の朱子學の學館に對して諸生に教授した。されど、不

羈の性は累をなして、つひに職を免せられた。その著に『左傳講義』、『南溟問答』がある。子の昭陽また家學を繼ぎ、『讀孟子』、『國語獨了』、『月窟漫筆』、『月窟提筆』等の著がある。

中齋は大阪の與力であつたが、後、職を退いて専ら子弟を教授した。深く陽明學を信じて、『洗心洞四部書』を著はした。『洗心洞劄記』、『儒門空虛聚語』、『增補孝經彙注』、『古本大學劄目』が即ちそれである。就中『劄記』は最も心血を注いだもので、一本を伊勢の神庫に、一本を富士の石室に藏したといふ。天保の飢饉には藏書を賣つて貧民を賑恤し、更に町奉行に倉廩を開いて救賑せんことを請うて斥けられ、遂に兵を擧げてその遂行に努めたけれども、成らずして自殺した。時は天保八年二月である。

水戸學はもと闇齋の學統を承けたもの。光圀の彰考館を設くるや、闇齋門下の淺見綱齋、三宅尙齋等入り、修史事業を助けた。爾後修史は繼續したるも振はず、今や立原翠軒、藤田幽谷の出づるに及び、水戸の學風大に隆盛となつた。烈公齊昭侯、弘道館を開くや自ら記していふ、我が國の士民夙夜懈らず斯館に出入し、神州の道を奉じ、西土の教に資し、忠孝無二文武岐せず、學問事業その効を殊にせず、敬神崇儒偏黨あるなし」と。これ實に水戸學の綱領で、すべて國體の尊嚴を闡明するを第一義としたので

ある。幽谷の子に東湖がある、『弘道館述義』『回天詩史』に於いて、その抱負を見ること
が出来た。幽谷の門に豊田天功、會澤正志がある。正志の著『新論』『迪彝篇』の二篇に
は慷慨の聲全篇に溢れてゐる。天功は學問の該博を以て彰考館の編修となり、纂輯
に力めた。『時習錄』『明夷錄』等の著がある。天功と并稱せられたものに青山延子と
いふがあり、文辭を以て推された。『皇朝史略』『文苑遺談』『詞華摘英』等はその著であ
る。

第三章 詞章の推移

栗山等の朱子學を首唱するや、異學を排すると共に、閩齋學派の隘陋を忌んで、詞章
の攻究すべきことを説いた。二洲はいふ、學者文を學ぶには韓柳を尸祝すべく、また
歐蘇を取るべく、老泉南豊半山は稍小といへど兎に角に一家を構ふる者であれば、之
をも讀むべきである。またいふ、韓柳は堂の如く、明文は階の如し、階を歷ずして登
るは徒に庭上に躑躅して喜ぶるにすぎぬ、畢竟文士の拏鞋奴もて終はるものである
と。精里またいふ、文法は唐宋八家に至つて大に備つた、されどそれに局するなく、明
清諸家の長をも取つて補ふ所あれと。要するに、古文辭學派の餘弊を斥けて唐宋の

文格を移さうとするのであつた。これはまた、京都の皆川淇園も説く所であつた。
淇園は考證派の鼻祖、されどそのはじめは古文辭を學んだが、その非を悟り、古文には
唯韓柳、つぎには歐蘇があるのみであるというて、歐文集をも上梓した。またつねに
龍門の古にも今にも宜しく、絶世の妙文たることを説いて、諸生に教へた。淇園みづ
からの文は平易和淡、務めて陳腐を去り、高古超越、法によらずして法あり、最もよく龍
門を學べるものといはれた。而して、これは山本北山が古文辭派打破と殆ど相前後
するものであつた。

北山(二四一一—二四七二)名は信有、字は天禧、一に奚疑又は孝經樓とも號し、江戸の
人、井上金峨に就いて折衷學を修め、後一家をなし、經學は『孝經』を根據とし、文章は韓柳
を標本とし、詩は宋の清新を推した。異學の禁に際して、北山は五鬼の一に指された
が、遂に持説を曲げなかつた。漢唐守株の腐儒、宋明捕風の理學、ともに聖人の戸庭を
も窺ふこと事能はざるものであると。自ら儒中の俠を以て任じ、その印にも鏤刻し
た。その徂徠一派の文章を見るや、骨董文章と罵り、時文偽詩世間を晦し、人目を昧し、
人腸を腐すこと久し、これこそ眞の惡道であるというて、常に袂を振ひ目を瞋らして
攻撃し、また『作文志鼓』『作詩志鼓』を著はして、大に李王の排斥に力めた。『唐詩選』は偽

書である、『唐詩正聲』『唐詩品彙』は亡書である、『唐詩鼓吹』『唐三體詩』は謬詩である。時に或は『志毅』は詩教の書でない、前人の瑕疵を抉摘しておのが長を人に知らずのみと非難する者もあつたが、當代の詞人やがて之に靡き、詩風全く變革するに至つた。その友に龜田鵬齋(二四一四—二四八六)がある、名は長興、字は遲龍、金峨の門に出でて一家の説をなした。その意は折衷學の大成を期するにあつて、老莊をも取つた。いはく、老莊の書は聖經に背くに似て、實は聖經を守るものであると。されど、その名は詩に掩はれて、期した所のは却て學識淵博を以て稱せられた太田錦城に譲らねばならなかつた。鵬齋北山と共に李王の説を排し、歐蘇の流暢なる文格を唱へた。學禁の際五鬼の一として、その門より出づる者は仕官をとめられたので、門人皆去るに至つた。歎じていふ、定信侯は君子なれど學術の異によりて排斥す、門戶の弊も此に至つてはわが命已むと。つねに酒を被つて酒徒の名を馳せた。吟じていふ、泥醉裏已無歲月、山頽時豈有形骸、混々沌々麴世界、風々顛々糟生涯、元是青山白雲客、醉死何論埋不埋と。北山を葬る時、鵬齋赤貧にして禮服の袴なく、隣家から古い上だけを借り、立附股引をはき、藁束を手にし、醉顔にて會葬した。蜀山人問うていふ、その藁は青草一束、其人如玉の意か。答へていふ、寒ければ焚きて温らんため、また酒に酔う

て其人如猿而已。その狂態の一端を推すべきである。その著に『鵬齋詩鈔』『善身堂文集』『老莊摺解』『論語撮解』等がある。仁科幹『詩鈔』に序していふ、詩を以て小技となし、聊その鬱律の氣を吐出して一時の快を取るのみ、先生すでに金杉に隱處し、詩酒志を恣にする二十年、故に篇什麴蘖の氣多し、傷まざらんやと。

されど、なほ詩に於いて宋調を首唱せる功は、大阪の葛子琴と京の僧六如とを推さなければならぬ。子琴は葛飾氏、また蝨庵と號した。片山北海の門に入り、岡元鳳、賴春水、尾藤二洲、田子明、筱安道及び北海と混沌社七奇才の名をなした。宋を取つて明を排した。その著『葛氏漫草』『小園摘稿』は以てその詩風を見るべきである。六如は京都智恩院の僧で、名は慈周。修道の餘力を詩技に盡し、詩社を結んで清新の調を鼓吹した。みづからいふ、初め劉文翼に従うて遊び、しばらく南郭、萬菴等の詩を読み、頗る世俗のなす所をなし、數年の後省悟して體格を更めたのであると。その著に『葛原詩話』及び『六如詩鈔』がある。京阪に於ける詩風の革つたのは、實にこの二人の先鞭をつけたからである。さはれ、その大成せるは江戸の四詩家をまたねばならなかつた。市河寬齋、大窪詩佛、菊地五山、柏木如亭が即ちそれである。寬齋はその領袖にして、他の三家は其の指書を承けて樹立したものである。

寛齋(二四〇九—二四八〇)名は世寧、字は子靜、林家の門より出でた。その詩清麗と奇峭と二つながら兼ね得た。はじめ樊川を取り、後、香山を取り、更に放翁を取り、つひに諸家を鎔陶して別に機軸を出したが、また一體ではなかつた。その社を名づけて江湖といひ、小島梅外、柏木如亭、大窪詩佛、菊地無絃等は皆その門下に出でたものである。選著甚だ多く、『日本詩紀』、『全唐逸詩』、『陸詩意注』、『宋百花詩』、『詩文集』、『寛齋摘草』、『寛齋遺稿』がある。詩佛その肖像に題していふ、『出爲昌平學員長、不是他人維河先生、退稱江湖詩社長、不是他人維河先生、排擊七子首唱清新、不是他人維河先生、先生之老益變益妙、混化諸家金玉其聲、嗚呼偉哉先生於詩、變化無窮、猶龍名云云』と。

詩佛(二四二七—二四九七)名は行、字は天民、また詩聖堂の稱がある。性放恣にして物に拘はる所がない。北山の門にあつた頃、私に小壺に酒を貯へ、時々飲みては樂んで居たが、一日北山から小を好む者は天下の大をいひ難しといはれ、直に大空樽を求め來り、少しづつ酒を入れては且つ斟み且つ吟詠したとの事である。かゝれば、其の詩も興會屬する所、口を衝いて篇を成し、至味を淡泊の中に寓すといはれ、また詩境頗る超逸にして、行雲流水の致ありといはれた。その著に『詩聖堂詩集』があり、初篇より三篇に至る。

五山(二四二九—二五〇九)名は桐孫、字は無縫、高知の人。その著『五山詩話』に於いていふやうに、詩風屢變じ、少き時は時好と共に李王を奉崇したが、後少變して謝茂秦となり、更にすべて舊を棄て、李冬郎を取り、三十に至り韓蘇の門を窺ふに至りて悟る所あり、一切の纖弱なるものをすて誠齋の超脱せるものを學び、かくて今や諸家の精英を吸うて出すのであると。されど、宋詩纖巧の弊は五山に至つて愈、甚しく、頗る巧緻に失するものが少くない。その著は『詩話』の外に『五山堂詩稿』といふのがある。

如亭(二四二三—二四七九)寛齋の門に遊び、はじめは宋を主とし、後漸く唐の格調に移つた。『如亭集』、『如亭百絶』、『晚靜吟社集』等の著がある。晩年諸所を周遊して京にといまり、その病みて死するや、困窮の極、筆硯書帙を鬻いで葬つた。頼山陽いふ、もし如亭にして節を折つて行を飾りたらば、決して客土に死するが如き事はなかつたらう、しかし落魄の羈人で當時侯伯の間に出入して富裕の身たる寛齋と名を齊しうしたのには、以て其の才氣を見るべきである。

これ等皆或は書畫の會に出入して名利を逐ひ、或は儒者番附の好位置を占め、或は名家評判記に上々吉の評語を得んとあせる者であつた。かの『五山堂詩話』は『隨園詩話』に倣うて時人の作を收め、銀一朱を出す者には一首を載せ、二朱には評語を加へ、一

歩には賛辭を附するのであつた。如亭の如きも、その潤筆のすべては狹斜の巷に擲ち、つねに時の流行の新衣を纏うた。寛齋も醉郷侯を以て自ら居り、人間富貴似雲浮、唯我榮華別有謀、開國醉郷三萬戶、年過六十始封侯」と吟じた事もあつた。要するに、風流三昧の表には白眼以て官儒を見るといへど、裏には飽かず泰平昌運の樂を享けんとするのであつた。もし江戸の詞客にして遠く時流の弊を抜く者を求めると、時は少しく後るゝも、梁川星巖があるに過ぎぬ。

星巖(二四四九—二五一八)名は孟緯、字は公圖、一に無象、詩禪道人とも號し、美濃の人、江戸に出で、精里に學び、また轉じて北山に學んだ。星巖は詩佛より少きこと二十二歳、その江湖社にあつて吟詠した。その詩、思を用ひること精しく、溫潤清雅一字も苟くもせず、蘊藉典則字を用ひる事が巧妙であつた。その體二雅に近しと稱せられ、かの淡如として國風に類すと稱せられた詩佛と好箇の對をなした。星巖江戸を出で、妻の紅蘭と共に四方に優遊すること二十年にして、また江戸に歸り、かの江湖社の燒失した跡に居を構へた。これ神田お玉が池の畔であつたが、その時には池の跡は既に辨じ難かつたので、別に一小池を開き、竹林を環らし、名づけて玉池吟社と稱した。時は天保五年(二四九四)である。その徒集るもの甚だ多く、前後千餘人にも及んだ。

江湖山林を苑囿となし、鳥獸禽魚花木竹石を臣僕姬妾となし、その交はる所のもの騷流韵侶にあらざれば、則ち漁樵農にして、居常その間に優游自得すと。かの五山の徒と相距る遠く、隨つて其の詩は、風月に流連し、登臨憑弔するの作が多い。その宗とする所は唐詩であつた。詩佛、その集に序していふ、公圖専ら唐詩を宗とし、余は兼て宋元を取る、趨向少異といへど、その清新を以て至となす、則ち未だ嘗て同じからざるにあらず」と。

弘化二年(二五〇五)、星巖は社を賣つて郷に歸らうとした。今や外船の迫るあらば、海運とまつて江戸の人米粟に苦むに至るであらう、老羸の身は避けて累を他に及さぬやうにせねばならぬと。かくて京に行き、鴨川の邊に寓を定め、鴨沂小隱といひ、香を焚き書を讀んで自適の境にあつた。星巖もとより慷慨の士、安政五年の禁獄の事あるや、憂憤にたへず、慨嘆の詩二十五首を作つて時弊を譏つた。而してその年の九月に病歿した。その詩集に『星巖集』二十五卷、『閨集』一卷、『遺稿』八卷、別に『春雷餘響』十卷がある。門生の多きが中に、その最も聞えた者は、大沼枕山、森春濤、遠山雲如、小野湖山、岡本黄石、江馬天江、鈴木松塘等である。星巖の妻紅蘭また詩を善くし、兼ねて畫

にも巧であつた。『紅蘭小集』は『星巖集』と共に世に行はれた。星巖が勤王攘夷の説を唱へたといふので執へられた時も、紅蘭は有司の尋問に對して何の答ふる所なく節を守つた、かれはまた一箇の女丈夫であつたのである。

江戸の文人また多き中に、その雄を抜けば、まづ一齋をあげねばならぬ。一齋は八家をもて法とし、中にも韓歐を貴び、明には王文成を範とした。その文を作るや、腹稿すべて成つて然る後起筆し、千言忽ち成つた。句々法を古文に取つて其の精察を極め、更に推敲大に力めた。平生熟讀する書は朱緑の跡紛々として句法字法を採出した、その精練を知る事が出来る。良齋また融化渾成の趣があり、『文略』、『詩略』等の著があつた。こゝにまた奇文を以て知られた寺門靜軒あるを記憶すべきである。靜軒戲に『江戸繁昌記』を作り、才藻縦横寫實の妙を極め、大に世にもてはやされたが、而もこれが爲に江戸を逐はれ、再び儒を以て世に立つ事を得ず、髪を削り形を毀ち、自ら稱して無用の人というた。嘗て新潟に遊んで『新潟繁昌記』を作り、亦世に喧傳せられた。

この時に當り、關西にはまた詞客文人雲の如く起つた。備後に菅茶山があり、京に頼山陽があり、大阪に篠崎小竹があり、津に齊藤拙堂があり、九州に廣瀬淡窓及び弟旭莊がある。皆一世に卓越してゐる。

茶山(二四〇八—二四八七)名は晋師、字は禮郷、朱子學に専らにして其の寛政の興起に與つて力のあつた事はすでに述べた。備後神邊に居り、一塾を立て、黄葉夕陽村舎といひ、流を帯び樹を繞らし、瀟灑絶塵の境であつた。拙齋の歿後、山陽、南海の人皆こゝに就學し、塾内に收容し盡さず、藩に請うて郷校を起し、名づけて廉塾と稱した。

茶山もとより詩に長じた、しかも宛然たる田園詩人であつた。その書齋には僅に二三部の書をとゞめるに過ぎず、講説の餘暇には花を培ひ鳥を聽いて娛とし、孜孜として意を詞句の彫鑿にとゞめる事がない。これその師魯堂の境に隨つて興を寄せて樂をとり、憂を遣りて他を求むる勿れとの訓戒を奉るのであつた。故に、その詩に虚構なく、務めて耳目に觸れる所の實境を寫した。されど、推敲する事あまたたび、篇成る時は人に諮詢して改竄するを憚らず、しかもなほ其の淡雋穩秀を見るべくして、毫も艱苦の態をとゞめなかつた。おもふに、子琴出で、六如出で、江湖社出で、詩風變革したる時、剛柔互に用ひ、洪纖二つながら有し、風格の高逸なるものを求めると、一の茶山あるに過ぎない。その著はす所に、『黄葉夕陽村舎詩集』、『文稿』等がある。

山陽(二四四〇—二四九二)名は襄、字は子成、また三十六峰外史の別號がある。春水の子、杏坪の甥である。その少き時は放縱にして、ともすれば家を外の遊興につひに

病と稱して閉居の身となつた。後出で、茶山の黄葉夕陽村舎に寓して生徒を督する事二歳、されどその偉才は神邊の一寒驛にとゞまるを得ず、走つて京に入つて著述に力めた。諸侯聘すれど固辭して受けず、いはく「すでに父母の國に仕ふる能はず、決して朝服を着けて貴人を見ず」と。文政五年(二四八二)三本木に卜居して水西莊と稱し、東山に對し、鴨川に臨み、朝夕相對坐して古を偲び、かくて鬱勃の情を吟詠に發した。後藁葺の小亭を設けた、名高き山紫水明處は即ちこれである。山陽こゝに刻苦して著述の筆を進め、また讀書に耽つた。かくて暇あれば或は伊丹の釀を斟みながら、門生と歴史文章を談じ、或は琵琶湖の鮮を食ひながら、妻兒と團欒した。これ山陽の詩が家庭の什に絶調ある所以である。

山陽の學は自らいふが如く、我が學に一字の宗旨がある、即ち實、また折りて兩字となす、即ち適用」と。この故にかれば力を史學に専らにした。實に山陽畢生の事業は『日本外史』の著述であつた。その八九歳の頃から軍記物を讀み、十四五歳で東坡の史論を見て長歎し、また栗山の勸誘によつて『通鑑綱目』を讀み、更に一歳二洲の門にあつて史論をきき、歴史に興を起した。かくて、かの幽居中、司馬遷が『史記』編述の顛末を思ひ浮べ、慨然として筆を起してから脱稿するまで前後二十年、推敲に推敲を重ねた。

定信侯が禮を厚うして請はるゝに及び、はじめて管底から出して奉つた。文政十二年(二四八九)侯の賛辭を題して上梓し、世に行はるゝに及んだ。その定信から賞せらるゝや、亡き父春水を偲び、もし世にありなば如何様に喜ぶべきかと、まづ設位祝告した。『外史』の史實に於いて誤謬多きは世にすでに定評がある、而もこれまた山陽の許す所かの博引旁搜、辨析錙銖は世自ら其の人がある、襄等の及ぶ所でないというてゐる。要は、成敗盛衰の狀を覽、謀戰忠邪の跡を見、その大體の最も明確なるものを取らうとするのであつた。その史論の如きも、白石の『讀史餘論』に據る所の多きはまた世の熟知する所、されど中に大義名分を正さうとする義溢れ、また鬱勃の氣充ち、一讀なほ感憤せしめるものがあつた。加之、外には叙事の靈妙よく、司馬遷を模し得たと稱せられる。その縦横の才筆は、適勁と瑰麗とを兼ね、日本人の作れる漢文としては、上乘を以て推すべきである。また古今の政變を論じたる『日本政記』がある、晩年の作で、多く病中に執筆したものである、病革るも剛潤やまず、そのしばし筆をとゞめたる間に瞑するに至つた。是等の外に、また『通議』があり、『新策』があり、『山陽先生書後』があり、題跋ある。その議論の文は唐宋八家により、殊に蘇東坡の趣を體し得た。

山陽の詩はまた才華横溢を以て稱せられる。務めて實際を叙して虚設虚構しな

かつた。いはく、われ詠物を欲せず、詠物は詠史に若かざる故である、史中幾多の好題目があつて眞詩をなし得るのに、これを棄てゝいかで雁字鶯梭をなさうぞと。七言古詩を最も得意とし、七律の之に次ぐはこれが爲である、また「日本樂府」のあるのもこれが爲である。かの「蒙古來」の詩の如き、南溟の愛誦して措かざる所、壁に貼して酒酣なればつねに朗吟したといふ。これ實にかれの十八九歳の時の作であつた。その詩體、韓蘇の趣を得、また杜甫を誦すといへ、要は國民精神を發露するのであつた。故に、時に措辭の巧拙を以て問はるゝも、なほ隻句も人口に膾炙せられた。「詩鈔」と題する書は、その詩集である。その子三樹三郎といふは、勤王の士、國事のために死んだ、山陽の一面を繼げるものともいふべきであらう。

山陽の門人はさまで多くはなかつた。詩には藤井竹外があり、文に森田節齋があつたが、氣節風流遠く師に及ばざる評がある。齋藤拙堂(二四五—二五一九)は津の藩儒、韓歐の神髓を得たといはれた。「拙堂文話」「詩文集」「月瀬紀勝」がある。月瀬の勝はこの「紀勝」によつて顯はれたのは、なほ山陽の耶馬溪に於けるが如きものである。

小竹(二四四—二五一)は山陽と親交あつた一人で、かつていふ、經學は習ひて熟するにあり、また文は意を達すれば足り、詩は志をいへば足ると。されど、詩文の巧なる大阪に匹なしと稱せられた。「小竹齋詩鈔」がある。その詩疊韻を喜び、古今體詩に韻を疊むこと六七に至るものがある。才氣横溢よく險韻を押し、頗る東坡の風があると評せられた。

本州の地に於ける詩文の徒は大方これにつきる。たゞ京阪の詩客と呼應するものに、南紀伊の菊地溪琴、寛齋の門から出で、一家をなした。「秀餐樓集」「溪琴山房集」「海莊集」の吟がある。この時更に遠く九州を見ると、一大詩人のよく時流の外に超然として居るものがあつた。豊後日田の人廣瀬淡窓が即ちそれである。淡窓(二四四—二五一五)名は建、字は子基、龜井元鳳に従つて學び、後一家の言をなして子弟を教授した。前後集るもの四千餘人。咸宜園といふが即ちこれ。山陽、淡窓を訪れた時の詩中に、「啞啞聲處認柴關、村塾新開松竹間、斗折蛇行臨筑水、竹批雙耳見豊山」というたのもこれである。その塾規の整頓してゐたことは、漢學の私塾に於いては稀に見る所であつた。その標榜した學説は老儒の調和であつて、教育の理想は深沈精鍊の人を養成するにあつた。著述に「拆立」「義府」の二書があつて、その識見を知る事が出来る。その詩に於いては、もと時習を模擬して喜んだものであつたが、

弱冠の頃始めて『唐宋詩醇』を見て以來、大に力めて遂に一風體をなした。三十の頃眼を病みて、靜坐瞑思、詩律益精はしくなつた。『遠詩樓詩鈔』はその高調を誦すべきである。篠崎小竹これに序していふ、調雅にして品高く、忠厚友誼に原づくもの多く、絶えて無題香奩諸體に及ぶ者なし、其の詩を誦して其の人知るべし」と。龜井昭陽もまた序していふ、淡窓虛にして容あり、坦として封畛なく、學識また漢宋を混合して固滯する所なし、故に其の詩に於ける、亦諸代百家の賢者皆相見て逆ふなきなり、故に子基の詩境甚廣し、身を立つる方正未だ嘗て名利のために首を回らさず、是を以て忿厲克伐の語なく、悲慨不平の聲なく、讀者をして心和し意樂ましむ」と。實にその詩は清高澹雅、よく田園詩人の妙境を表はしてゐるものである。

弟の旭莊もまた詩に工に、大阪に卜居して兄弟東西に其の名を成した。名は謙、字は吉甫、最も古律に長じて詩境極めて廣く、その醇なるものに至つては、蘇陸に遜らざるものがあつた。『梅墩詩鈔』『文鈔』等の著がある。米艦の浦賀に來るや、『識小篇』を作つて幕府に獻じた。尋常の文人を以て自ら任せず、所謂活學者たることを期した。その邊報を聞く毎に飲泣やみ難く、即ち筆墨を藉つて懷を述べた。かくて其の詩愈、出で、愈、奇、随つて詩人を以て目されたけれども、實は其の志ではなかつた。

第四章 歌壇の鼎立

當代に於ける歌壇の活動は、眞に端倪すべからざる者があつた。江戸に千蔭春海があり、伊勢に本居宣長があり、京に香川景樹があり、各旗幟を鮮明にして、或は歌論に、或は吟詠に、各その所信を以て互に相降らなかつた。鼎立とは即ち此の謂である。

加藤千蔭(二三八—二四六)は芳宜園といふ。幼い時から父枝直の薰陶を受け、また十歳で眞淵の門に入り、爾來二十六年の久しき間親しく其の教を受けて一家を成し、權門貴族から花街の婦女にいたるまで、争うて其の門に入るに至つた。縣門中で詠歌の最もすぐれたもので、かの蘆庵の如きですら、君は海内一人なりと稱した。その歌風は眞淵に入つて眞淵より出で、『古今』以下の三代集の流麗なる格調を宗とし、時に交へるに『萬葉』の雄渾を以てした。たとへば、

和歌の浦や残れる雪もあしたづのはのかに見えて霞む春哉

隅田川簑着て下すいかだしに霞む朝の雨を知るかな

の如きものである。千蔭が眞淵の歌風と同じからぬは、また眞淵の眞意を汲んだからである。歌は眞心を詠むべきもの、作爲すべからざるもの、その詞も姿も心のまゝ、

おのが欲するまゝに詠むべきものとして、さていふやう、己れはた師の教のまゝに心には『萬葉』集中の調よきと『古今集』に依ることは爲し侍れど、數多の中にはいと後ざまなるも出で来るは、時世の然らしむるにて、自らなる理にや侍らむと。

『萬葉集略解』の著は、幾多の不備なる點はあれど、簡明なる解釋を以て世を益する事は大方でなかつた。家集を『うけらが花』といふ、歌文の集である。その文字もまた流麗を以て稱せられた。千蔭また狂歌に妙に、橘八衢の狂名を以て世に知られた。入木道にも卓越してゐたことは、今も『千早帖』『揖滴帖』などの世に行はれてゐるのでも察せられるであらう。

村田春海(二四〇六一—二四七一)は織錦齋また琴後翁とも號した。江戸の商賈の出であつたが、性質が豪放で財利に淡く、遊蕩に耽つて遂に家産を傾くるに至つた。早く眞淵の門に入り、また服部仲英等に就いて漢學を修め、中頃は京都に行きて皆川淇園に従つて漢學を究め、識よく和漢に達した。故に、その文章を作るにも、まづ法を漢文に取つて、唐宋八家の風があると稱せられた。高田與清はいふ、詞を古に取り、心を今にまうけ、姿を漢國にかりて、錦を織り繡をさへよそほひて、比なき功なり」と。これやがて後後に於いて上梓せられた小説『坐志船物語』に、太田錦城、菊地五山、大窪詩佛、等

の詩文の徒が、序跋を附して贊辭を吝まなかつた故である。而して、此の物語の粉本は支那小説に取つたものであつた。春海は眞淵に學んだとはいへ、必ずしも其の説には服せなかつた。「我が邦俗少うして儒、老いて佛を信ず、この二道を外にして求むるは謬である、中にも周公孔子の道こそ、まさしき我が道たるものである」とは、かれのいふところである。その歌風もまた眞淵と異なる所に出で、藤原奈良の時代より花山一條の時までの歌を通覽し、そのよき調を範として我が見たるふしを詠み出さうとした。故に、眞淵の歌をも、その第二期の詠を以てよしとし、第三期のものをば邪道に陥れるものとして排した。春海は文に於いては縦横の才よく千蔭にまさると共に、歌に於ては動もすると興淡きに陥りて、つひに千蔭に一等を輸せざるを得なかつた。されど、歌論の精しきはまた千蔭の右にあつた、『歌がたり』等がこれである。家集は『琴後集』といふ。

千蔭の門には傑れたもの少く、清原雄風が『怜野集』の編者として、木村定良が『草野集』の編者として知られてゐるに過ぎぬ。これに反して、春海の門には錚々たるものが頗る多く、考證家として知られた高田與清があり、註釋家として聞えた岸本由豆流があり、『歌城歌集』また『難武藏野集』の作者小林歌城があり、歌文の士清水濱臣がある。中

にも濱臣與清にまづ指を屈すべきである。

濱臣(二四三六―二四八四)は號を泊酒舎というた、不忍池畔に住したからである。その學問は和漢に亘り、考證の道にも深くあつたが、歌文によつて名高く、殊に文に長じて居た。『泊酒舎集』と『泊酒文藻』とはその著であるが、また嘗て縣門諸家の遺稿を集め『縣門遺稿』と題して上梓した。長歌を鼓吹するために『近葉菅根集』を撰び、眞淵派に對する堂上派の頑冥を憤つては『朝敵辨』を著はした。

與清(二四四三―二五〇七)は、また氏を小山田ともいひ、和漢古今の學に亘り、家に數萬卷を積んで擁書倉と稱した。『松屋筆記』は其の學識を窺ふに足る。當時平田篤胤の神道伴信友の考證と相ならんで、類語を以て和學三大家の一に推された。かゝればその詠一句をも苟しくせず、皆據る所がある。さはれ、その歌には奔放の趣がなく、その家集『松屋棟梁集』は、つひに濱臣の『泊酒舎集』に遠く及ばない。

眞淵の末はその一面を承けて純然たる文藝と化した。春海の如きは、眞淵の學に就いて説をなして、その學は單なる古道闡明にあらず、古歌の精神を明にして歌の本質如何を知り、さてその歌の本質にかなひたる古へぶりを唱道するにありとした。

眞淵が契沖よりも春滿よりも優れてゐるのは、此の點にありと稱した。かくて眞淵を以て全く歌人視し文藝者視した。しかもこれ、その時と江戸の地との然らしめたのである。

然るに、眞淵の古道闡明の意を紹述するものに本居宣長があつた。宣長は伊勢の松坂の人、眞淵に就かざる以前、すでに歌文に於いては一家をなしてゐた。かくて、宣長と千蔭とは共に眞淵の教をうけたとはいふものゝ、宣長は歌文より古道に入り、千蔭等は古道より出で、歌文に入り、その態度は全く異なるものがあつたのである。宣長及びその門下の國學に於ける活動は他に譲つて、その歌に關する主張を觀察すれば、『三代集』よりも更に降つて『新古今』の華麗幽玄の風體を取り、標榜するにも、いはれ、この説を以てした。その詠する所は、時に修辭の末に陥つて詩趣の落寞たるものもあれど、歌論に至つては卓見多く、『石上私淑言』『うひ山ぶみ』『玉勝間』等がある。いはく、物のあはれは、人の情が事物に觸れて、悲しく、樂しく、おもしろく、戀しく、思ひ出づる活きにして、そはすべての人に普偏なる性情である。ものゝあはれを知る、それが自然に發して歌となる、人にも告げて同じくあはれと思はせん爲である。物のあはれの極は戀愛である、歌が戀愛を詠する事の多きは自然の數である、歌の心は實は道德の外に脱離して居ると。宣長は『新古今』の歌風を宗とするも、また古道研究の一手段とし

て、古道を解するには古歌を誦し更にその體をも詠むべきであるというて、また『萬葉』派の詠をもなし、古風後世風と相分つて詠じた。かくてその家集の『鈴屋集』には、二様に分つて載せて居る。その子春庭父の歌風をさながらに取つて『後鈴屋集』の家集があり、養子大平また古風後世風の二體を詠じて、古風の家集には『藤垣内歌集』があり、後世風の中には『稻葉集』がある。

宣長が『新古今』風を尙んだのは、やがてその門に『尾張の家苞』の著書石原正明を出した。正明は最も力を極めて『新古今』の長をあげ、一首の口調をめでたく整へるのを本意として、餘韻餘情を深くこめ、たけ高くも、しめやかに、強くも、柔にも、百般の姿があるとして、唱道する所があつた。されば、随つて技巧を重んじ、蘆庵のたゞ言歌に對して、まづ攻撃の辭を放つた。

この時にあつては、氣息絶えんばかりの堂上派以外、蘆庵のたゞ言歌の勢漸く盛に、前場黙軒・小川萍流等の之を祖述するあり、また別機軸を開ける富士谷御杖があり、賀茂季鷹があり、これ等よりも後れて出で、更に遠く群を脱せる香川景樹があつた。

御杖(二四二五—二四八三)の父は成章というて、皆川淇園の弟で、和漢の學に通じ、殊に語學に精しく、『かさし抄』『あゆひ抄』『よそひ抄』等の著があり、和歌にも漢詩にも巧妙で

あつた。御杖の著『歌袋』は成章の意見を大成したに過ぎない觀がある。山崎美成いはく、詩人の吾邦の故事を取りたるは、『日本詩紀』所載の白石の雪の詩を最とし、成章の七律これにつぐ傑作なり、和漢兼學の才人にあらずんば能はざる所と。『一夜百首詩歌』『北邊七體七百首』『層城詩草』『北邊家集』等の作がある。御杖はその家學を繼いで益、家名を高くし、著述にもまた有數の作が多くあつた。『百人一首燈』『萬葉集燈』『土佐日記燈』等の註釋書があり、『歌袋』『歌道非唯抄』『眞言辨』『北邊髓腦』等の歌學の書がある。歌に關する御杖の所説は、もと獨特の神道説より出で、和歌の靈妙なる作用を認め、これ言靈の説ある所以である。言とは歌の表の意、靈とは裏の心、即ち言語以外寓する所の眞意である。言靈の動く所が和歌の極致にして、やがて神の表現である。鬼神をも感せしむるは此の妙用があるからである。所説に或は牽強附會の非難がないでもないが、また聽くべきものである。その歌を解釋するのも、また一には之を明にするが爲であつた。家集に『富士谷御杖大人歌文』がある。その歌は『萬葉』の佳調を取り、『古今』の妙所を兼ね、頗る自在なるものがある。その門下生は多くは語學の徒で、歌を以て繼げるは唯一の五十嵐篤好があるに過ぎなかつた。

季鷹(二四一二—二五〇三)は京都上加茂の祠官で、はじめは有栖川宮に就いて學び、

後に江戸に出で、千蔭等と深く交り、歌道を究めて京に歸つた。その名大に廣まり、揮毫を乞ふものが門前に市をなしたといはれる。家集を『雲錦翁家集』といひ、縦横の才氣が見られる。また狂歌にも長じてゐた。

景樹に至つては、實に稀世の偉才、詠歌に、歌論に、よく四面論難の中に立つて善戰し、つひに桂園派を以て、ひとり京都といはず大阪といはず、つひに天下をも風靡するに至つた。景樹(二四二八—二五〇三)舊姓は小林氏、因幡の鳥取の人、桂園東塢亭觀鶯亭等の號がある。十八歳の時に京に出で、苦學し、三十歳の頃、香川黃中の養子となつた。されど、蘆庵と交つて其の說に耳を傾くる身の、また宣長が古學を京に説くの氣運に際しては、『黃中詠藻』に於いて見るが如き陳套の歌風を墨守する香川家とは相容るゝの餘地なく、つひに相離るゝに至つた。かくて文化元年(二四六四)獨立して一家をなした。こゝに於いて、景樹は堂上派にもあらず、『萬葉』派にもあらぬ一家の新風を起し、歌は理るものにあらず、調ぶるものなりといへる綱領の下に、桂園派の一團を率ゐるに至つた。文化八年(二四七一)作の『新學異見』は、まづ眞淵の所說に一撃を加へたものである。歌は眞情より自ら發したる聲である、されば何を模し何を學ばうぞ。現代の歌は現代の詞を以て現代の調の上に歌はるべきである。かの『萬葉』の格調を

似せやうとするはゆゝしき妄論である、似するは虚偽である、似せんとして似せ得らるゝものでなく、似せ得たりと思ふはあぢきなき極であると。かくて『古今集正義總論』に『歌學提要』に、『隨所師說』に、その歌學說を明かにし、技巧を排し、眞心を説き、自然を尊んだ。これ等なほ蘆庵と同一說とも見る事が出来る。されど、景樹はなほ進んで調の說を成した。

抑、調は天地に根ざして古今を貫き、四海にわたりにて異類を統ぶるものなり。言語は世々に移り、年々に流れ、且貴賤と隔たり、都鄙とたがひて、定則なし。さるを後人詞につきて調をいふは、本末をとり違へたるものにて、大凡違はざる事少きはうべならずや。

誠實より成れる歌は頓て天地の調にして、空吹く風の物につきて其の聲をなすが如く、當る物として其の調を得ざる事なし。そは物に觸れ事につきて感動する即ち發する聲にして、感と調との間に髪を容るの隙なく、一偏の眞心より出づればなり。

調とはかくの如く靈妙なるもの、而も景樹は之を説いて深遠の趣をなさんとする傾も見られないでもない。その門人等が解して紛々の言をなすも理である。もし一

言で之を解するならば、調とは歌の聲調と思想との相調和してゐる意である、内容に即したる外形の謂である。この内容外形の諧調があつて始めて歌は成る、故に調とのへば歌、調整はざれば歌にあらずと。真心より自然に出づるを歌とすれば、歌の詞もまた自然の言語でなければならぬ。

平語をおきては歌は何處にあるべき。萬葉は藤原平城の古言、古今は弘仁より延喜までの平言なり。歌は今日の事情を述ぶるものなり、今日の事情を述ぶるは今日の言語を以てす。今日の言語は則ち俗言なり、されば歌は俗言のみ。

この平語俗言を歌詞とすることから、景樹はまた更に技巧をも排した。我はと誇れる人の歌を見るに、大方趣向と義理とを宗とする故に、なほ庭木の如く、自然の調、自然の姿を失ひて、無意味に落つるものが多いと罵つた。この和歌を技術以外に見なす事は、また大に論難せられた所であつた。

景樹の歌論は先人未發の言多く、随つて缺陷も矛盾も少くなかつたが、之を補ふに足るは古今風を宗した清新なる歌風であつた。調は姿、姿は氣高く優美にして、聊も荒々しき言葉を用ひず、雅韻に富みて假りにも凡卑の調に墜ちざるやうにと教へた。景樹は、優美流暢の體を求めた。

埋火の外に心はなけれどもむかへば見ゆる白鳥の山

富士の根を木の間木の間に願みて松のかげ踏む浮島原

など、朗々誦すべきものである。されど、縦横の才氣を以てなれる詠には、時に纖巧に陥り、或は想の自然を尙ぶの餘り、平凡に流れ、はては

蝶よ蝶よ花といふ花の咲くかぎり汝が至らざる所なき哉

の如きをさへ出した。これ今の俳諧者流に異なるところなしといはれる故である。景樹の家集を『桂園一枝』といひ、文政十一年(二四七九)世に公にさるゝに及んで、褒貶の聲の囂々たるものがあつた。また『桂園一枝拾遺』、『桂の落葉』等の家集もある。景樹はまた文章にも長じて、『中空日記』、『またぬ青葉』の著がある。

門生前後千餘人、その中で熊谷直好、木下幸文、菅沼斐雄、高橋殘夢、中川自休、兒山紀成、信田義勇、赤尾可官、僧亞元及び玄如等は、當時桂門の十哲と稱せられた。されど、今日から見ると、桂園門下の唱首としては、熊谷直好、穗井田忠友、渡忠秋、八田知紀の四人を推さねばならぬ。

直好は最も久しく且つ最も親しく師の教をき、桂園門下の巨擘と推され、柱石とも頼まれた者、家集に『浦の鹽貝』、『同拾遺』があり、また神樂、催馬樂を評釋せる『梁塵後抄』と

いへる好著がある。忠友は蓼義と號し、これまた奇才を以て稱せられ、作歌の外にも古の制度、地理、器物等の考證に心をよせ、『續日本紀問答』、『萬葉地名考』、『勝地臆斷』等著作はし、また奈良の東大寺の寶物について、『埋厨發香』、『觀古雜帖』などを作つた。忠秋は號を楊園とも桂蔭ともいひ、その歌は敦厚雅正、餘韻に富むものが多い。家集を『桂蔭集』といふ。

知紀(二四五九—二五三三)は稍後れて桂園の人となつたものであるが、最もよく景樹の歌風を傳へたものと稱せられた。號を桃岡といふ。その著に『調の説』、『調の直路』等がある。師説を祖述して、歌の調について論じたものである。桂園派が師の調といふことを解して、そは聲の調のみにて詞の與らざるもの、花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲、これがやがて歌とやうにいふを駁し、嬉しとも悲しとも詞に述べ、さまざまに其の心をいひわくるものにて、禽獸の發する聲とは自ら異なるべきものである、神代の歌も決して無思直言ではなかつた、その心その詞相協ひ美しきに至つて歌はあるというた。かくて知紀は談理の上には『萬葉』の格調を取るべきことをいうたけれど、その詠はこれに伴はないで、また純たる桂園派の外に出づることがなかつた。家集を『忍ぶ草』といふ。

この頃桂園門下以外にまた新派を唱へたもので、千種有功(二四五七—二五一四)といふがあつた。號を千々廼舎といひ、左近衛中將に至つた人である。身はかやうに堂上にあれど、地下なる景樹の歌風を取り、溫雅の調を以て知られた。家集を『千々廼舎集』といふ。かの冷泉風早、外山の三家の如き、閑院宮に上言して桂園に壓迫を加へんとした事もある時に、この人のあるのは卓見に服せざるを得ない。而も明治の世に至つては、知紀等、和歌を以て仕へ、御歌所の設立せらるゝに及びては、知紀の門から出でた高崎正風が所長となり、桂園の勢力つひに雲上に及んだ。時勢の推移は頑迷なる堂上派をも、つひに一掃してしまつたのである。家集『海士の荊藻』を残して、清新の調を以て稱せられた蓮月尼は、有功の門に出でた異才であつた。

三派鼎立の状態はかくの如きものであつた。さらば、三派が相互間の論争は如何。春海はまづ蘆庵のたゞ言歌を駁し、更にまた景樹の歌風に論及し、歌はその情すべて雅なるべく、其のいひ様も亦雅でなければならぬというて駁した。『筆のさが』は春海が千蔭と共に景樹の詠を酷評した書である。蘆庵の門下なる小川萍流は『雅俗辨』を以て之に答へ、春海また答書を草して之を論じた。蒿蹊も亦『續雅俗論』を以て其の意見を述べた。これを始として、業合大枝が『新學異見』の説を駁した『新學異見辨』あり、山

平伴鹿また同名の書を著はして眞淵の説を主張した。『桂園一枝』の公にせらるゝ、春海の門人秋山光彪は『桂園一枝評』を草して之を難じ、景樹の門下なる中川自体は『大ぬさ』を以て之に答へ、丹羽氏暉『大ぬさ辨』を以て之に對し、或は『大ぬさ評判』或は『大ぬさ評判辨』或は『燒鎌』など互に争ふ所があつた。『桂園一枝拾遺』の世に出づる、また小林歌城の『桂園一枝拾遺評』の攻撃、仲田忠顯が『桂園一枝拾遺再評』の辯疏等があつた。

千蔭・春海はまた伊勢派に對しても挑戦した。宣長が古風・後世風の別をおきて詠ずると、春海之を難じて、古風・後世風各心を其の一に專にする事多年にして、始めて其の様を模し得るのである、心の操なく時に隨つて其の皮相のみを取つて詠せんには、いかでか古きも新しきも誠の味が得られやうぞと。千蔭もまた、それでは人の口眞似にすぎない、己が心を詠み出づるものではないと。その後大平が古風の歌を募つて『八十浦玉』と題して公にしようとする時、春海は書をよせて、その古風の『萬葉』に限るを難じ、眞淵の所謂古風は花山一條の頃までを含むといひたるに、大平また之を辯じて應答再三に及んだ。

伊勢派の石川正明は蘆庵のたゞ言歌の非を説いて、歌は餘韻餘情を尙ぶもの故に技巧の要があると説いた。幸文また宣長の物のあはれの説に對して、これ人間の性情に古今雅俗の別をおき、歌の心を以て人の心の誠より隔離せしむるものであると、いうて、大に非難する所があつた。

以上あぐる所の外に忘るべからざる三歌人がある。松平定信・井上文雄・井上曙覽これである。定信は(二四一八―二四八九)は田安宗武の子で、夙に文學を好み、時の文人畫家を優遇して其の志を成さしめたものが多くあつた。また歌文の才があつて、『花月草紙』の文に於ける、『三草集』の和歌に於ける、實に傑出せる一である。文雄(二四五六―二五三一)は岸本由豆流の門に出で、江戸歌人の殿將である。歌學の書に『伊勢の家苞』があり、卓見に富んで居る。家集を『調鶴集』といふ。氣骨ある歌風である。故に自らも氣慨の歌を揚げて、氣慨の歌は人々生れ得たる本性より出づれば、自然に語勢具して點のうつべき所なきものであるともいうた。幕府の非運を見て、

行末の頼も今はなかりけり君が千代田を人にかられて

と詠じ、一時入牢の身となつた事もあつた。

曙覽(二四七二―二五二八)は越前福井の人、宣長の學風を慕ひ、また田中大秀に學を問ひ、後、その郷に閑居して脱俗の一生を送つた。慷慨の士で、つねに大義名分を唱道

した。歌は『萬葉』中の新體と『古今』中の古體とを取つて範とすべく、長歌は必ず『萬葉』の正格に従ふべきものであるというた。さはれ、その詠たる、敢て古今雅俗を問はず、縦横に之を用ひた洒脫の調、よくその人となりを現はしてゐる。これ決して他の歌人に見るべからざるもの、家集に『志濃夫廼舍歌集』がある。

着るもの、繼目繼目に子をひりて虱の神代はじまりにけり、

花めきてしばし見ゆるも鈴菜園田ふせの庵に咲けばなりけり、

後者は藩侯がその講説をきかうとしたのを辭せる時の詠である。

第五章 國學の大成

寶曆十三年(二四二三)五月二十三日、本居宣長は、その未見の師賀茂真淵が山城大和の旅行を終へての歸途に伊勢松坂に宿つたのを訪ねた。二人胸襟を開いて道を談ずること多時、かつて契沖の著書を読み、真淵の『冠辭考』を読んで古學研究の念、勃々としてゐた宣長は、その懷抱せる『古事記』註釋の企圖を告げた。真淵大に賛して、おのれももとの志があつたのであるが、而も今は『萬葉集』の研究に日も足らないので、つねに遺憾に堪へなかつた、幸に大に力められよというて、頻りに獎勵する所があつた。

宣長が國學の大成を期するの念は、是に於いて益々堅きを加へた。而して真淵の喜びはまた一とほりではない、江戸に歸つて直に門生に告げて祝宴を張り、更におのが『古事記』の研究を擧げて之に傳へ、上卷の考證註釋及び中下卷の旁訓訂正また書入したものを貸し與へた。

宣長は早く京に出で、儒を堀景山に學び、醫を武川幸順に學び、かへつて郷に醫を開いた。この間に契沖の書、また真淵の書を讀んで古學に心を傾け、真淵に面接してからは愈々努力し、江戸との間に郵書を往復してその指導を受けた。真淵の歿後『古事記傳』の著述いよゝゝ進み、また『直日靈』『葛花』等を著はして古道を説き、或は和歌の道を論じ、或はその詞藻を發表する所があつた。該博なる學識、卓見せる言論、すべて方九尺の一書齋より出で、世を驚かした。鈴屋といふのは即ちその書齋である。三十六の小鈴を赤き緒に貫きたれて柱などに懸け置き、之をひき鳴らして尊を遣つた。詠じていはく、

床のべに我がかけて古しぬぶ鈴の音のさやさや

その名聲漸く高く、弟子どもあまた集り來るに及び、紀伊侯に召されて進講し、享和元年には京に行きて、公卿の間に其の持説を述べた。篤胤が『古道大意』に、閑院の宮様

妙法院の宮様までも翁を召されて御慕ひ遊され、實に千古の昔より斯様の事はありや致さむで御座る」といへるは、この時の事である。

和歌に於ける宣長に就いては、前章に於いてすでに其の概略を述べた。その國學に於ける方面は果して如何であつたか。宣長は和歌を以て全然餘技と視なすものではなかつた。主と道を學ぶ輩は、多く漢流の議論に拘りて、歌を空事と思ふ、古人の雅情を夢にも知らぬものが、如何で古道を辨ずる事が出来やう、その神道とは名義にとゞまりて、只外國の意に過ぎぬと。即ち純文藝としてはものゝあはれを以て見、古道としてはその手段として見た。物の哀の説も、その所謂古道と、また全然歸趨を一にするのであつた。

宣長がその博宏の學識と偉大なる精力とを以て刻苦勉勵したのは、もとより『古事記傳』の著述である。我が古道闡明のすべてを之に籠めようとして、博引旁證殆ど致さざる所がなかつた。宣長は古來三部書と稱せられた『舊事記』『古事記』『日本紀』の中に於いて、最も『古事記』を信すべく尊ぶべき書とした。何となれば、古代の傳説をそのまゝに記述し、毫も漢意をとゞめないといふ信じたからである。かくて『古事記傳』は明和元年三十五歳にして筆を起し、安政十年六十九歳にして成つた。その脱稿の喜び

は如何ばかりであつたらう。書を荒木田久老に送つて、皇神の御めぐみにかゝり先づ存命仕候て、生涯の願望成就仕、大悦の至に存候儀候」というた。

かくて、その『古事記』研究の上に立てた神道説は如何なるものであらうか。この道は『古事記』『書紀』の兩典に記されたる神代上代の事跡の上に備つて居る。されど、儒佛の道の如く指示せられたる事なければ、識者といへど之を悟らず、つひに佛により或は儒によつて之を説いて居る。所謂神道者は皆さうである。抑々この道は天地自然の道でもなく、人爲の道でもなく、伊邪那岐伊邪那美二尊の始めたまひて、天照大神之を受けたまひ保ちたまひ傳へたまふ道である。さてこそ神の道とはいふのである。されば、神の道とは天皇が天照大神の大御心に隨つて、天下を治めたまふ正大公共の道である。之を下民にしては上の御おもむきに従ひ居り、父母に仕へ、祖先に事へ、妻子をいつくしむ道である。故に自ら世治まり國治まる。何ぞ人意を以て強ひて牽強附會して之を解釋しやうと。『葛花』にもいふ、皇大御國は天照大神の御國にして、産靈神の御靈も殊なれば、國も萬の國に勝れ、人の心もすぐれて生れつきたれば、直情徑行則ち中正を得て道は自ら備はりたりと。されば、道は必ずしも學問して知るを要せぬ、生れながらの真心が即ち道である。その真心とは即ち産靈神の御靈

によりて備へ持ちて生れたまゝの心である。之に反して外國のは虚偽である、文飾である、故に感情を抑制して敢てさかしら言をなす、人の真心ではない。伊邪那岐の神が女神のかくれさせなまつた時は、小兒の如く泣き悲んで夜見の國まで慕ひゆかれたのは、その真心を現はしたものである、我が國の道はかくあるべきであるといふのであつた。かく感情の自然を尙んだ宣長は、戀愛相思の情も自然のものとして、また當時の儒者の如くに罪惡視しなかつた。これかものゝあはれの説の出でた所以である。

宣長はまた吉凶禍福のすべてを神意から出づるものとし、人は心にしめて之を信じ、之を敬せねばならぬことを説いた。その敬神祭祀の衰頽したのを見ては感慨をもらしていふ、

治まれる御代のしるしを千木高く神の社に見る由もがな

かくて眞の神の道を明にしようとして、兩部神道唯一神道を破し、或は道教を論じ、或は儒教を論じ、また佛教を論じた。その中で、佛教の攻撃だけは稍その鋒を緩うした観がある。これ母が佛教信者であつたからであらうといはれてゐる。果して然るや否やを知らぬ。その神道に關するものは『記傳』以外『神代正語』『玉勝間』『玉匣』『初山

踏』がある。また『まがのひれ』に答へる『葛花』、『天祖都城辨』に答へた『天祖都城辨々』、『衝口發』に對する『鉗狂人』等がある。その他、語學の書には『紐鏡』、『萬葉集玉の小琴』、『詞の玉緒』、『玉霞』等がある。また文藝に關するものには、『源氏物語』に擬して其の缺を補はうとした『手枕』、『源氏』の梗概を叙した『紫文要領』等がある。これ等の文はすべて平明にして條理整然、人をして首肯せしめねばやまぬ風がある。その文藝に關しての卓見としては、こゝにも物のあはれの説を擧げねばならぬ。『源氏』研究の一なる『玉の小櫛』に於いて、『源氏』を解して教訓のため、儒教のため、佛教のための作といふ從來の批評の誤謬なるを論じ、さていふやう、

大方物語は世の中にありとある善き事、惡しき事、をかしき事、面白き事、あはれなる事の様々を書あらはして、その様を繪にもかき交へなどして、徒然なる程のもてあそびにし、又は心の結ばれて物思はしき折などの慰めにもし、世の中のあはれをも心得て、物のあはれをも知るものなり。

かくて、物のあはれを見せようとして作れる物語を教誡に取るは、花を見ようとして植ゑた櫻の木を伐つて薪にするが如きものであるというてゐる。これを今日に於いて見れば、さのみの新説ではないが、當時教訓主義の横溢せる時にこの言のあ

るのは、實に一異彩を放てるものであつた。

鈴屋門下はなほ眞淵に於いて然る如く、分れて二つとなつた。一は文藝の徒となり、一は神道繼承の徒となつた。春庭太平をはじめ、その門から出でたものは前者で服部中庸及び平田篤胤等は後者に屬するものである。宣長の子春庭(二四二三—二四八八)は後鈴屋といひ、失明して後家を父の門人稻懸大平に譲つて和歌山に移住せしめ、おのれは松坂にとまつて後鈴屋社を結んだ。その著に『詞の通路』『詞の八衢』等がある。大平(二四一六—二四九三)藤垣内翁といひ、和歌を以て知られ、宣長の上に出づると評せられた。『玉鉾百首解』『神樂歌新釋』『古學要』の著があり、また『稻葉文集』がある。大平の養子に内遠がある。本姓は濱田氏で、律令制度に精通しゐた。春庭門中内遠につぐものに、足代弘訓がある。伊勢の神宮で古典に精しかつた。加納諸平もまた春庭の門から出でた。諸平は宣長の門弟夏目甕麿の子で、その詠は『萬葉』の古調を取つて遒勁の調をなした。家集に『栴園詠草』があり、選集に『鰻玉集』がある。『鰻玉集』は同じ歌系に屬する者の詠を集録したものである。

石川依平亦春庭の門に出でた。幼い時分から歌才があつて神童と稱せられた。その詠亦『萬葉』の調をうつして、時に雄渾誦すべきものがある。殊に長歌に長じてゐた。

その家集を『柳園詠草』といふ。當時諸平・依平と交り深く、また名を齊しうして、一本二平の稱ある近藤芳樹には『寄居百首』『寄居歌談』があり、また『古風三體考』の著があつた。藤井高尚は備中吉備津宮の祠官、宣長の弟子で、松屋と號した。『歌のしるべ』に於いて宣長の説を祖述しながら、また特殊の説を述べてゐる。また隨筆に『松の落葉』がある。この人は歌よりも文の方が優れて居た。その著『松屋文集』『松屋文後集』に其の流暢なる筆致を見る事が出来る。その他『鈴木脹』といふも亦宣長の弟子で、語學に精しく『言語四種論』等の著をなした。また『離屋文集』がある。

こゝに一轉して、かの古學闡明の徒の上を見るに、まづ服部中庸をあげねばならぬ。中庸かつて宣長に請うて歌文を研究しようとした時に、教へ子共にそを好む輩多く、宗と立たる古學を力むる者なきは歎しき極である、汝は神世の道を明さむ事を專にして、さる筋に心を留むる勿れと戒められて、これに全力を盡した。中庸の識見は、その著『三大考』に見ることが出来る。宣長は之が跋を書いて、物よく考ふなる西の國の人ども古より未だ考へ得ざりしものを、明かにしたりと賛辭を與へた。『三大考』とは天地、泉にして太陽地球、月球の謂である。今日より見れば幼稚の言であるが、當時は必ずや人耳を驚かすに足りた。平田篤胤の『靈能眞柱』の説は、實にこれに基するもの

である。

篤胤(二四三六—二五〇三)は宣長によつて大成された國學說の上に立つて、古道の信仰を呼號し、國民の自覺を喚起した。秋田の人であつたが、二十歳の時に江戸に出て、困苦の間に學を力め、松山の臣平田篤穩に知られてその家を繼いだ人である。享和元年に始めて宣長の書を読んで、渴仰の餘りに、宣長のもとに書を送つて弟子とならうといふことを望んだが、その未だ達せざる中に宣長歿し、つひに歿後の弟子の籍におかれた。これより意を内外の書に潜めて、一家をなし、文化元年家を眞菅乃屋と號して子弟を教授した。太宰春臺の書を読み、其の無稽を憤つて『呵妄書』を著はして以來、『鬼神新論』『靈能眞柱』『古史徵』『古史成文』『古史傳』等を相踵いで出した。『古史徵』を草する際の如き、夜は七夜晝は八日の間寸間も筆をやすめることなくして脱稿し、さて覺めるまで起すなというて睡ること一日二夜に亘つたといふ。後、その著を禁裡及び仙洞御所に奉つて賞せられ、勅許を得て、その著に天覽叡感の四字を題した。また吉田家から神官の教授を、白川家から神祇道の學頭として學師職を囑托せられた。

篤胤はその神道をば古道と稱した。『入學問答』にいふ、

抑も古道と申候は、何の事もなく古の道と申すことにて、其は天皇祖神のこの天地を御造りなされ候を始め、上代の事實の上に備はり候。眞の道を聊も外國風の說を混へず、純粹なる古意古言を以て、すなほに説明し、その事實の上にて天皇命の天下を治め給ふ御政の本をも人道の本をも知り候學問故、古學と申し、その道をさして古道とは申候事に候

と。即ち宣長の學說をそのままに繼承したものである。されど、篤胤は當時漸く行はれ始めた西洋の天文說を取つて、地動說を唱へた。これ宣長と異なる所、なほ未來を論じ、幽冥を論じ、敬神祭祀の式をも定めて、宗教の域に進んだ。故に、その主張し鼓吹し、唱道するもの、熱烈なる態度があつて、つひに宗教家を以て目すべきものがあつた。これまたその文に勢力があり、氣慨があつて、議論文の上乗、稀に見る所のものがある。されば、その說に反對するものでも、その縦横の文辭をば推稱して措かなかつた。その畢生の力を盡して呼號することが、つひに幕府に忌まれ、その『扶桑國考』は絶版を命せられ、ついで江戸を逐はれて秋田に歸つた。時は天保十一年(二五〇〇)。

青蠅の空を飛ぶ世を耻づる身の面を照せ玉銚の道

とは江戸を去る時の詠である。かくて秋田に於いて歿した。

篤胤かつて詠じていはく、

花鳥をわれもあはれと見てはあれどあはれといはん暇なかりけり

と。篤胤にあつては、和歌は畢竟古道の方便に過ぎなかつた。その歌學説には『歌道大意』があつて、宣長の物のあはれの説を取ると共に、また説をなして、そを知るは古の人心を知るがために外ならぬ、即ち古道に入る手段であるというてゐる。その心は飽くまでも古道にあつて、一步もその外に出づる事がなかつた。

宣長歿後の弟子にまた伴信友(二四二三—二五〇六)といふものがあつた。考證學の泰斗である。世と交らずして、一意著述に力めた。著はすところ『長柄の山風』、『南朝舊記』、『神名帳考』、『神社私考』、『正卜考』、『假名本末』等がある。隨筆『比古婆衣』は、卓説に富んで、好著といはるゝ。『六國史』の校訂また確實を極めた。

以上は何れも宣長の衣鉢を繼承した人々であるが、その外の國學者で名のあるものもあつた。その重なるものを擧げると、一は荒木田久老、一は橘守部である。

久老(二四〇六—二四六四)は伊勢の人、外宮の神宮で、五十槻園と號した。専ら『日本紀』の神代卷を攻究し、やがて眞淵の門に入つて大に造詣する所であつたものである。當時國學を修めて宣長に懽らざるものは、皆久老の門に入つた。『日本紀歌解』續日本紀歌解『古事記歌解』等の著がある。

守部(二四四一—二五〇九)は伊勢の人、後に江戸に住して一家の學を唱へ、宣長の説に反對する所が多かつた。『稜威言別』はその見を知るに足る著である。當時信友、篤胤、香樹と共に天保四大家の稱を得た。古書の註釋に好著多く、『神樂入綾』、『催馬樂入綾』、『稜威道別』等がある。また『長歌撰格』、『短歌撰格』は、歌格の研究に以て創見の誇るべきものが少くない。

第六章 飯盛と眞顔

橘洲・漢江まづ端を發し、蜀山に至つて興隆の極に達した天明調の狂歌は、こゝに一轉して横流下行し、調は劣つて卑俗を加へたれど、その流行は範圍を廣めて全國に普及した。大阪の鯛屋流が再び勃興したのも此の時である。名古屋は橘洲門葉の事として、雪丸・田鶴丸等指導のもとに、その勢力の盛大の極めたのも此の時である。されど中心は依然として江戸にあつた。當時鹿都部眞顔・宿屋飯盛・馬場金埒・頭の光は狂歌の四天王と稱せられた。これ等は皆狂歌師を以て一の職業とする者であつた。四天王以後おのゝ社を結び、かの俳諧師がその群々を何側にいふに倣うて、或は側

と名づけ、或は連と稱した。五側といひ、本田側といひ、菅原連といひ、壺側といひ、花園連といふが是である。されば、遠き田舎の一丁字を知らぬ輩も、その詠の撰集に載せらん事を欲し、争うて入花と共に詠草を寄せ來るもの、その數を知らぬ程であつた。小説家にして又狂歌師たる式亭三馬は、これを見て、『狂歌鱒』を著してこれが指導たることを期した。その序にいはいはく、この頃の戯れ歌よ、調は年々に高う、意は月々に新しうなりもて行くを、こゝもとの人こそ大方にも心得れ、遠き境にある人等は時々に移ろひを得知らず、そこに新しと思ひて詠み出づるは、此處には既に詠みふるせるにて、こゝにいりほがぞとて嫌へるを、彼處には巧みなりとて徒に力入るゝもありて、古の戲咲歌の安らかにして然も滑稽ある事を知らざる輩に、いかで大江都の手振知らせて宜々しき歌詠ませんと思ひ廻らすに、觸ばかり目近う心得べきものはあらじと。この書は最も時宜に適した著述として、當時大にもてはやされた。

この流行の中で、驍名の高く世に現はれたものは、かの四天王中の飯盛と眞顔であつた。而して、時や、後れて、芍薬亭長根がまた屈指の一人であつた。

飯盛(二四一三—二四九〇)本名は石川雅望、江戸小傳馬町に住し、父の後をうけて旅舎を業とした。その戲號の多き中で、五郎齋といふのは通稱の五郎兵衛より取り、飯

盛とはその家業より名づけ、六樹園とは小傳馬町をもと六本木といへるが故に附けたものであつた。はじめ古屋昔陽を師として漢學を修め、佐竹侯の用達津村滌庵に就いて和學を修めたけれども、主として獨學で一家を成すに至つた。狂歌を好んで、橋洲に従ひ、後に太田蜀山について相質した。その晩年に於いて、一歳某公卿の江戸に下つた時、和歌の席に於いて人に問ふやう、東都にて和歌に秀でたものは誰れか、いはく、石川雅望。支那文藝に通じたものは誰れか、いはく、五老山人。また問ふ、六樹園といふ者があつて、弟子三千に餘るとは眞かと。すでにして、それが皆同一人であることを聞いて、大に驚嘆したといふ事がある。いかに其の通達するところの廣かつたかが知られる。

されど、その生涯はすべて逆境の中に送られた。父の歿後は家名を繼いで旅舎の主人として業を勵み、餘暇文墨に親しんで居たのに、寛政三年定信侯改革に際し、かの地方農商の徒を煽動して訴訟を起さしめ、その滞在中暴利を貪れる公事宿の所刑せらるゝものが多くあつたが、飯盛もまた冤罪のもとに江戸を追放せられて、多摩郡に移り、やがて四谷内藤新宿に轉住した。後に赦されて江戸に歸還する間、銳意研鑽して、つひて博覽洽聞を以て稱せらるゝに至つた。その學識の深きは、『雅言集覽』源註

餘滴』等の著述あるを見ても、其の一端を推するに足る。千蔭が『萬葉集略解』著述の際の如き、その力を待つことが少くなかつた。しかも當時にあつては、未だ眞價を認められず、空しく千蔭春海の名聲の下に壓せられた。これが飯盛の意に平かならざるところ、その心は國學の上にあるとはいへ、つひに自ら卑うし、狂歌師を以て甘んじたのである。故に、國學の研究は孜孜として怠らずとはいへ、飯盛は寧ろそを以て餘技とするの狀を裝はざるを得なかつた。この不平は自然に發して、

歌よみは下手こそよけれ天地が動き出だしてたまるものかは

と、暗に千蔭春海等の歌人を愚弄するに至つた。これ實に歌道を生命とする輩の快しとせざるもの故に常に歌人と伍せんことを希ふ眞顔を讚すると共に、ますく之を貶した。平田篤胤はその『歌道大意』に於いていふ、

今は江戸の狂歌師共が眞顔に化せられて、偶々古風の狂歌をも詠むとすれども、其の本が道を知らず薄情だから、實がなく止事なき事を嘲哂するやうな事をいふのでゐる。夫は相應に學の力も有と云ふ狂歌師の秀逸じやと云ふ狂歌に、歌よみは下手こそよけれ天地が動き出してたまるものかは。これは古今集の序に貫之の力をも入れずして天地を動かし云々と記されたを嘲哂したる趣で

甚だ歌道を輕じたる云ひ方である。また

三年までとかで結びし下紐のくさゝを今宵君にかゝせん

これは萬葉集に二人して結びし紐を一人して吾れは解き見じたゝにあふまではと云歌が有て云々。これは實は飯盛の歌だが、臭さを今宵君にかゝせんなど云ふやうな事は、とんと御座へ出して吟じもならぬ様な、むさく穢い事で、いかに狂歌でも餘りな事でゐる。

飯盛がかく惡し様にいはるゝも、蓋し眞顔の狂歌の似而非俳諧歌を以て任するに反抗するからであつた。標榜していふ、狂歌はもと落書體から出でたるもの、されば飽くまで滑稽を主とすべきであると。故に、野卑の俗調を以てその至れるものとして、本歌より遠かることを力めた。即ち蜀山の溫雅なる方面は之を眞顔に譲つて、他の奔放なり奇警なる方面をば傳へたのである。その風體は『萬代狂歌集』『堀河初度狂歌集』『堀川後度狂歌集』の撰に於いて明かに見ることが出来る。

飯盛の狂文はまた縦横の才筆の見るべきものがある。その著に『吾孀なまり』がある。また特筆すべきは擬古文に長じて『都のてぶり』『北里十二時繪詞』等の作がある事である。殊にこれ等は、或は遊里の景狀、或は兩國の繁華、富澤の古着市の混雜、或は

夜鷹などの鄙近の状態を描寫して精緻を極め、また用語の自在なる蓋し當時に於ける歌文の輩の模し難き所であらう。『梅枝物語』は戯曲を擬古文にて翻譯したものの、『通俗醒世恒言』は支那小説を翻譯したものである。すべて『伊勢』『源氏』『枕草紙』の筆致に交へるに『今昔』の調を以てし、優美の中に適勁を含んだ文體、他の隨從を許さぬところがあつた。

飯盛にはまた小説の作がある。その文體は皆その獨特なる擬古文である。『近江縣物語』『飛彈匠物語』『天羽衣』また『今昔』の體を學んだ『しみのすみか物語』等がそれである。『近江縣物語』は『萬葉集』に見えてゐるあをみつらの歌をおもひ寄せて題せるもの藤原季光の子梅丸が種々の困難を経て近江掾となり、子孫繁昌に至るまでの出來事を叙し、その間に冒險あり、滑稽あり、悲哀があつて、變化に富んでゐる。『飛彈匠物語』はかの『今昔物語』に記されてある飛彈匠の妙技に配するに、『更科日記』に見えてゐる竹芝寺の故事を以てせるものである。その據る所は支那戯曲であつた。その支那俗文學に於ける造詣も、淺くなかつたことは、これに依つても知り得られる。『天羽衣』は東遊駿河舞の歌により、駿河の國、有度の濱に住める漁夫白良が天羽衣を得たこと、また心の正しい白良に對する腹黒なる黒良の姦計などを以て一篇の脚色を立て

たものである。『しみのすみか物語』に至つては、飯盛が狂歌を擬古文で、行くが如き觀がある。

實に六樹園としてのその文は、これを春海濱臣と比すると、必ずや其の上にあつたといふべきである。何で眞顔の徒の企て及ぶ所であらう。

眞顔(二四一三—二四八九)姓は北川、通稱嘉兵衛、數寄屋河岸の汁粉屋にして又家主であつた。はじめ戀川春町の弟子として戀川好町と號し、また鹿杖部山人とも稱して小説に筆を執つたが、さしたる作なく、後に轉じて蜀山に狂歌を學び、こゝに眞顔と稱した。別號を狂歌堂といひ、後年には四方歌垣または俳諧歌場とも號した。寛政八年(二四五六)蜀山から四方側の判者を讓られ、文政十一年(二四八八)二條家から宗匠號を免許せられた。

眞顔は高田與清の擁書倉に出入して其の藏書を読み、或はその論議を聞く一人であつた。しかも學術を重んずる氣運に際して、狂歌の價値を高めるには和歌に近からしめるにあるとし、また落首體を避け、幕府執政者の忌憚に觸れざやうにと心懸けて、俳諧歌を唱道するに至つた。いはく、狂歌は『古今集』の俳諧歌、更に溯つては『萬葉集』の戲吟歌と同一體である、故につねに鄙俗の調を避けて古歌の風を模すべきである。

と。即ち文化十一年『類題俳諧歌集』を公にして、其の主張のある所を明かにした。上古以來元祿年間に至る俳諧歌を撰集及び家集の中から選び、その秀句には白黒の圈點を附して、其の趣を知らしめた。その翌年に公にした家集『蘆荻集』もその歌風を示さんがための著であつた。その席に燕栗園はいふ、我が歌垣の大人、世々の歌書に考へ正して、戯咲俳諧狂歌共に一つ心になりぬる由をつばらに説き示し給へれば、かつがつ心を得るに似たれど猶その様のたどくしさに、去年の春殊更に乞ひ聞えて、古人の詠み置れし俳諧歌をえり出て、木にのぼせてなん公にせられける。されど猶、初學の徒は、石にゑりたる筆の跡にて手かき習ふ心地すめるを、同じくは大人の自らよみおき給ふによらんと、國々より乞ひおこすが免れ難さに云々と。されば、當時の歌人學者は大方之を稱揚して、賛辭を與へる。例の篤胤は『歌道大意』に於いていふ、

近くは江戸の狂歌師四方眞顔が詠んだる歌を御取傳遊ばす堂上があつて、畏くも當今の御聞に入りて甚御感遊ばし云云の事があつたでゐる。何と、この眞顔と云は、孰も知ての通り、數寄屋町のいはゆる大屋で、眞に凡夫下賤の者だが、雅の道をば粗得たる人故にかゝる大御惠の幸を蒙た事で、有り難いなど、云も更なこ

とでゐる。其時眞顔の歡びの歌

武藏野の小ぐさか雉子をどり立ちかたじけなさにはろく泣かゆ

と詠んだでゐる云云。是は序だによつて云ますが、今江戸に狂歌師と云ふがしたゝか有て、何れも穢げなる狂名を付けて、きたなげなる言ばかりを云ひ散すが、この眞顔は篤胤も親しく交はりますが、そんな輩の群をば抜出た處が有て、尤も世の初學の人を導くとは、其の竝に穢氣なる歌をも詠めど、夫は謂はゆる方便にすること、實の處は萬葉や古今集にある俳諧體といふに心を入れて、狂歌も古風に返さんと云ふ心で、其の立たる筋は甚尤なる説でゐる。然るを俗の狂歌師共が、謂はゆる忌敵とやらで、何くれと毛を吹て疵を求め誂り散すけれども、實は眞顔の足元へも寄付くことではない、殊にあつく本居先生の説を信じて、古道にも大に身を入れて居る故、その歌學も古學で能く辨へて居る。

篤胤はまた『氣吹舎文集』の中に眞顔を賛してゐるが、與清もまたその『擁書漫筆』に於いていふ、

北川眞顔はじめ落書體の狂歌をもて其の名高う聞えしに、後には風體をかへて萬葉古今の俳諧歌をおこせり。類題俳諧集六卷をあらはして世人の眼を開か

しむ。和唐の學にわたりて文かくわざに妙なり、家集七卷蘆荻集と名づく、軸々金玉の聲あり。余が擁書倉にてよめる。

月雪のあかりはからじ打見にも何くらからぬ宿のふづくゑ

かくの如きを以て、その主義とする狂詠は、もとより穩雅である、清麗である、されど動ともすると滑稽を忘れて、無趣味のものを出した。蜀山の縦横はなくて、時に纖巧に落ち、輕佻に趨つた。これまたその人となりを現はしたものであらう。詠草を見る時も、社中にて錢ある者に高點を附し、歳暮に社中から贈られた鏡餅を列べおき、それに名優の名を附けて、そこから贈られたやうに装うたといふ。かの二條家から狂歌の宗匠號を許されるとして、飯盛と共に欺かれたのは笑ふに堪へたことである。しかも當時飯盛は物多く費したれど、眞顔は社中から多くの收納を得て利する所が却て多かつたと評せられた。かくの如くにして狂歌は漸く俗了しようとした、その凋落の兆の見えそめたときは、また流行の最も激甚を極め、側といひ、連といひ、亭というて、おのゝ門戸を張つて、ひたすら社中の多からうことを欲した時である。

その判者中、やゝ飯盛眞顔の後をつぐに足るものは、芍藥亭長根であつた。

長根(二四二八—二五〇五)實名は菅原三郎兵衛喜三二の弟子となつて二世喜三二

と稱し、戯作に筆を執つた。また下谷三橋邊に住してゐたので三橋喜三二ともいはれた。後に狂歌に専らになつたのである。されど、蜀山の流を汲まず、一家の風をなさうとして、雅正の體を取つた。さはれ其の撰は自家の好む所には偏しなかつた。常にいふ、同じ道に遊ぶ者は皆兄弟なり、兄弟心も形もたがはざる者があらうか。その下の人をして自ら好む所と同じくなさうとするは、長根の知らざる所である。これ判者として稱せられた所以である。その家集に『芍藥亭詠藻廣陵集』がある。また『芍藥亭文集』がある。

第七章 俳壇の俗了

俳諧に於ける天明の中興は實に冲天の勢であつた。しかも反動は早くも來つて、寛政より文化にかけて一向溫順なる格調を欲し、やゝともすると沈滯の域に陥らうとした。されど、其の中にも一道の天明清新の調は存して居た。井上士朗、建部巢兆、松窓乙二、鈴木道彦、安井大江丸等が、或は曉台の門より、或は白雄の門より、或は蓼太の門より出で、一家をなし、更に夏目成美、小林一茶等の獨特の俳風を開く者があつて、これを率ゐたからである。中にも、優秀なる者を抜けば、大江丸、一茶、成美の三家であ

る。

大江丸二三八二四六五は大坂の人、江戸飛脚に従事し、その所用のため江戸との間を往復する事前後七十回に及び、また遠く奥羽にも旅行した。それは悠々吟哦の俳諧行脚ではなかつたが、これが爲に詩囊を豊富にしたことは果して幾何であつたらう。松島に遊んだ時の如き、沈吟苦思して一句をも得ず、ふと蓼太の吟、朝霧やあとより戀の千松島を思ひ浮べ、その實境に照し見て、はじめて平淡の中絶妙の詩趣あることを悟つて、『俳諧懺悔文』を作つた事もあつた。大江丸は師事する所も多く、風雅の友も亦多くあつた。その『俳諧袋』によつて見るに、雪中庵蓼太、活々坊、舊室、吸露庵、涼袋、勃々庵、良能に師事し、竹阿、二柳庵、鳥醉、蒼狐、麥水、後川、蕪村、無腸蝶、夢蘭、更竹、巢嘯山、吞秋、青羅、完來などを先達として、疑義を質した。半時菴、淡々には十二三歳の頃から往來して、淡々が門人に教へる所を聴いたが、今より／＼に思ひ出されて益多かつたといふて、教外の師として仰ぎ、その他入楚、蝶羅、成美、于心、東瓦、雨什、春蟻、喜齋等を、この道のしるべの友とした。中にも、最も推稱したのは蓼太と蕪村とで、當今俳諧に於いて人情を盡すもの、この二叟であるとも評した。この二人の間に立つて執筆となり、三度飛脚の便を以て一卷の『往來歌仙』をなさしめた事もあつた。舊室の門に入つた時は

芥室と號し、良能の社中にあつた時は舊國、舊州と稱した。大江丸が師友の多き、かくの如きを以て、その格調は自ら諸家の風を學んで、必ずしも一ではなかつた。その題材の人事に多くあつたのは、蕪村等に私淑した爲であらう。また新奇に趨つては、談林風の吟も少くなかつた。その家集に『俳諧懺悔』、『俳諧袋』がある。大江丸の俳風を知ると共に、當時の俳壇の状況の一端をも明かにすることが出来る。交友間に於ける見聞感慨をも記載して居る。大江丸の家には俳諧修行者の來り宿する者が絶えなかつたが、かの二書も一にはその唱和の吟詠を空しくせざらんとする故であつた。『俳諧袋』にいふ。

一茶坊の東へかへるを

雁はまだ落つて居るにおかへりか

これ一茶が寛政年中西國行脚の途中に立ちよつた折の事であつた。

一茶二四二三―二四八七は信濃柏原村の農、幼い時から繼母の手に苦められ、我と來て遊べや親のない子どもの吟をなしたが、爾來輾轉不遇の間に生長した。學問に志したけれど、それもまた母に禁せられた。十四歳の時つひに放逐の身となり、巢なし鳥の哀しさは直に罫に迷つたが、辛うじて江戸に出で、或は儒者の僕となり、或は昌

平覺の使丁となり、その餘暇を偷んで纔に學を修めた。天稟俳諧に長じてゐたので寛政二年葛飾派の俳人其日庵素丸の門に入り、二六庵竹阿の名跡を繼いで點者となつた。「ふと諧々たる素振の俳諧を囀り覺ゆ、折柄敷島の道盛なる時に、大木の蔭頼母敷立寄て、十日二十日の勞を休むるに至れり」とて、西國修行の途に上つた。大江丸を訪問したのもこの時である。三十餘歳にして郷里に歸つたが、家は既に繼母の出である義弟のものとなつたから、自らは閑居して、貧しい日の中に句念に心を傾けた。されど、つひにはまた白髪頭を吹かれつゝ、名利の地なる江戸に來り、上野の丘のほとりなる裏長屋に居を定め、涼風もまがりくねつて來るといふ所に、脱俗の生活をなした。晝も行燈を點しおきて煙草火にかへ、或は來客があつて食事頃となると、伴ひ行きて飯屋に至り、食し終れば互にその價を出したといふ。この飄逸の性質から發する俳風は、また推して知るべきである。もとより葛飾風の區々たる法式中に局すべきものではない。果然破門の身となつた。かくて江戸を出で、東北に行脚し、再び雪五尺の故郷に歸つて、つひの栖所を定めた。文政三年中風に犯されて殆ど危篤に瀕したけれど、幸に命を保ち蘇生坊と號した。されど、後七年にして、同病にて歿したのである。

これ等はかの悲惨なる生涯の一部を傳へたに過ぎない、眞の涙の生涯であつた時に、自ら狂を以て疑ふに至つたのも理である。その句に、或は世に或は人に對する憤恚の情を寓するのがあるのも、もとより然るべきもの。随つて、弱者に對しては深き同情を寄せた。老人小兒の吟の多いのは、これがためである。「瘦せ蛙負けるな一茶こゝにあり」の如き、蟲鳥にまでもその思を及した。虱すら潰すには痛ましく、門に棄て、斷食させるには忍びず、柘榴の果が人肉の味ありといふを思ひ出で、は、我が妹の柘榴に這はず虱かな」とも吟じた。一茶の句は洒脱を以て滑稽を以て稱せられる。されど、またその中に赤裸々に現はされた寂しい、やるせない、一茶その人を見ねばならぬ。その語を卑俗に取り、その材を粗野に取るも、畢竟所謂風流の餘技に出でたるにあらで、眞情を發露せんがためである。「一茶發句集」「一茶句帳」「おらが春」「七番日記」「一茶聯句集」等がその句集である。

成美(二四〇五)一四七六は大江丸の詞友、また一茶と善交のあつたもの、一茶の師と誤り傳へられたこともあつた。江戸の富豪にして札差業を營んだが羸弱の身であるので、天明二年家督を弟に讓つて俳諧に世を避け、本所多田森に草庵を結んで閑

寂に老を待つた。蓼太、巢兆、道彦等と交はり、その間に一家を成した。その言にいふ、世に知られん事を求めて心にもあらぬ句をなすものは、世に阿る徒にして、最も卑しむべきものである。これ自ら高きに居て快しとするのではないが、心を高遠の境に置かずば、その風格次第に卑俗に陥ることに留意せねばならぬと。時流を超えた見識のあつたことが知らるゝ。されど、その詠は作意に過ぎて、雅情足らずとも評せられた。『成美家集』また『四山藁』『隨齋諧話』がある。

これ等三家を以て代表せられた文化文政間の俳諧は、一轉して天保に入るや全く俗化した。寺小屋の數もまして教育も普及し、市井の徒も文字を解し、やゝ文藝の嗜も出づると、食指はまづ最も入り易しとおもはるゝ俳諧に於いて動くべきである。平談俗話といふ旗幟の樹立も、一はこの趨勢に乗じたに過ぎぬ。かの市井の徒の望む所は遂に句集上の虚名のみ、運坐の席の景物のみ。故に、それが判者たる所謂俳諧師の數はますます加はつて、愈々俳風を俗化したのである。かくて俳諧師の跋扈は、累を俳諧に遊ぶ徒にも及ぼすに至つた。『舍利風語』にいふ、

すべて三都には俳諧者多くして俳諧に遊ぶ者少し。是をいかにと考ふるに、今の世未熟不鍛練の下手にても、俳諧師となれば用ひられ、會席にもものさばり高坐をし、餘業あつて俳諧に遊ぶ者より會釋を貪り、自ら黒うとと誇り、又達人上手たりとも餘業を抱へたる者は白うとと名づけ下坐到着き、剩へ下手の黒う人に貪らるゝなり。富家の者は只恵み施すと心得、さのみいとはずといへど、高坐不寐を憎みて快よからず、中より以下の者はたまりかねて休俳と披露して餘の業に遊ぶ。又至て熱心の者は餘業を捨て、彼の仲間に入るなり。されば俳諧に遊ぶ者は市中にはいと稀なり、歎かはしき事共なり。

また行脚をなすものも風雅のためにあらず、たゞ豪家遊民を尋ね、遊里の幫間に類するもの、詮する處は衣體を飭り、魚鳥に飽き、淫酒を恣にせん事を望む墮落放蕩の徒であるともいうて居る。所謂俳諧師が風雅の害であつたが、流石にこの筆者梅通の師成田蒼虬とまた櫻井梅室及び田川鳳朗にはやゝ異なるものがあつた。三人は天保の俳壇を領して名を齊うし、梅室の如き自ら稱して、名人は蒼虬、行狀は鳳朗、上手は梅室であるというた。されど、三人も亦時代の人である、否世の俗俳の徒より一日の長あるのみにて、もとより俳諧俗了の罪は免れ難いものであつた。梅室は自ら上手を以て許し名聲藉甚たるも、そはその格調の卓絶せる故ではなかつた。その貧しくて明日の事も覺束ない中にも、行脚の徒來ればおのが食を分ち、留守の中にもその妻が

主人に代つて草鞋を休ましむることが、世に傳唱せられた爲であつた。以て其の他を知るべきである。

蒼虬(二四二—二五〇二)は金澤の藩士、高桑闌更の門人、三世芭蕉堂、南無庵等の號がある。江戸にも下り住したが、京都に於いて蕉門中興の祖を以て稱せられた。その句體は優しく雅かなるを求め、平明を旨とした。その附合の如きも、蕉風の髓腦たるひびきなく、句なく、また幽玄なる趣なきに至つた。要は平話の大道を開かうとするにあつた。されば、その旨を承けたる梅通はいふ、蕉門に『七部集』を要文とすれど、『猿蓑』『炭俵』『深川』等をもと、すべし、その餘『春の日』『冬の日』などは、その世の人に應じて門に入らしめ、終に平話の大道へ導く階梯と知るべしと。實に『春の日』等を棄て、まづ『猿蓑』を取らうとするのは、高雅を避けて平俗に移らうと欲したのである。これ梅室鳳朗、また意を同じうする所であつた。

蒼虬は句を案ずるに刻苦した。句數十を得て、その中の二三を抜いて門人に評させ、評二三人に及んで始めて發表した。故に、一季に數句あるに過ぎねど、皆捨つる句なく、多年の間には持句數百に及ぶと云はれた。時には一句を案じて徹宵することもあつた。その作に『蒼虬翁發句集』がある。

梅室(二四二九—二五一二)は加賀侯に刀研ぎの技を以て仕へたが、致仕して後、闌更に就いて俳諧に心を潜めて一家を成した。居を江戸と京都との間に移すこと數次に及んだ。嘉永中二條公から俳諧の先達中興の器ありとて、花の本の宗匠たることを許可せられた。その句作は蒼虬より劣つたが、評者としての名聲は遙に凌駕して居た。

名月の出て雨の夜を見せにけり

の如きに至つては、何等の詩趣をも認め得られぬ。たゞ作爲せるのみ、十七字を排列したるのみ、自ら上手と稱したのも畢竟これあるが爲であつたらうか。その作に『方圓舍句集』がある。方圓舍とは其の別號であつた。

鳳朗(二四二四—二五〇七)は俳諧を父鼎山に學び、また鈴木道彦に就て學んだ。『自然堂千句』は、當時にあつては、異彩を放てる獨吟の千句である。その謹嚴篤實なる性行は、かの俳諧師然たる所を比較的になからしめた。これ梅室蒼虬が市井の間に羽翼を張つた時、かれは侯伯の間にその勢力を占めた故である。これまた梅室をして行狀をもて目せしめた所以である。句體も雅正なるものが多くあつた。

當時また鶴田卓池がある。曉臺の門人で、後に士朗の弟子となつた。前三家と共に

天保四大家の稱がある。

要するに俳諧は俗化してしまつたのである。想の平俗を求めては、餘情なく、餘韻なく、詩として見ることの出来がたい有様となつた。辭の平俗を以てしては、何等の含蓄もないものを生じた。天保の俳諧には、連句たりとも故事古歌のおぼつかなきを求めず、殺伐兵器のたぐひをつかはす、虚無の説を用ひず、枕詞のぬめりを去り、漢語の堅きを取るべからずと説くものさへあつた。かくて成る所は月並調のみ、點取調のみ、漸く下つて嘉永安政に際しては、俳諧はつひに文藝として許されざるものとなりはてた。

第八章 脚本の圓熟

泰平の世、歡樂の氣はおのづから鼠木戸の中に籠められた。夜のまだ明けきらぬ頃から集ひ來つて、恍として一日の長きを忘れる。操座の類廢せる今や、歌舞伎の繁盛は其の極に達した。俳優は一代の寵兒である、その似顔の錦繪が飛ぶが如くに賣れる。江戸もさうである、大坂もさうであつた。「江戸見ては外に名所もなかりけり、團十郎の花の三月」と歌はれた白猿、藝顔内所、三徳兼備と稱せられた瀬川菊之丞や、

後れて五代目松本幸四郎、七代目團十郎、江都根生お山の開山といはれた五世半四郎は江戸の名優で、古今無類總藝頭と讃せられた三代目中村歌右衛門は大坂の名優であつた。名手相踵いで世に出づれば、脚本界また作者その人を得ねばならぬ。櫻田治助、並木五瓶、鶴屋南北は江戸に於ける屈指の輩や、劣れど近松徳貞、辰岡萬作、奈河晴助は大坂に於ける錚々たる徒であつた。

治助(二四〇八―二四八〇)本名中村平吉、狂言堂左交と號した。堀越菜陽の門人である。常に吉原に遊んで、遊女の痴情を盡して狂言の資料とした。随つて、其の作は遊女を題材とするものが多い。また江戸の人氣土地の風儀を知らうが爲にしばしば居を移し、晩年花川戸柳の井の隣家に住し、柳井隣と號した。寶曆の末から淨瑠璃を著はすこと百二十餘曲に及んだ。生涯の中に淨瑠璃塚建立の望があつたが、果さずして歿したので、翌年の文化四年に舊友及び門人等が相謀つて、辭世の一句を彫刻して、柳島の妙見寺内に建てた。その淨瑠璃とは豊後富本その他の音樂に合はせて舞踊する所謂振事劇の詞章の義である。「傀儡師髭の門松」「我背子戀の合槌」「戻駕色相肩」「積雪戀關戸」等は其の作である。坂東三津五郎のためにせる七變化の中、汐汲の歌詞に「よれる渚に世を送る」の句があつた。これは行平の詠であるが、歌舞伎者

の作としては、穿鑿當を得たと歌人尾崎雅嘉も賞讃した。淨瑠璃物以外、世話物にも得意であつた。『江戸花陽向會我』『御攝勸進帳』等の作がある。治助また狂言名題及び角外題、小書等に巧みで、世に櫻田風の稱があつた。治助に對抗して勢をさく、劣らなかつたものは、並木五瓶である。

五瓶(二四〇七—二四六八)は通稱吾八、大坂の人、正三の門に出で、筆を揮つたが、寛政六年(二四五四)江戸に來り、一旦大坂に歸り、享和元年再び來るに及んで、上方の複雑なる作風を取つて、單調一律なる江戸脚本界に移した。その功は決して些々たるものでなかつた。『言狂作書』に當時江戸脚本の狀を叙していふ、早春の世界は曾我物語を吉例とす、年々三芝居とも同遍なる故趣向に盡き、江戸古作者堀越榮陽、金井三笑の頃より、油屋お染實は化粧坂の少將、丁兒久松は五郎時宗などと附合して綴り、享和中大坂の作者元祖並木五瓶彼地へ下り、其實情を失はん事を愁ひて、二番目と號け、別に外題をもうけ、世話狂言を作せしが例となり、今に絶えず、京攝に云ふ切狂言なり云々と。一番目を時代物とし、二番目を世話物とする定格は、こゝに開かれた。『傾城黄金』『契情倭莊子』『契情不忍池』『金門五三桐』『春花五大力』『隅田春藝者氣質』等の名作があつた。就中、後の三者を傑出せるものとする。

『五三桐』は明人宗蘇卿の子素友、明智光秀に養育せられたが、光秀の仇を報じようがため、まづ軍資調達の爲に盜賊となつて石川五右衛門と名乗り、密に羽柴久吉を覗ふことを骨子とし、その間に素友の弟瀬川采女妹傾城花橋を出して、一編の脚色を立てた。素友三兄弟の事は謠曲『唐船』に據り、采女及び花橋の本名きくは秀吉の臣采女夫妻をそのまゝに襲用し、五右衛門の大佛前餅屋に入聲したことは、五右衛門が回向の金を托した事實に取つた。

『五大力』は藝者小萬と薩摩源五兵衛との戀を本筋とし、色敵笹野三五兵衛が悪工みで小萬に源五兵衛の許嫁のある由を偽つてより小萬が許嫁への義理立、源五兵衛から三五兵衛が主家より盗んだ龍虎の呼子の笛の穿鑿を託せられて、強ひて三五兵衛に身を許す苦肉の策、而も源五兵衛の爲に變心せる者として殺害せられたが、其の書置きの書面から呼子の笛の三五兵衛の手に存するを知つて奪ひ返すに終はる。これは元文二年大坂北の新地にあつた薩摩の武士早田八右衛門が櫻風呂抱菊野殺害の事實に據れるものである。最初大坂で『島廻戯聞書』として出したが、不評に終り、江戸に於いて其の前半を省略して出し七十餘日の大入をとつたものである。また『五大力戀緘』とは『戯聞書』の改作である。

『藝者氣質』はもと悪漢梅澁吉兵衛が妻小梅と共に兩替屋の小者長吉を殺害して金を奪つた事實に據り、更に義のために長吉を殺す筋に改め、茜染野中隠井の趣向を踏襲し、低鬢の俠客立となし、梅堀小梅源兵衛堀と江戸の地名にあて、好評を博し、大坂にてもまた賞せられた。これ等の脚色は一貫する所があつて、他の作の如き支離滅裂の跡を見なかつた。二番目作者として推されたのも道理であつた。その別著に『戯財録』がある。演劇に關する故實及び作法を説き、作劇者に重んぜられた。

南北(二四一五—二五八九)は本名を勝俵藏といひ、金井三笑の門に出で、はじめは滑稽道化場の筆を以て知られたが、後に舅の役者名鶴屋南北を襲いで立作者となつた。所謂生世話事の作者として、殊に松本幸四郎坂東三津五郎岩井半四郎の特徴を解し、これに適した狂言を多く作つた。その得意の作は怪談物である。また古狂言を補綴して更に新様を出すことも得意であつた。南北常に棺桶を狂言上に用ひた故に、舞臺に棺桶の出づるや、直に目して南北の作といはれた。文政十二年に病歿したがその葬送にはさし擔ひで寺に送つた。これは、おのれ狂言を作つて葬送場を出すこと數次であるが、皆さし擔ひである故に、わが葬送の時もまた斯くせよと遺命したからである。その際には、かねて印刷しておいた辭世の辭、寂光門松後萬歳といふ小杉原五枚の綴物を、來會者に配附したといふ。正本の體裁を取つたもので、人をして呆然たらしめた。その作の多きが中で、殊に稱せられたのは『お染久松色讀販』『東海道四谷怪談』『隅田川花御所染』等である。

『色讀販』は紀海音の『油屋お染袂の白綾』近松半二の『新板歌祭文』の結構によつて作つたもので、半四郎が七役を以て世にもてはやされた。『四谷怪談』は當時もてはやされた四谷お岩稻荷の怪談を、忠臣藏の世界にとつた南北得意の作、鹽谷家の浪士民谷伊右衛門が色と慾との二道に、妻お岩に小者小佛小兵衛と不義をしたといふ悪名をつけて二人を慘殺してより、死靈の崇つねに其の身に付き纏うて、すべての企圖を妨害され、その父母を始め一味の輩までもとり殺さるに至る。小兵衛の靈は舊主小鹽田又之丞に秘薬を捧げて其の病を癒し、その助太刀によつて小兵衛の妻子は敵伊右衛門を殺し、お岩の靈また成佛するに終はる。また其の間にお岩の姉智佐藤與茂七の妻おそで兄妹の悲惨の關係を交へて脚色してゐる。

『花御所染』は鏡山の狂言に怪談物女清玄を綴合はせたもので、南北の長所と短所とを合はせ見るべき作である。

以上の江戸作者に比する時は、大坂の作者は一籌を輸するの觀がある。されど、復

雜の脚色、濃艶の趣味は、かれにまさるものがある。それは作者の手腕といはうよりは、寧ろ土地の氣風の然らしめたものである。その作はまた巧緻細微の點にまで意を用ひた。されば『言狂作書』には、洛は勿論東都にても神社佛閣雪月花に遊ぶ景地數多あるが故見る目に乏しからず、浪華はさせる遊覽の雅境もなき所にや、見聞識者多く作文役者の誤りを見出す人多し、是を俗に穴を探すといふ、格別骨の折るゝ地なれば心を盡して作すべしと云うてゐる。

近松徳史は最初は徳三というた。五瓶と合作したものも多くあつたが、後に立作者となつた。『伊勢音頭戀寐及』は辰岡萬作の『川崎踊拍子』と同一の題材で、伊勢古市の御師齋宮が油屋抱へ茶汲女お紺の事から九人の者を切害して自殺した事實に、近松門左衛門の『長町女腹切』の刀の祟の趣向を取り加へたもの。『文月恨切子』は淨瑠璃『櫻恨鮫鞘』と同一材料にして、『色競かしく紅翅』は淨瑠璃『八重霞浪花濱萩』に作られた事實を取つた。また當時の小説を翻案したるものも多くあつた。『自來也物語』の『柵自來也語』、『三七全傳南柯夢』の『舞扇南柯話』等が之れである。

徳史の作は御家狂言に得意であつたが、之に對して王代物時代物即ち所謂金襖物に長じたものに辰岡萬作があつた。その徳史との合作に係る『姉妹達大礎』は二者おのゝ得意の局面を分つて力を盡したから、時代世話と氣のかはり目あらはに、古今の當り狂言となつた。なほ『契情楊柳櫻』、『東海道戀關札』等も名作であつた。

奈河晴助の脚色は、統一はあるけれど、單純で複雑の趣を缺くといはれた。尾張傳内を小割傳内とし、明石を網干とし、説教で語る女盜賊と巡禮殺とを寄せて脚色した『敵討浦朝霧』はその傑作である。

こゝに忘るべからざるは五瓶、徳史、萬作等と交際のおつた西澤一鳳のことである。一鳳は大坂の書肆であつたが、多く歌舞伎書類を藏し、斯道に通じ、その發達に貢献するところが少くなかつた。新作狂言の内讀、本讀には、座頭と同席して、その取捨に與つたといはれてゐる。從來狂言の筋書即ち臺帳は、作者俳優の間に限られたのを、一鳳は世人の讀み易いやうにして、閱讀に供した所から、漸くもてはやされ、つひに刊行せらるゝやうになつた。根本と稱して、曉鐘成等の編せるものがそれである。されど、大方は大坂の狂言であつて、江戸のものは南北の作二三に過ぎなかつた。『言狂作書』、『皇都午睡』、『脚色餘録』、『鑽佛乘』等、皆斯道に關して精細を極めたものである。

かく當代の脚本界に五瓶、治助、南北等の立つたのは、實に歌舞伎の圓熟期を劃するものであつた。しかれども、これ等もなほ以前の作者の如く、その筆を執るに當つて

は、顧慮する所は俳優の特性特徴であり、憑む所は俳優の容貌態度であつた。また諸般の設備機關の發達して、早替り引ぬき等の工夫の成つたのを憑んで、目先の變化を主とした。要は如何にして人氣を博すべきかを講ずるのであつた。かの此處を無學の早學所視する民衆の喝采は如何にして期待すべきか、これがその當面の問題であつた。かくて、人氣を得るためにはあらゆる手段を吝まなかつた。文政七年の暮には、商人の引札の如く、日本橋淺草の雜沓の場所に、建久中双子の兄弟養父敵討の次第といふ一つの書付を諸人に與へた。これは新春の狂言の趣向で、南北の新工夫に出でたのである。或は顔見せの趣向を九月舞納に富に突いて見物に見せ、春狂言の主旨を披露する事もあつた。作者の名を賣るためにも種々の苦心をした。櫻田治助の晩年、吉原の丁子屋に思をよせた遊女があつたが、治助がふと思ひついた淨瑠璃の心を用ひ、梅の造り花の枝に文を結び、自ら懸想文賣の装をして之を擔げ行き、その格子へ投込んだ。文には、誰の君様へ、櫻田と書いてあつたから、流石全盛丁字屋の名譽と、その遊女から治助に返事をしたといふ。何ぞ圖らん、これも眞の戀にはあらで、名弘の一策であつた。

流行の小説が狂言に脚色せられるのも、また時好に投せんが爲であつた。かの徳

典の作は今いはず、その他京傳の『善知鳥安方忠義傳』が世に行はれると世に『善知鳥相馬舊殿』となり、『馬琴の八犬傳』が好評を博すると京に『花魁茗八總』出で、江戸に『八犬傳評判樓閣』出で、種彦の『修紫田舎源氏』が洛陽の紙價を高くすると八代目團十郎によつて演せられた『田舎源氏』となつた。鬼卵の『更科物語』は京坂にも屢興行せられ、江戸には『繪本更科譚』として舞臺に上つた。中にも、天保九年市村座で興行せる所作事『内裡模様源氏紫』は大仕掛古今大當りと稱せられたが、すべて『田舎源氏』の役割で仕組をした始である。その大當りも全く柳亭先生の功なるべしといはれた。

かゝる事情の下にある故に、時代物の作は局面の變化を尙ぶの餘りに荒唐無稽となり、世話物の作は五瓶が二番目物として時代物に對せしめて以來、大に寫實眞に迫らんとし、淫靡輕佻に陥つた。この二つに亘つて民衆の耳目を傾注せしめるには、詩趣の範圍を逸して實感を惹き起すのが最も容易な業である。故に、殺害のむごさ、濡れの猥がましさ、道化の嗚呼がましさは、作者がいつも筆にする所であつた。中にも幽靈怪談によつて悽愴と恐怖とを得、人をして悚然たらしむれば、或は自負して神秘崇高の致をも捉へたとも思ひなす程であつた。殊に道具の工夫を凝らすのは怪談物であつた。小さい中から如何して出られるかと思はれねば面白くないとて、お岩

の幽霊を盆提灯の二番ものから出すことさへ始めたのである。

されば治助が門弟を戒むるに山本北山の言を以てし、まづ近松竹田の戯曲を咀嚼し、漢文は譯書により、歌書は注釋によつて讀むべく、また兵書は心を和げて修め、俳書は風流の菜となし、歌書は心に固く貯へ、すべて自家藥籠のものとなせよといふたことは、或は用ひられるとしても、遂にもとより皮相の知識を以て満足したのであつた。五瓶は『戲財録』に於いていふやうに「狂言は何を目的に作るぞと尋ねし者あり。答云、狂言は徒然の文にある、白うるりを目當にするといひ終て歸る。白うるりといふものはあつたらこんな物であらうと推量して居る所が作者也、天子將軍の行跡見た事もなし、乞食盜賊に付合たる事はなければ、こんなものであらうと人情を推量して作るが白うるり也。今世に云ひ傳へ聞傳へする事、戲場より出たる事多し。是作者の大丈夫白うるりより定め出せしものなり。此心持にて萬事仕組む時は、趣向古くても見ざめのせぬ様に鎌を入れ、衣をかけて新狂言にする事也云云」と。

一鳳は小説を眞とし、淨瑠璃を行とし、歌舞伎を草とした。さていふやうに「上は公卿大夫より下は乞食非人に至るまで、常に其の通語を記憶して用ゆる事勿論なり。一體の性情にわたり、遊里洞房の痴情は親しく交らすとも、其の佳境は知り易し。富貴

のいみじき人々に交はらざれば、高情の場は知り難し。作者さへ知らざれば、來看も又知る人稀なり。是狂言綺語の場にて、公家は公家らしく、女臈は如何にも女臈らしくし、源氏物語・伊勢物語・あるは春曙抄をはじめ古代の物語の詞を交へ、俗に通じ易き様に用ひ、武士は武士らしく、源平時代ならば盛衰記の詞を用ひ、北條足利の世界ならば太平記の詞をかるべし。ましてや世話時代交へし狂言の武士には東都の方言をまじへて云はせ、傾城は里訛として新町のなます吉原のざんすなどそれらの方言を用ひ、一日の世界を定め、小説にもある如く法則を極め、切磋琢磨の功成て、一部の大筋をかく事なり。此階級を歴ざれば、眞の歌舞伎作者とは唱へ難し」と。

かゝる意見の上に立ち、かゝる修養を以て、人氣と俳優とに掣肘せられる狂言作者は、おのづから翻案と補綴に甘んぜねばならなかつた。しかも、その間に優秀の作者は、今更に其の才筆に服さざるを得ない。文政十年江戸河原崎座に於いて興行せる『獨道五十三驛』の如きは、最もよく其の作風を偲ばせるものである。五十三段がへしの大道具すでに人を驚かすを、まして敵討の趣向を以て一貫する外、すべて各驛にあつた劇に關する事實を之に配し、時代世話御家狂言取り雜へて、實に紛然たるものであつた。よれ亦南北の作である。

南北の門弟に河竹新七後に古河黙阿彌(二四七六一二五五三)と呼ぶものがあつた。江戸日本橋通二丁目式部小路の質屋の子息で、本名は吉村芳三郎といひ、天保六年三月始めて梨園に籍を掲げて狂言作者見習となり、勝彦藏と名乗つてから五十八年の間、思想の穩健なると結構布置の才の富饒なると人情描寫の老鍊なるとで、近世梨園の詞傑と稱せられた。その間作るところの脚本及び淨瑠璃三百四十六種。されど、その中の見習期間はいふまでもなく、立作者となつてからも數年間は、なほ五瓶・南北・左交等から筋を貰つて、一部分だけ筆を執るに過ぎなかつた。自ら一部の狂言を仕組んだのは、嘉永四年作の『升鯉瀧白旗』が始である。かくて、新七が作者生涯の大部分は、明治時代に屬する。その時機に及んで、更に細説するであらう。

第九章 讀本と馬琴

寛政三年の處刑以來深く謹直森嚴の人となつた京傳は、しばらく筆を絶つて僅に教訓を主とした數部の草雙紙を出すに過ぎなかつたが、その十年(二四五八)に至つて『忠臣水滸傳』を著はした。これが京傳の讀本を述作する手始であつた。讀本は前時代に於いてその途を開いたものであつたが、時運は之を驅つて、結構の雄大、脚色の複

雜、脚本の右に出で、また支那の稗史小説と駢馳するに足るものを出すに至つた。もとより『忠臣水滸傳』は決して卓出せる作ではない、たゞ四十七士を百八星に擬し、『水滸傳』の旨趣を『假名手本忠臣藏』の世界に撮合したに過ぎないが、なほ綾足の『本朝水滸傳』の未完を以て終り、また振鷺亭の『いろは醉故傳』の一小話たるのとは異つて、大にもてはやされた。こゝに於いて、書賈の囑に應じて俳優小幡小平治の冤鬼怪談を題材とせる『復讎奇談安積沼』を出し、爾來相ついで『優曇華物語』『櫻姫全傳曙草紙』『昔話稻妻表紙』『善知鳥安方忠義傳』『本朝醉菩提』『浮世牡丹全傳』『雙蝶記』等を出した。皆とりにくく好評を博した中にも『稻妻表紙』は出版の翌々年大阪の兩劇場に於いて興行され、またぬれ燕の小唄世に行はれた。京傳の得意おもふべく、千里柳塘偃月刀に於ける『演義三國志』千字文西湖柳に於ける『水滸傳』に比して、和漢同日の談と自負した。『安方忠義傳』もまた江戸の劇場に於いて興行され、『曙草紙』は歌川豊國の繪と相俟つていたく時好に稱ひ、雅俗共に妙といはれた。實にこの三著は京傳讀本中の傑作である。

『曙草紙』は演劇に於いて世の熟知せる如く、僧清玄が櫻姫とあひ見て破戒墮落に陥つた傳説を骨子とし、假名草紙『二人比丘尼』の趣意、また支那小説に屢見える離魂病等

の材料を取り來つて之に配した。その主とする所は因果應報の理の纏綿せるを示すにあつた。丹波桑田郡の土豪鷲尾義治の妻野分の嫉妬のために慘殺された妾玉琴の怨念が野分の出なる櫻姫に執着して之を苦め、更に自分の生んだ清立に憑つて櫻姫に懸想せしめ、屢、死地に陥らしめた。されど、つひに法力によつて得脱成佛するに終はつてゐる。

『稻妻表紙』も亦數、劇に上れる名古屋山三郎、不破伴左衛門の古戯曲院本を基とし、また近松の『傾城返魂香』を補綴したもので、期するところは勸善懲惡の意を寓するにあつた。

『安方忠義傳』は平將門の遺孤良門及び瀧夜叉姫が父の志をうけついで兵を擧げたが、大宅光國の智謀に乗せられて、その巢窟たる相馬の舊御所の陥るに至る顛末。その間には、將門の舊臣で陸奥外濱の漁夫たる善知鳥安方が、良門の暴擧を諫めて自刃するに至つたが、靈魂化して鳥となり、その妻もまた横死して鳥となるといふ事がある。善知鳥、安方鳥はこれである。即ち謡曲『善知鳥』の題材をば取り來つたのである。これ等の作によつても知らるゝ如く、京傳の作は多く撮合補綴を以て成つたもので、しかも脚色の複雑を欲すれば欲する程、その間に統一なく、照應なく時に支離の狀

に陥るものも少くなかつた。その讀本に於ける名聲は、所詮洒落本、黄表紙に於ける情力に過ぎなかつた。遂に新進の馬琴の敵では無かつた。實に京傳の學識は該博なる馬琴には遠く及ばないけれども、なほおぼつかなくも支那小説を翻譯し、或は古脚本、古淨瑠璃或は古歌謠の類までも、苟くも取つて以て其の作を賑はすに足るものをば、すべて囊中の物とした。『近世奇跡考』『骨董集』の著があつたのも、げにと首肯せざるを得ない。されど、それを整然たる結構のもとにおくことは、京傳の才力もまた根氣も許さざる所であつた。馬琴の如き巨編大作が京傳に存せざる理由は、一にこれが爲であつたらう。しかし、京傳の作は通俗を以てまさつて居る、よし勸善懲惡の義はあれど、徒に道學的口吻を以てすることなく、その言辭も耳遠いものを避けて平易を主とした。その讀本の最後の作『雙蝶記』を出すや、その意を人に告げていふ、近頃馬琴の讀本は雅俗を混淆して體裁をなして居らぬ、この作は『双蝶々曲輪日記』の世界にて、所謂世話狂言に似たれば、劇の趣に倣うて、詞も今の俚語を以てし、婦女の俗耳に入り易き事を主とした、讀本の面目はこれより一新するであらうと。その序をも殊更に漢文を以て記さなかつた。

また京傳は書籍の體裁にも意匠を凝した。『忠義水滸傳』には、かの國の水滸傳繡像

に模して、はじめて口繪を附けた。『浮世牡丹全傳』は半紙本ながら唐本めかして横幅を狭くし、表紙も帙の如くし、繡像も細密にした。『本朝醉菩提』の挿繪は豊國の作、懇望に至らざる所なく、はては署名を作者の上に置くことをも許して描かした。それも讀本といへど、畫工の筆が精巧でなければ賣れにくいとの考からであつた。

弟の京山も著作に富み、讀本にも『風月奇談小櫻姫』『驚の談傳記』があつた。その頃また高井蘭山といふがあつて、『三國妖婦傳』『星月夜顯晦録』『孝子嫩物語』を著はし、『水滸傳』の翻譯に筆をそめ、感和亭鬼武といふがあつて、『自來也說話』『勿來關』『在原草紙』を作つた。後に狂歌師に轉じた芍藥亭長根には、『濡衣草紙』『國字鶴物語』があり、四方歌垣には、『月宵鄙物語』があり、宿屋飯盛にも前述した如き諸作があつた。その他、合卷物滑稽本人情本に長じてゐるものには、皆二三の讀本を著はさないものはなかつた。されど、これらの作家は曲亭馬琴に比べると、さながら朝陽の前の曉星に過ぎなかつた。

馬琴(二四二七—二五〇八)は本名を瀧澤解と云ひ、著作堂簑笠翁玄洞陳人魁菴子傀備師等の別號が頗る多くあつた。父は松平家の浪士、幼くして貧窮の苦を嘗め、やゝ長じて武家奉公に轉々流浪した。されど、七歳にして俳句を吟じ、十五歳にして『弔鶯辭』を作つた天稟の文才は、その間に絶えず鍊磨せられ、一度は俳人として世に立たうといふ企望を抱いたが、たま／＼黄表紙洒落本の流行に際し、つひに意を決して、當時の泰斗として擬せられるた京傳を訪れて、その門下生とならうと請うた。これは寛政二年で、馬琴二十四歳の時である。京傳はその不心得を説き諭した。友人として交はる事とした。爾後その門に出入して指導を受けたが、その年の冬から壬生狂言の行はるゝにあひ、三年の春^{二十日餘}兩盡用而二分狂言』をば京傳の序を附し、京傳門人大榮山人と署名して出した。これが處女作であつた。されど、拙劣の作として時評もおもはしからぬので、神奈川驛に行きて卜筮を業とし、再び江戸に歸り來れば、深川の寓居は水害にあつて住居もかなはず、京傳のいふまゝに内弟子同様に其の家に移つた。やがて書肆薦屋に奉公し、その暇に數部の草雙紙を著はした。三年の後、飯田町の下駄屋で家主なる寡婦のもとに入習し、やがて千蔭様の書を能くする所から手習師匠となり、傍ら賣藥屋を營んだ。寛政七年(二四五五)『高尾千字文』とて中本形の讀本を出したが、文化元年(二四六四)に讀本『月氷奇縁』を出すや、千五百部を賣り盡して、その名漸く弘まりはじめた。これについて、『復讎稚枝鳩』『四天王剽盜異録』『隅田川梅柳新書』を出した。京傳が『稻妻表紙』を出した文化三年に、『椿説弓張月』初輯を出して

七年に完成し、四年に『頼豪阿闍梨怪鼠傳』、松浦佐用媛石魂錄』を出し、五年に『俊寛僧都島物語』、六年に『夢想兵衛胡蝶物語』、昔語質屋庫』、十一年に『南總里見八犬傳』初輯と『朝夷巡島記』初輯とを出した。これ京傳が讀本最後の作『雙蝶記』出版の年である。

文政に入つて筆はますます進み、かの二書の續篇相ついで出で、十一年に『近世美少年録』初輯、天保元年に『開卷奇俠客傳』初輯を出した。この二書は『巡島記』と共に完成するに至らなかつた。しかもその述作の間に、隨筆『燕石襟誌』、『烹雜記』、『玄同放言』を出し、合卷物には『金毘羅船利生纜』、『傾城水滸傳』、『新編金瓶梅』、『風俗金魚傳』或は翻譯に『漢楚軍談』、『水滸傳』或は戯曲に『化鏡丑滿鐘』等を出した。著述すべて四百部千四百冊を數ふるに至つた。當時馬琴と稱する同名異人があつて、かやうに多數の著述があるのであらうと思つた者のあつたのも無理ならぬことである。天保五年に長子宗伯を失うて以來、幾多の不幸はその家を襲ひ、加ふるに年來の眼病が十一年には全く失明を來したなど、積る困厄の間に亡兒の遺妻に口授して筆記せしめ、ひたすら『八犬傳』完成の功を急ぎ、十二年に至つて脱稿した。後また合卷物の續篇について口授する所もあつたが、嘉永元年つひに病歿した。

實に『八犬傳』は馬琴畢世の大著述で、文化十一年四十八歳の正月に起筆し、天保十二

年七十五歳の八月に終はる。年を閲すること二十八。中間に書肆の破産、一家の困厄があり、まして失明後の苦心慘憺は言語に絶する程で、かの著者の負けじ魂によらないでは到底不可能の事業であつた。百六冊の長篇は我國空前の大作で、且つ其の蘊蓄を傾け、懷抱する所を盡し、本領とする所を發揮したるものである。その上に、時代の趨向の上に起ち、時代の精神を體現した點は、殊に心に留めねばならぬ。犬戎國の祖盤瓠といふ犬が敵將を得て侯に封せられ、美姬を娶つて家門の繁榮したといふ『搜神記』の記事によつて起筆し、『水滸傳』の旨趣によつて脚色を構へ、事を南總里見家の興復に取つた。南總里見義實の息女伏姫が、父の一時の約を重んじて敵將を殲した犬八房と共に富山に籠つたが、姫の臨終の際、體中から出でた珠數の八玉飛んで四方に散亂した。玉には各仁義禮智忠信孝悌の一字宛が現はれて居たが、そを持ちて生れたものは、皆その一徳を保持する勇士であつた。八勇士互に宿世の兄弟たるを知り、義實のもとに會して、その興復を助けようとする。されど、八士の離合集散常ならず、幾度か危険に瀕し、奇禍にあひ、而も奇遇の之を救助するあり、又伏姫の冥護あり、もと伏姫の夫となるべき、大和尙の出沒あり、人をして應接に暇なからしめる。その安房に來會した後にも波瀾があつたが、遂に家門隆盛となり、はては登仙するに至る。

されど『八犬傳』は未だ無縫の天衣を以て許すべきものではなかつた。その作としては『弓張月』の渾然たるに一籌を輸せざるを得ない。實に『弓張月』には四十歳から四十七歳までその最も圓熟した時期に於いて完成せることとて、筆力の遒勁、結構の精彩、他に求め難きものがある。源爲朝雄圖本土に成らずして、女護島、鬼ヶ島に押渡り、更に進んで琉球に入る。國王尙寧王の遺子寧王女のために幻術の妖賊と戦ひ、勝敗一ならず、ゆくりなくも子の舜天丸に邂逅するに及んで、その智略によつて朦雲を誅した。これ虬龍であつた。琉球の祖天孫氏が、民の害を除かうが爲に虬龍を殺して其の骨を埋めた虬塚を、尙寧王の發いたが爲にかゝる禍亂をひき起したのであつた。また爲朝が妖賊を滅ぼすのは、東方に日輪があり朝に出て我國の爲に照らすであらうといへる天孫氏の遺訓に基いたものであつた。爲朝は仙となつて昇天し、舜天丸は國人の勸によつて王位に即く。これよりさき、爲朝の配に白縫といふ勇婦が夫の難に代つて死んだが、その魂魄は寧王女の身に宿つて未遂ぐるに至つた。かくなつたのは崇徳院の神靈が忠義の善報にとて冥護せられた故で、白縫との契情の全からぬのは忠義の爲とはいへ、數多の敵を射殺した惡報故であつた。その他の作は一々その梗概をいふことは出来ないが、すべて複雑錯綜せる脚色の

中に、整然たる條理の一貫するものがある。それは馬琴が常に外には結構に刻苦し、内には勸善懲惡を以て終始したからである。支那の稗史にいふ所の七法則、主客、伏線、襯染、照應、反對、省筆、隱微は、常にその遵守する所であつた。照應、反對について其の言を借れば、『八犬傳』に於いて船蟲媼内が牛の角で戮せらるゝは、北越二十箇村なる闘牛の照應、犬飼現八が千住河にて繫舟の組討は、信乃が芳流閣上の組討の反對である。反對は人は同じくして事は同じからぬもの、信乃の組討は閣上、閣下に繫舟あり、千住河のは船中にて樓閣なく、前には現八、信乃を搦めようとし、後のは信乃、道節が現八を捉へようとする情態の異なるものがそれである。

かくも七法則を取れる馬琴は、もとより支那の小説に題材を漁つた。『八犬傳』の『水滸傳』、『弓張月』後半の『水滸後傳』は勿論、『俠客傳』は『好逑傳』をさながらにうつし、その姑麻姫の女仙外史の唐賽兒に模したる如き、或は『松染情史』の『今古奇觀』から『美少年録』に於ける鍊金術の騙盜のまた同書より出でたる如きは、その一例である。その他、隨筆『五雜俎』、『三國志』また笠翁の諸作の至る所に、その粉本を見ることが出来る。しかも、漫然補綴して足れりとするのではなくて、咀嚼し、消化して、然る後に筆に載せ、直にその肺腑より出づるが如くならしめた。こゝに於いて、その脚色は整然として一

絲紊れざる如きものがあつた。馬琴はその小説を以て小宇宙とし、自己を以て小造化翁とした。馬琴の別號に傀儡師といふがあるが、小説中の人物を操る絲は實にその手にあり、而も其の操縦の法は善惡の應報と宿世の因果とに依ることが少なくなかつた。伏姫が富山に隠れざるを得なかつたのも宿命の然らしめる所。松浦佐用姫の生を秋布にかりたのも前世の業果を滅さうがためであつた。この應報と因果との間に介在して、その時をばやめまた遅くするのは、佛神の威力であつた。馬琴の作中に神佛を説き、また變化妖怪を説くの煩はしいのは、實にこれが爲である。かういふ結果は、結構のための結構、脚色のための脚色に陥らざるを得なかつた。傳ふる所によると、『八犬傳』を草するや、八犬士に擬へた小人形を地圖の上に動かすつゝ、離合集散の趣向を凝したといふことである。實に馬琴の小説に於ける世界は小さくあつた。それは大なる世界の一部を描いたものではなくて、馬琴の胸裡から産み出した天地に過ぎなかつたからである。また馬琴が本領とする勸善懲惡主義を寓するに便宜よき爲であつた。

馬琴は文藝を以て卑俗なものと思はし、その價值は勸善懲惡と教訓とを寓するによつて始めて生ずるのであると揚言した。されば、その卑しき文藝に携はる自己を辯護していふことは無用の書を著して有用の書を購はんが爲なり、大聲は俚耳に入らず、稗史は事に益なしといへど、勸善懲惡の意を寓すれば、婦幼に害なきもの、且つ之を鬻ぐ者、書畫印刷製本の諸工、皆これに衣食するも、亦泰平の餘澤にあらずや」と。これ洒落本、賣表紙の放縱猥雜の反動として、作者が理智の性格の發現として、また定信の改革以後、表面に止るとはいへ、社會に横溢せる儒教思想及び武士道精神の發揮として見るべきである。その勸善懲惡主義は細微の極にまで達し、小善小惡も必ずやその應報があつた。故に、その描く所の人物は皆絶対の人である、善人は善の極悪人は惡の極、一は美德の權化にして、一は惡徳の權化であつた。一は崇ぶべく、一は避くべく、二者の間の相距ること天壤の差である。『美少年録』にあつては、はじめに美貌にして惡性なる惡少年の傳を作り、後に性と貌との美少年傳を作らうとした。かくて、典型的人物は描かれ、普遍的人的は描かるゝことが出來た。されど、血のあり肉のあつる活ける眞人物は、遂に求め得なかつた。所詮、傀儡師の操るまゝに行動すべき人形に過ぎなかつた。故に、性格發展の興などは、その作に於いて認めることは出來ない。かれが脚色に心を盡すのは、其の缺を補はんがためであつた。

この結構と勸善懲惡とを容るゝに都合のよいのは歴史小説である。加之、武士道

の精神を體し、感情を制して、一向理智に活きる古武士を主人公とすることは、また時代精神表現の一手段として馬琴の欲する所であつた。随つて、平俗を避けて、作物を高遠視することも出來た。かのお夏清十郎や、お染久松や、三勝半七を寫せど、皆痴情纏綿たる原作には似もつかぬものとし、忠義孝貞のために身を苦める士女となした。『南柯夢』『松染情史』『美少年録』中の人物はすべてさうであつた。

その歴史小説に於ける題材は、大方正史に不備なる點、または跡を暗まし影を埋めた英傑の上を取つた。流竄のはかない身となつた爲朝をして、琉球に渡つて開國の基を開かした如きは、よしや雜著の上にも或は暗示するものがあるにせよ、大方はそのを利用した作者の想像から生れ出たものである。俊寛も鬼界島に死なないで、鬼一法眼と名を變じて、都に於いて義經に兵法を授けて源氏興復に資したといふ『俊寛僧都鳥物語』の如き、劍術を仙人から授けられた一女傑を出して楠氏の遺孤父祖の志を嗣ぐものありてよく將軍義滿を射殺せしめるに至つた『俠客傳』の如き、姦惡無二の陶晴賢の生立を叙して精細を極めた『美少年録』の如き、皆それである。『巡島記』に於いて作者はいふやう、平維盛・源義經・朝夷・義秀・藤原・藤房・篠原・伊賀は愈々忠愈々勇にして、しかも跡なく後なきは千載の遺憾である。義秀・伊賀に就いては小説の稿を起さ

うとして果さるること多年、まづ義秀よりはじめた。その事虚中に實を包みて唐山演義の書に擬した。引用書は一卷も求めず、すべてわが意匠もて作爲したれば、皆臆度もて綴るに過ぎぬ。道理もて推せば隠れたるを顯はし、釋氏をもて定規とすればなき事までもあり、顔に勸懲の善巧方便とすると。かういふことは、その諸作に亘つて見るべき用意であつた。この用意は馬琴にしてはじめて存する所、まして『八犬傳』に於いて尊王の意を寄寓するが如きは、決して他に見ること出來ない所であつた。

馬琴は道德を教へる以外、また智識をも授けようとした。故に、事により、物によつて、和漢の典故を擧げて諄々として説いた。作意に於いて何の益もない龍の説明も、民衆教育の一端としては缺くべからざるものであつた。随つて、その用ひるところの比喻も形容も皆出典あるもの、時にそを利用しようとする輩に注意を促すこともあつた。馬琴の文は實に戰記物の文脈をうけて更に戯曲七五の調を加へ、また進んで四六駢驪の體をも取り入れた。故に、朗々として誦すべく、しかも委曲周到意を盡さるる所はない。されど、其の長所はやがて短所となり、或は華麗に過ぎ、巧緻に過ぎ、氣魄なく變化なきものとなり果てた。殊に、其の弊は晩年に至つてますます加はり、讀者をして頗る嫌厭せしめるものがある。

要するに、馬琴の小説は、文藝としての價値は疑はるべきものである。勸善懲惡は決して文藝の目的ではない、しかし馬琴は馬琴の懷抱するすべてを成し遂げた。儒教と武士道と相俟つて煥乎たる時代精神をも發揮し得た。世の小説家が戯作者氣質を以て甘んじてゐる時、超然標榜する所のあつたのは、兎にも角にも推稱すべきであらう。

讀本は馬琴に於いて其の隆盛の極に達した。馬琴歿して斯界は頓に寂寥の觀がある。國學者萩原廣道が蒜園主人として『俠客傳』の稿をつぎ、松亭金水が『巡島記』の後を續け、京傳の『善知鳥安方忠義傳』の後をつぎたる、また馬琴唯一の門弟櫛亭琴魚が師の作『青砥藤綱摸綾案』の三輯を作れる如き、深く注意すべきものでもなかつた。

第十章 中本の二様式

黄表紙・洒落本の末は分れて二となつた、一は讀本と其の趨向を同じくしてゐる合巻物で、一は中本である。二者ともに體裁上からの名目である。中本とは、その大き、糊入のみよし紙二つ切に厚表紙をかけたもの、かの洒落本類の小冊と讀本の半紙本と間にある故に、この稱があつた。

中本は内容から見ればまた分れて二となる、一は滑稽諸譚を弄する作、一九の『藤栗毛』にはじまり三馬の諸作これを承けついで滑稽本である。されど體裁を外にすれば、寶曆の頃の靜觀坊好阿の『當世下手談義』また風來山人の諸作が、其の端を發したものであつた。一は人情本にして、洒落本の趣向に還つて姪蕩なる社會の描寫をも敢てした作である。しかも讀本合巻物の流行の世の事として、單なる通言の叙述に甘んせず、一篇の結構脚色に心を凝した。寛政十年の三馬の洒落本『辰巳婦言』には已に其の傾向が見られたが、鼻山人に至つて始めて人情本の實を成すに近く、春水に及んで其の極に達した。まづ滑稽本の作者中最も傑出した者を擧ぐれば、十返舎一九と式亭三馬とである。

一九(二四二四—二四九一)は本名を重田貞一といひ、駿府町奉行勘定役の家に生れたが放逸不羈はやく大坂に出で、流浪し、材木屋の女婿ともなり、また淨瑠璃作者ともなつた。『木下蔭狹間合戦』は並木千柳等と合作したものである。後、江戸に來り、寛政五年に『倡賣往來』の作のあつたのを縁として書肆鳶屋に寄寓し、七年に『心學時計草』を出版した。これには自畫を挿入し、その作意は飯盛の『吉原十二時』に擬したものであつた。爾後年々十部前後の草雙紙の著があつたが、文名は未だ高くなかつた。

然るに、その筆鋒を一轉して滑稽本に力を致し、『東海道中膝栗毛』初篇を出すに及び
 頓に名聲藉甚し、大家として遇せられた。これ享和二年(二四六二)一九が三十一歳の
 時である。かくて、年々一篇づつを出し、文化六年第八篇を出して一まづ擱筆した。
 蓋し趣向が盡きたのであつたらう。自らもいふ、智恵袋拂底なればはたき仕舞し、栗
 毛の趣向據なくおつもりの大坂着と。されど、書肆の囑、讀者の喝采に、なほ續膝栗毛
 の稿を起さざるを得ず、『金比羅道中』『宮島參詣』『木曾街道』『善光寺詣』『草津温泉』等
 出し、文政五年に至つて完結した。その他、一九には中本に『江島土産』『六阿彌陀詣』ま
 た草雙紙に『方言行脚金の草鞋』、また禁に觸れて手鎖の刑にあうた『化物太閤記』等
 の作があつたが、その才筆は『東海道中膝栗毛』に盡きて居る。

兎に角に『膝栗毛』が時好に投合する事の甚しいことは、板元は勿論、貸本屋からもこ
 れ以上に利あるものはないといはれた。はじめは村田屋の板で、後に其の板株は二
 三度も轉傳したが、作の評判はなほ衰へず、作者は篇毎に潤筆料十餘金を得、且つ趣向
 のために折々遊歴する時には、板元から路費をも出させた。當時評する者は、『たゞ村
 農野嬢の解し易くて笑を催すを欣ぶのみならず、大人君子も『膝栗毛』の如きは看者に
 害なしというて賞美せり、げに二十餘年相似たる趣向の冊子のかくまで流行せし

は、前代未聞一奇といふべきなり」といふてゐる。看者に害なしとはいへ、その題材に
 は猥雑のものも少くなかつた。吉原深川に於いてする通をば野暮な驛路の世界、飯
 盛・宿場女郎の上に轉じたるに過ぎないからである。さはれ、その猥雑をも笑のうち
 に過さする程の滑稽諧謔は、その中に充實してゐる。

街道の並松枝を鳴さず、往來の旅人互に道を讓合ひ、泰平を謠ふつゝ、馬の小室節
 ゆたかに、盲人の獨りあるき、女同士の道づれ、ぬけ參りの童まで盜賊にもあはぬ世の、
 雲水の樂みえもいはれずと作中にいへる一九は、『東海道中膝栗毛』の序に於いてい
 ふやう、東海道を遊歴し、その行路中山川の佳境勝景なるを假書して旅袖に藏めおけ
 るあり、それが中に風土の異なる遺風を録し、亦土人の言語都會に替れるくさくさの
 多かる中に、往來旅客の光景、或は貴遊、或は卑賤の患苦、雲駕馬士の木訥なる、出女の姿
 けはひ、なべて鄙情はおかしげなる有増を、白地にかいつけたる道中の滑稽を、膝栗毛
 と題し云々と。實に泰平の餘澤、浮世を外の吞氣旅、おもしろ可笑さの如何ばかり
 ぞ。しかも一九は單一なる叙述とはなさで、かの了意が『東海道名所記』等の作意によ
 つてか、飄逸なる江戸兒彌次郎兵衛喜多八の二人を拉し來り、あらゆる失策破綻を盡
 さしめた。一は虚榮から一は皮肉から出づるもの、即ち江戸兒の野暮な性質をば道

中至る所に放たしめて、作者は讀者と共に之を指笑した。更にまたこの二人は、相合すれば一九の全人格となる。その死後火葬の際にも、棺桶の中に數個の花火を入れおいて會葬者を呆然たらしめた洒落器具はいふまでもなく、鏡餅も、盃蘭盆の供物も、皆描いて壁に貼りたるまゝに年中行事を濟すといふ飄輕、他人を驚殺せしめる幾多の逸話、この人にして此の作のあるは如何にもと思はれる。ましてや、駿府の田舎に生れ、大坂に長じ、中年に江戸に入つては、天稟江戸兒と軌を同じうしながら、またその短所弱點を洞察する觀察の自由がある。古き草雙紙、戯曲、狂言また落語までも翻案して、新意を出す脚色があつた。これ等を打つて一九とした『膝栗毛』が、世の喝采を博し得たのも理である。

一九はまた狂歌にも長じてゐた。されば、『膝栗毛』は一面から見ると、狂歌物語ともいふことが出来る。その滑稽の筆を結ぶ、多くは狂歌を以てしたからである。

三馬(二四三五—二四八二)は本名を菊地泰助といひ、本町庵、四季山人等の別號がある。三馬とは先輩唐來三和と友鳥亭馬馬との名から取つたのである。江戸の淺草に生れ、幼い時から書肆に奉公し、餘暇を以て殆どすべての稗史小説を讀破した。かくて戯作の志を立て、十八歳に至つて、黄表紙『天道浮世出屋操』、人間一心『視替操』を出

した。されど未だ世に認められず、苦心の餘りに、芝全交の名跡を嗣がうとしたこともあつたが、寛政十一年(二四五九)『俠太平記向鉢卷』を出すや、文名が俄に高くなつた。その書は火消人足の争鬪を記したものであつたが、はしなくもよ組の人足の怒に觸れ、その家と板元とは襲撃せられ、はては公事沙汰に及び、相互處刑の身となつたのが、却て幸運を開く基となつた。享和に入つて、その作いよく、多きを加へ、文化三年には『雷太郎強惡物語』を出して合巻物をはじめ、四年には『譚話浮世風呂』、初篇八年には『柳髮新話浮世床』初篇を出した。後者は完成せずして終はり、瀧亭鯉丈がその後をついけた。その他、『四十八癖』、『酩酊氣質』、『百馬鹿』等の傑作がある。

これ等の作は結構また脚色を以て腐心するものではなかつた。文章とても刻苦推敲するものではなかつた。三馬は速筆を以て知られ、三日三夜にして八九卷の稿を脱し得たことは、その書中に明記する所である。三馬は無學を以て嘲罵を受け、またみづからそを標榜した。戯作者の腹は屋臺店の賣物にひとしく、唐茄子も蒟蒻の田樂も皆とりませて置くべきもの、『源氏』も『水滸傳』もその一端を知らば知つたかぶりを書くべきであるというた。また相善からざりし馬琴はいふ、學問はなければ才子なれば自序なども故事を補綴して、漢學者の如く思はせたと。またいふ、眞顔の

弟子なれど其の才狂歌に足らざるか聞えたる秀逸なく、まして狂詩は作り得ず、俳句も能くせず、純粹の戯作者である、なほ明の謝肇淪が所謂才子書を讀まざる類であらうと。

無學な三馬は、つひに馬琴の如く堂々の筆陣を張ることはなかつたが、鋭利な觀察眼と巧緻な寫實の筆とは、他に比類なき武器であつた。『浮世風呂』と『浮世床』とが馬琴の作と對抗し得るは、これあるが爲であつた。風呂と床屋は人生世相の活縮圖である。嫁と姑の惡口雜言、夫婦喧嘩の噂、役者の評判は柘榴口の中に湯氣と共に湧き、殘念関子騫と古風の口癖ある道學者、昔の舞臺を得意に語る老人、とりませて賑はしきは油障子の中である。人情も風俗も一目瞭然。是に於いて、三馬はその出入の人物に就いて描寫した。あらゆる階級に屬する人の類型的性格はいとも巧にしるされた。しかも其の觀察の眼は多く缺點弱點に向つて注がれた。それから生ずる滑稽も、遂に嫁に於ける姑の苦笑であつた。これはやがて三馬の性格が然らしめる所である。その人に憎しみがあつて、人と争鬪することも屢あつたといはれてゐるのが、それである。この諷刺のより多く加味せられた點は、同じく滑稽とはいへど一九のとは異なつてゐる。されど、三馬の見は皮相にとゞまり、決して人生を呪咀するものではない。

滑稽本に於ける二大家の外、また別途の叙述をなせる者がある。瀧亭鯉丈及び梅亭金鷲がそれである。鯉丈は櫛を鬻ぎ、傍ら三味線を業とした。その著『大山道中栗毛駿馬』は『膝栗毛』の後を襲ぎ、『浮世床』第三篇は三馬の作風を模した。されど、その代表の作は『花暦八笑人』、『滑稽和合人』である。金鷲には『妙竹林話七偏人』がある。三者ともに天保年間に行はれた。これ等に描かれてゐる人物は、若隱居か、閑に苦しむ徒か、さなくば通人を以て自任する輩であつた。皆茶番狂言に巧みに、駄洒落口合に長じてゐた。太平の春の醉心地に、人生を翫弄し茶番狂言視せんとした。その態度や彼等にとつては飽くまで眞摯である。以て常人よりも優れてゐると自負した。これすでに滑稽である。まして其の企圖はいつも失策に歸して、また更に大なる滑稽を生ずるのである。幕末民衆の嬉々の聲は、つひにこの暢氣の壇上に發せざるを得なかつた。されど、滑稽諧謔も絶えず反覆せられ、笑を強ひられては、輕快の趣は逸し去つて、滑稽本は其の價値を減するのである。天保以降の作はすべてそれであつた。さらば人情本の作者は如何。かの寛政二年定信侯の洒落本を禁止するや、しばらくは皆その作を絶つて他の方面に轉じたものゝ、遊蕩の輩の要求はなほ止むことな

く、數十部の作は私に出版せられた。三馬・一九また梅暮里谷峨等の作がそれである。かの洒落本が脚色を凝らすに至つて、人情本を成したことはさきにいうた。要するに、人情本は洒落本に記載せられた遊廊の世界を廓外に及ぼし、傾城遊女に限られた人物を藝者素人にまで廣め、また洒落本の一特質であつた滑稽の趣味を除いたものである。故に、ともすると、徒に男女の痴情を細叙して、卑猥讀むに忍びないものを出すに至るは當然のことである。これまた泰平の世のはて、文明爛熟の極、人心墮落の末は、こゝに落ち着くべきであらう。これを故意にかの勸善懲惡主義に反抗するものと見る時には、また一種の興を催さざるを得ない。

人情本の作は鼻山人にはじまつた。山人は本名を細川浪二郎といひ、東里山人とも號した。幕府の家人であつた。始め京傳に従つて戯作の筆を執つたが、洒落本の體を變じて、文化十四年に、『娼妓美談離の花』、文政元年に『離の花』の後篇『廓の鶯』を作つた。これらは共に體裁は未だ洒落本であるが、内容は純然たる人情本である。文政八年には『契情肝粒志』の作があつた。これはさきに著はした洒落本を改作して、人情本となしたものである。爾來この趣向を逐ふもの漸く多く、爲永春水の如きも其の一人であつた。

春水二四四九—二五〇二本名は佐々木長次郎、教訓亭金龍山人とも號した。もと貸本屋で、中頃書賈の仲買を業とし、一時は講談師ともなつたことがある。性來小説を好み、そを耽讀したるはては、漸く戯作に志を抱いて、文政五年に草雙紙『小絲佐七紫總結』を出した。これが處女作である。はじめは三馬の門に入つて三鷺と號したが、そこには幾多の先輩があつたので、それを避けて振鷺亭二世となり、また南仙笑楚滿人の後を繼いで二代目を名乗つた。されど、未だはかくしい時評を得ず、且つ板元や貸本屋が其の名がふさはしくないといふに依つて、また春水と改めた。その改名以前圓屋賀久子といふ匿名で、中本『赤繩結紙古滿』等を著はした事もあつた。或は馬琴の舊作の讀本の火に係つて缺本せるものを板元から買ひ取つて、恣に補綴したり繪を易へたりして、新板めかして、『三國一夜物語』等を出したこともあつた。或は松亭金水・小枝繁等と合作して、『梅花春水』、『阿古義物語後篇』、『七國士傳』等を出したこともあつた。春水はもとより學問もなく見識もなく、たゞ利を貪り名を賣らうとした。その希望は天保三年(二四九二)に人情本『春色梅曆』を出すに至つて果された。その主題とする所は辰己里の藝者の達引である。遊女屋唐琴屋の養子丹次郎を主人公とし、その周圍に多くの女を配して、その痴情を盡さしめた。即ち丹次郎が悪漢のため

に謀られて家を逐はれ、本所仲の郷の佗住居に病と貧とに苦むや、もと相思の間であつた内藝者米八と仇吉とが互に實意を以て扶助する意地張、また丹次郎の許嫁であるお蝶、遊女此絲の戀着を叙してゐる。更に今紀文とうたはれた香以の父木場藤兵衛堀の清元師匠延津賀など、當時の知名の輩を探り來つて作中の人物となしたので、殊に遊び場所に賣行を擴めることが出來た。かくて板元貸本屋側の囑もあり、かたがた射利賣名のために筆を鼓して、四年に『梅曆餘興春色辰己園』を出し、五年に『春色惠の花』を出し、爾後『英對暖語』をはじめ、同趣の作殆ど三十篇を重ね、東都人情本一流の元祖と稱して、得々としてゐた。然るに、天保十三年水野忠邦の改革に於いて、人情本と唱候小冊物著作致し、右の内には婦女の勸善にも可相成と心得違致、不束之事共書顯はし、剩へ遊女放蕩の體を繪入に仕組遣し、手間賃請取候段不埒と咎められ、手鎖の刑に處せられた。こゝに春水は酒を被つて抑鬱を散じてゐたが、遂に刑期中に病歿した。

げに春水が處刑せられたのも道理あることで、その作は淫靡の筆を弄するに過ぎなかつた。米八も、仇吉も、作者は張や意氣地を特に描寫せる様にいふけれど、それは未だしきもので、到底草雙紙の女性と比せられるものではない。それでも作者はまた常に教訓を説いた。「わが著はせし草雙紙いと多く艶言情談ならざるはなけれども、いづれも婦人の赤心を盡して姪亂多淫の婦女を記せし事なし、偶々『玉川日記』のお絲が類も因果の道理を顯はして戒の用意あり」といひ、凡そ世に住む娘御達分限に過ぎたる美服を好まず、其の程々を慎みて恩と情を心にうけよなどと、惡まれ口に娘達へ意見はいつも作者が癖、狂訓亭が老婆心、なんと子供衆合點か合點かといふ。かく表には教訓めかせど、筆は一として挑撥的に趨らざるはなかつた。叙述皆實際にあり得ること以外に出でず、もし今の世態にあたらぬ場合あれば悉く夢とした。夢にして夢ならず、かくもありけんと思はるゝことは、繪組と目前の同じきを變化する所爲であると自らもいうて居る。故に、墮落した時代に迎合せることは、實に意表に出づるものがあつた。一の戀愛なく、存する所はたゞ肉慾のみ、晦淫の書といふ嘲罵はもとより免れ得ないものである。さらば文藝として全然價值のないものかといふに、遊女藝妓、處女、下女、俠客番頭、手代、若旦那などの容貌、動作、口吻を宛然描き出したその筆致は、また稀に見るところである。

春水の中本に『いろは文庫』がある。これは全く『梅曆』と別途に出で、淫猥の趣なく、赤穂義士の逸事を叙してゐる。されど、これは二世春水と號した染崎延房の代表作

であると云はれてゐる。

人情本は天保の改革を以て一頓挫を來した。まして春水が歿後の斯界は見るに足るものがなく、たゞ松亭金水一筆庵可候等の指を屈すべきものがあるのみである。もし強ひて其の人を求むる時は、春水以前に還つて、鼻山人と並稱せられた曲山人を挙げざるを得ない。その著『假名文章娘節用』は小三金五郎の情事を記して、世に愛誦せられた一つであつた。

第十一章 合巻物と種彦

寛政の洒落本禁止が文壇に及ぼした影響は頗る大きくて、幾多の變化を起さしめた。その一は草雙紙に於ける敵討物の流行である。されど、その趨勢はすでに南仙笑楚満人の筆によつて創められた。楚満人は江戸芝の書肆で、戯作の才があり、天明三年に『敵討三味線由來』を作つた。更に寛政七年(一四五五)に『敵討義女英』を出すや大に行はれ、敵討物中興の稱を得るに至つた。その著作前後三百種多くは敵討物で、草雙紙ばかりでなく讀本にも作つた。されど、傑出した作は一種もないに拘はらず、とにかくに時好の中心となつた。『戯作外題鑑』によれば、享和四年の條には、敵討の本いよ

いよ行はれ、京傳馬琴も此の時より作し、また敵討物は今年出版の三分二を占めて居るといひ、文化二年の條には、今春いろく敵討物多く、戯作は十四五に過ぎず、翌年よりは残らず敵討物となつたというてゐる。その隆盛の狀が観察される。

敵討物の性質として、脚色も趣向も複雑を加へ、随つて從來長きも三巻續に過ぎなかつたものが、寛政の末から五巻物行はれ、享和から七巻九巻の多きに至つた。されど、皆別冊に製本し、表紙貼外題を添へた。享和二年に京傳は其の作『通氣知之錢光記』『吞込多靈寶縁起』『賢愚湊錢湯新話』『枯木花大悲利益』の四部を四季に配して出版し、上紙摺三冊合巻とし、表紙はもとの黄表紙に犬を黒摺にして出した。かゝる嗜好は漸く助長せられて、後四年目の文化三年(二四六六)には、三馬が『淺草觀音雷太郎強惡物語』を出すに及んだ。これは十巻物を上下の二冊に分けたもので、また京傳の試みの如きものではない。その表紙貼外題の數も繁からず、製本も便に、費用も減少することとて、大に行はるゝに至つた。これ所謂合巻物の嚆矢である。合巻物の黄表紙と異なる所は、單に體裁の上のみではなかつた。讀本の影響は、その滑稽と洒落とを棄てて、教訓と脚色の複雑とを求め、世話は時代に轉じ、輕快は濃艶に代つた。更に之を讀本に比する時は、それが繪雙紙から發達したこととて、裝釘の美を以てまさり、挿繪